

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 187

# 塩 納 成 遺 跡

主要地方道佐伯長船線（美作岡山  
道路）道路改築に伴う発掘調査3

2005

岡山県教育委員会



調査地上空写真



# 序

本報告書には、赤磐郡瀬戸町塩納成遺跡の発掘調査結果を収載しました。

この調査は、県東部の発展に資するために計画された、南北を結ぶ美作岡山道路建設に伴い平成9年度から実施しています。平成9年度から同13年度にかけて発掘調査を実施しました遺跡については、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174・178として、平成15年度までに刊行しました。

今回報告します塩納成遺跡は、平成14年度に実施した確認調査と同15年度の全面調査にかか  
るもので、関係する発掘調査報告書としては、3冊目の刊行になります。

岡山県東南部に位置する瀬戸町には、町の東部を岡山県の三大河川の一つであります吉井川が流れています。古くからこれを利用した河川交通が盛んで、材料となる良質の粘土にも恵まれ、鎌倉時代には東大寺再建にあたって、瓦を供給したことで著名な国指定史跡万富東大寺瓦窯跡が営まれています。塩納成遺跡は、この瓦窯跡から直線距離で約1.5km北西に位置しており、同時代の遺物とともに掘立柱建物などが確認されています。

しかしながら、主体となる時代は弥生時代中期で、竪穴住居や掘立柱建物といった集落遺構が多数確認されました。なかでも、竪穴住居址の一つからは石器の製作を行ったことを示す遺物が多数出土し、これまでよくわかっていなかった吉井川下流域にあって、弥生時代集落の様子を窺い知る良好な資料となりました。

この報告書が学術研究に寄与できるばかりでなく、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の研究のための資料として広く役立つならば幸いと存じます。

発掘調査並びに報告書作成にあたって、岡山県東備地方振興局、瀬戸町教育委員会、瀬戸町役場をはじめ、関係各位並びに地元の方々から賜りました多大な御指導と御協力に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成17年2月

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 正 岡 睦 夫

# 例 言

- 1 本書は、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県東備地方振興局の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、塩納成遺跡しおのうなるの発掘調査報告書である。
- 2 塩納成遺跡は、岡山県赤磐郡瀬戸町塩納379-1外に所在する。
- 3 確認調査は、平成14年12月1日～12月31日の期間に岡山県古代吉備文化財センター職員物部茂樹・福井 優が行い、発掘調査は、平成15年度に同文化財センター職員井上 弘・杉山一雄が担当して実施した。調査面積は確認調査が62㎡、発掘調査が2,160㎡である。
- 4 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、「美作岡山道路建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、次の方々に委員を委嘱した。保護対策委員各位からは、終始有益な御指導と御助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。
  - 土居 徹（津山市田邑公民館館長）
  - 間壁 忠彦（倉敷考古館館長）
  - 松木 武彦（岡山大学文学部助教授）
  - 野崎 貴博（岡山大学文学部助手）
- 5 本報告書の作成は平成15年度に実施し、杉山が担当した。
- 6 本書の執筆は、松本和男・物部・杉山が分担し、文責は目次に示した。全体の編集は杉山が行った。
- 7 本報告書に関わる出土遺物のうち、必要に応じて鑑定・分析を次の諸氏及び機関に依頼し、有益な御教示をいただいた。また、そのうちのいくつかについては玉稿を賜った。記して感謝の意を表す。
  - ・石器の石材同定 妹尾 護（倉敷芸術科学大学国際教養学部）
  - ・石器石材の蛍光X線分析 白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
  - ・鉄滓の肉眼同定 大澤 正己（たたら研究会）
  - ・鉄滓の分析 株式会社 九州テクノ・リサーチ
- 8 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 9 本報告書に関連する出土遺物及び図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

# 凡 例

- 1 本書に用いた高度値は標高である。また、方位は第5・10・12・74・77図は平面直角座標第V系（世界測地系）の座標北で、第11図以後の遺構個別図は磁北である。調査地における磁北は西偏7°10′である。
- 2 報告書抄録に記載した経緯度は、日本測地系に準拠している。
- 3 本書に掲載した遺構・遺物の縮尺は、基本的に以下のとおり統一している。  
遺構 竪穴住居・竪穴・掘立柱建物・段状遺構・柱穴列：1/80 土壇：1/30 溝：1/30  
遺物 土器：1/4 瓦：1/3 土製品：1/2 石器：1/2・1/3・1/8  
鉄器・銅製品：1/2
- 4 本書の遺構全体図中などにおいて、遺構名を下記のとおり省略して表記している。  
竪穴住居：住 掘立柱建物：建 段状遺構：段 土壇：土
- 5 本書に掲載した遺物は、土器、土製品、石器、鉄器・銅製品に分類し、それぞれについて連番とし、土製品、石器、鉄器・銅製品については番号の前に下記のとおり記号を冠している。  
土製品：C (Clay) 石器：S (Stone) 鉄器・銅製品：M (Metal)
- 6 本書に掲載した土器のうち、実測図の中軸線両側に白抜きがあるものは、小片のため口径の不確実なものである。
- 7 本書第2図に使用した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「万富」「備前瀬戸」を複製・加筆したものである。また、沖積地の範囲は、内外地図株式会社発行の光野千春・杉田宗満共編「岡山県地質地図1/100,000」昭和54年を参考にした。
- 8 本書第3図に使用した地図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「和気」を複製・加筆したものである。
- 9 本書に掲載した遺構断面図において、地山表現はA・Bの2種類を以下のように使い分けている。



第11～75図：A=岩盤・無遺物層（自然堆積層）、B=古い遺構埋土

第78～93図：A=古代以降の基盤層

- 10 本書に用いた時代・時期区分については、一般的な政治史区分に準拠した。弥生時代の時期区分については下記の文献を参考にし、菰池式=中期中葉、前山Ⅱ式=中期後葉、仁伍式=中期末葉、上東式=後期前葉として記載している。

## 参考文献

- 岡山県教育委員会「百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』1982
- 河合 忍「備前・備中地域」『弥生中期土器の併行関係』（第53回埋蔵文化財研究集会発表要旨）埋蔵文化財研究会 2004

# 目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 遺跡の位置と環境 .....	(杉山) .....	1
第2章 調査の経緯と経過 .....		3
第1節 発掘調査の契機と推移 .....	(松本) .....	3
第2節 調査及び報告書作成の体制 .....	(杉山) .....	4
第3節 調査及び報告書作成の経過 .....	(杉山) .....	5
1 調査経過の概要 .....		5
2 報告書作成経過の概要 .....		6
3 日誌抄 .....		6
第4節 確認調査の概要 .....		6
1 概要 .....	(杉山) .....	6
2 平成14年度確認調査の概要 .....	(物部) .....	7
3 平成15年度確認調査の概要 .....	(杉山) .....	9
4 遺跡の地形復元 .....	(杉山) .....	10
第3章 発掘調査の概要 .....	(杉山) .....	11
第1節 遺跡の概要 .....		11
第2節 弥生時代の遺構と遺物 .....		12
1 概要 .....		12
2 竪穴住居 .....		12
3 掘立柱建物 .....		26
4 段状遺構 .....		31
5 柱穴列 .....		33
6 土壇 .....		34
7 溝 .....		36
8 その他の遺構 .....		39
9 遺構に伴わない遺物 .....		40
第3節 古墳時代後期の遺構と遺物 .....		43
1 概要 .....		43
2 段状遺構 .....		44
第4節 古代から中世の遺構と遺物 .....		44

1	概要	44
2	竪穴	44
3	掘立柱建物	46
4	柱穴列	51
5	溝	53
6	遺構に伴わない遺物	54
第4章	まとめ	(杉山) 57
1	遺構について	57
2	弥生時代の石器について	58
付載1	塩納成遺跡出土石器石材について	(白石) 59
付載2	塩納成遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査	(大澤) 63
遺構・遺物一覧		
図版		
報告書抄録		
奥付		

## 目 次

第1図	遺跡の位置 (1/3,000,000)	1	第14図	竪穴住居2・3 (1/80)	
第2図	調査地周辺の地形と主要遺跡分布 (1/25,000)	2		・出土遺物① (1/2・1/3・1/4)	14
第3図	道路予定路線と対象遺跡 (1/80,000)	3	第15図	竪穴住居2・3出土遺物② (1/2)	15
第4図	調査地の位置 (1/5,000)	4	第16図	竪穴住居2・3出土遺物③ (1/2)	16
第5図	確認トレンチの配置 (1/1,000)	7	第17図	竪穴住居4・5 (1/80)	
第6図	確認トレンチT1~T10 (1/100)	8		・出土遺物① (1/2・1/4)	17
第7図	確認トレンチ出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	9	第18図	竪穴住居4・5出土遺物② (1/2・1/3)	18
第8図	確認トレンチT15 (1/100)	10	第19図	竪穴住居6・7 (1/80)・変遷 (1/250)	19
第9図	調査地土層縦断模式図 (1/250)	10	第20図	竪穴住居6・7出土遺物① (1/4)	20
第10図	検出遺構全体と地形縦断面 (1/400)	11	第21図	竪穴住居6・7出土遺物② (1/4)	21
第11図	竪穴住居1 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/4)	12	第22図	竪穴住居6・7出土遺物③ (1/2)	21
第12図	弥生時代の遺構全体 (1/300)	13	第23図	竪穴住居6・7出土遺物④ (1/2・1/8)	22
第13図	竪穴住居2・3の変遷 (1/250)	13	第24図	竪穴住居8 (1/80)	22

第25図 竪穴住居8出土遺物 (1/2・1/4).....	23	第61図 土壇9 (1/30).....	36
第26図 竪穴住居9 (1/80).....	23	第62図 溝1～4 (1/30).....	36
第27図 竪穴住居10 (1/80)・出土遺物① (1/4).....	23	第63図 溝1・2出土遺物 (1/4).....	37
第28図 竪穴住居10出土遺物② (1/2).....	24	第64図 溝3出土遺物 (1/4).....	37
第29図 竪穴住居11 (1/80)・出土遺物 (1/3・1/4).....	24	第65図 溝4出土遺物 (1/2・1/3・1/4).....	38
第30図 竪穴住居12 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	25	第66図 溝5 (1/30).....	38
第31図 竪穴住居13・14 (1/80).....	25	第67図 溝6・7 (1/30).....	38
第32図 竪穴住居13・14出土遺物 (1/2・1/3・1/4).....	26	第68図 くぼみ出土遺物 (1/2・1/4).....	39
第33図 竪穴住居15 (1/80).....	26	第69図 斜面堆積 (1/60)・出土遺物① (1/3).....	39
第34図 掘立柱建物1 (1/80)・出土遺物 (1/2).....	27	第70図 斜面堆積出土遺物② (1/2・1/4).....	40
第35図 掘立柱建物2 (1/80)・出土遺物 (1/3).....	27	第71図 遺構に伴わない遺物① (1/4).....	40
第36図 掘立柱建物3 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/4).....	28	第72図 遺構に伴わない遺物② (1/2).....	41
第37図 掘立柱建物4 (1/80).....	29	第73図 遺構に伴わない遺物③ (1/3).....	42
第38図 掘立柱建物5 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/4).....	29	第74図 古墳時代後期の遺構全体 (1/300).....	43
第39図 掘立柱建物6 (1/80)		第75図 段状遺構12 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/4).....	44
・出土遺物 (1/2・1/3・1/4).....	30	第76図 竪穴1出土遺物 (1/4).....	44
第40図 段状遺構1・2 (1/80).....	31	第77図 古代から中世の遺構全体 (1/300).....	45
第41図 段状遺構3 (1/80).....	31	第78図 竪穴1 (1/80)・火処 (1/40).....	45
第42図 段状遺構4 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	31	第79図 掘立柱建物7と柱穴列4 (1/80).....	46
第43図 段状遺構5・6 (1/80).....	32	第80図 掘立柱建物8 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	47
第44図 段状遺構7 (1/80).....	32	第81図 掘立柱建物9 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/4).....	47
第45図 段状遺構8 (1/80).....	32	第82図 掘立柱建物10 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	48
第46図 段状遺構9 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	32	第83図 掘立柱建物11 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	48
第47図 段状遺構10 (1/80)・出土遺物 (1/2).....	32	第84図 掘立柱建物12と柱穴列5 (1/80)	
第48図 段状遺構11 (1/80).....	32	・出土遺物 (1/2・1/4).....	49
第49図 柱穴列1 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/3).....	33	第85図 掘立柱建物13と柱穴列6 (1/80).....	50
第50図 柱穴列2 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	33	第86図 掘立柱建物14 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	50
第51図 柱穴列3 (1/80).....	33	第87図 掘立柱建物15 (1/80).....	51
第52図 柱穴列3出土遺物 (1/2・1/4).....	34	第88図 掘立柱建物16 (1/80).....	51
第53図 土壇1 (1/30).....	34	第89図 柱穴列7～9 (1/80).....	52
第54図 土壇2 (1/30)・出土遺物 (1/4).....	34	第90図 柱穴列10 (1/80).....	53
第55図 土壇3 (1/30).....	34	第91図 溝8 (1/30).....	53
第56図 土壇4 (1/30).....	35	第92図 溝9～11 (1/30)・出土遺物 (1/2).....	53
第57図 土壇5 (1/30).....	35	第93図 溝12 (1/30).....	53
第58図 土壇6 (1/30)・出土遺物 (1/4).....	35	第94図 遺構に伴わない遺物① (1/2・1/3).....	54
第59図 土壇7 (1/30)・出土遺物 (1/4).....	35	第95図 遺構に伴わない遺物② (1/4).....	55
第60図 土壇8 (1/30).....	36	第96図 遺構に伴わない遺物③ (1/4).....	56

# 卷頭図版目次

調査地上空写真

## 図版目次

図版1-1 調査区遠景	図版6-1 土壙2
-2 遺構全景	-2 土壙6
図版2-1 下段西半遺構全景	-3 土壙7
-2 下段東半遺構全景	図版7-1 竪穴1
-3 最下段遺構全景	-2 掘立柱建物10
図版3-1 竪穴住居1~3	-3 柱穴列7・8〈西半〉
-2 竪穴住居4・5	図版8 T10、竪穴住居1・3・7、土壙6出土土器
-3 竪穴住居10	図版9 溝2・4、斜面堆積、掘立柱建物8・14、包含層出
図版4-1 竪穴住居6~8	土土器・瓦
-2 竪穴住居7床面遺物出土状況	図版10-1 出土土製品
-3 竪穴住居7床面石包丁出土状況	-2 出土鉄器・銅製品
図版5-1 掘立柱建物6〈西半〉	図版11 出土石器①
-2 掘立柱建物6〈東半〉	図版12 出土石器②
-3 段状遺構1・2	図版13 出土石器③
	図版14 出土石器④
	図版15 出土石器⑤

## 表目次

竪穴住居一覧	溝一覧
掘立柱建物一覧	土器・瓦一覧
段状遺構一覧	土製品一覧
柱穴列一覧	石器一覧
土壙一覧	鉄器・銅製品一覧

## 第1章 遺跡の位置と環境

塩納成遺跡は、岡山県の東部、吉井川下流右岸の赤磐郡瀬戸町塩納字東畑に所在する。遺跡は標高350mの大盛山南裾の緩斜面に位置し、南側に大きく開けた沖積地を望む。遺跡の営まれた海拔40m前後の丘陵は、古生代の堆積物であるシルト岩、砂岩を基盤とし、一部流紋岩や花崗岩がみられる。このため、南部に広がる沖積地は、吉井川の氾濫土砂だけでなく周囲の山地からの流出物で谷が埋まりながら徐々に形成されている。

瀬戸町内には旧石器時代以降の遺跡が数多く存在する。しかしながら、山陽自動車道建設や圃場整備などで発掘調査が行われているものの、採集品による確認が多く、遺跡の詳細については不明確なところが多い。

今回調査を行った塩納地区では、丘陵部や奥まった谷部で旧石器から縄文時代の石器が採集されている。1991年の瀬戸町教育委員会の調査の際に塩納成遺跡で旧石器が出土している。

弥生時代には、まだ沖積地には遺跡がみられず、やはり丘陵部周辺で中期以降の弥生土器が採集される。後期に入ると経塚1号墳で特殊壺（器台？）が採集されており、周辺の丘陵上にも仲尾古墳群や新田山古墳群、片山古墳群で方形台状墓と考えられる墳墓が築かれる。この地区は、吉井川下流に位置するが、川を遡ると津山を中心とした美作地域に、上陸して陸路西進すると用木山遺跡などのある山陽町へ容易に交通が可能で、河川を利用した水運でこの地区が重要な位置を占めていたことが、集落の拡大に影響していたと考えられる。

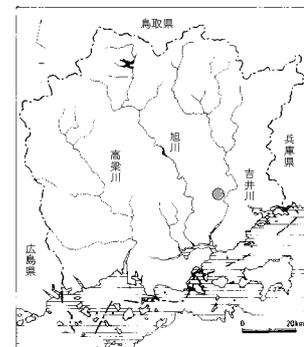
古墳時代になると、前代同様丘陵上に古墳群が築かれるが、該期の集落は明らかになっていない。この状況は後期も変わらず、今回の調査でも少量の須恵器片が出土しているが、集落については依然不明確だが、横穴式石室を持つ古墳は沖積地を囲む丘陵上に広く築かれている。

飛鳥時代に入ってようやく吉井川流路が安定し、居住が可能になったと推察され、沖積地においても散布地が多くみられるようになる。沖積部に寺院が造られ、調査地に近接して、白鳳期創建で法隆寺式の伽藍配置が推定される吉岡廃寺をはじめとして、奈良時代以降も寺院造営が盛んに行われ、瓦窯跡も確認されている。

鎌倉時代になると、東大寺に献納する瓦を焼いたことで著名な万富東大寺瓦窯が営まれる。そして室町時代以降、特に後半以降は山頂部から平地にかけて城館跡が目立つようになり、本地区の重要性を物語っている。北側山頂部には、大盛山城跡や妙見山城跡、保木城山城跡などがあり、低丘陵や平地部には天神城跡、宗堂城山城跡、塩納大日遺跡といった、居館跡もしくは平城跡が残されている。

### 参考文献

- 瀬戸町誌編纂委員会『瀬戸町史料集』昭和60年 瀬戸町  
 瀬戸町誌編纂委員会『瀬戸町誌』昭和61年 瀬戸町



第1図 遺跡の位置  
 (1/3,000,000)



第2図 調査地周辺の地形と主要遺跡分布 (1/25,000) - 網点は沖積地を示す

○ : 散布地      ○ : 城館跡・古墳群・窯跡      □ : 寺院跡      ● : 古墳

1. 妙見山城跡(室町) 2. 首ククリ遺跡(古墳) 3. 弥上古墳(古墳-陶棺出土) 4. 婦本路古墳群(古墳-6基確認) 5. 尾坂北古墳(古墳-陶棺出土) 6. 辛音口古墳(古墳-陶棺出土) 7. 辛音口製鉄遺跡(時期不明) 8. 辛音口北窯跡(奈良?) 9. 天下山遺跡(奈良?-寺?) 10. 辛音口窯跡(奈良?) 11. 大盛山城跡(室町) 12. とんぎり山古墳(古墳) 13. 仲尾古墳群(古墳-9基確認) 14. 虬古墳(古墳) 15. 山の谷古墳(古墳) 16. 保木城山城跡(室町) 17. 岩尾古墳群(古墳-30基確認) 18. 丸尾奥池遺跡(平安・鎌倉) 19. 松尾窯跡(鎌倉) 20. 保木池じり遺跡(室町?) 21. 保木西遺跡(室町?) 22. 保木風呂屋遺跡(鎌倉-館跡か) 23. 西ヶ坪古墳(鎌倉・室町) 24. 保木城の岩跡(室町) 25. 経塚墳墓群(弥生-特殊壺・特殊器台出土) 26. 東人寺瓦窯跡(鎌倉) 27. 万富上の山窯跡(鎌倉) 28. 上の山遺跡(弥生~室町) 29. 千種山遺跡(弥生~江戸) 30. 散布地(飛鳥~室町) 31. 大井西池遺跡(弥生・奈良-三彩陶器出土) 32. 王了寺館跡(弥生・鎌倉) 33. 五反河内製鉄遺跡(時期不明) 34. 吉岡廃寺(奈良) 35. 森井池北遺跡(鎌倉・室町) 36. 塩納成遺跡(旧石器~室町) 37. 寺跡(奈良) 38. 勘定口2号墳(古墳-陶棺出土) 39. 七ツ石1号墳(古墳) 40. 上の池遺跡(弥生~奈良-陶棺出土) 41. 塩納大日遺跡(平安・鎌倉-館跡?) 42. 宗堂山城跡(室町・江戸) 43. 上の山1・2号(古墳) 44. 天神城跡(室町) 45. 妙興廃寺(飛鳥・奈良) 46. 夏井遺跡(平安~江戸) 47. 新田山古墳群(弥生~古墳-5基確認) 48. 馬塚遺跡(古墳・鎌倉) 49. 片山古墳群(弥生~古墳-9基確認) 50. 散布地(古代) 51. 妙見下廃寺(飛鳥・奈良) 52. 五反田廃寺(飛鳥) 53. 寺山古墳群(古墳-2基確認) 54. 薬菰古墳群(古墳-5基確認)

## 第2章 調査の経緯と経過

### 第1節 発掘調査の契機と推移

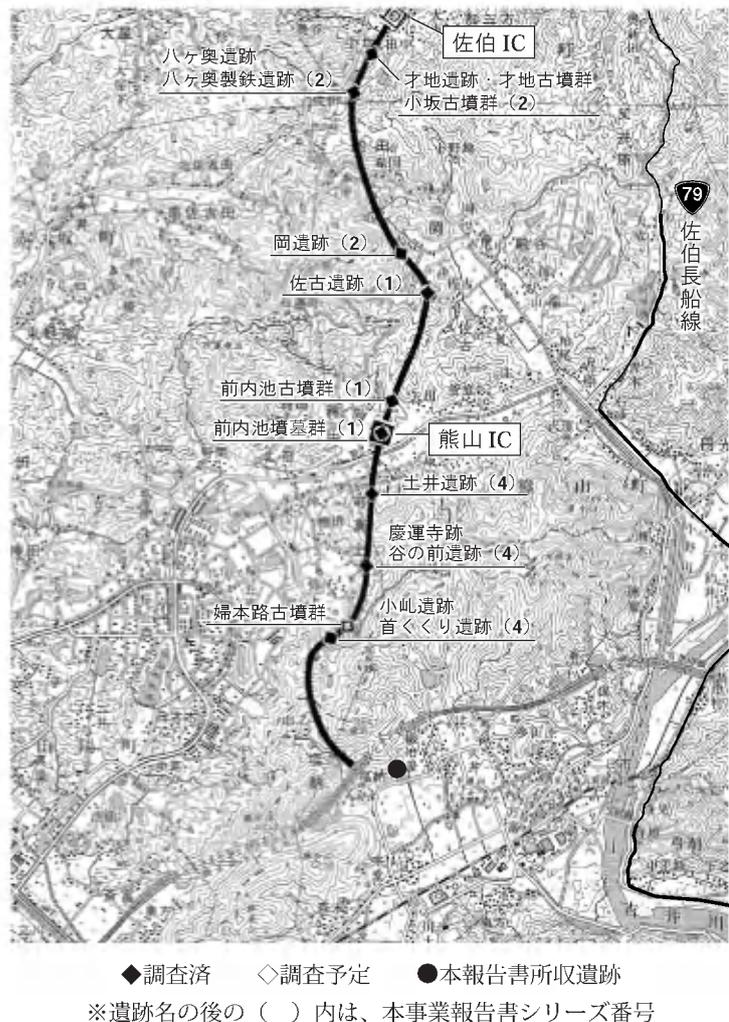
主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に係る瀬戸町塩納地区の路線内には、多くの墓地が存在するため墓地移転の必要が生じた。

平成13年度になって、県文化課は建設担当部局の東備地方振興局（以下、東備局）から墓地移転計画及び予定地の概要について報告を受けたが、移転予定地は周知の遺跡（塩納成遺跡）であるため、工事着手前に確認調査を実施する必要がある旨の指導を行い、今後さらに具体的な協議を行うこととした。

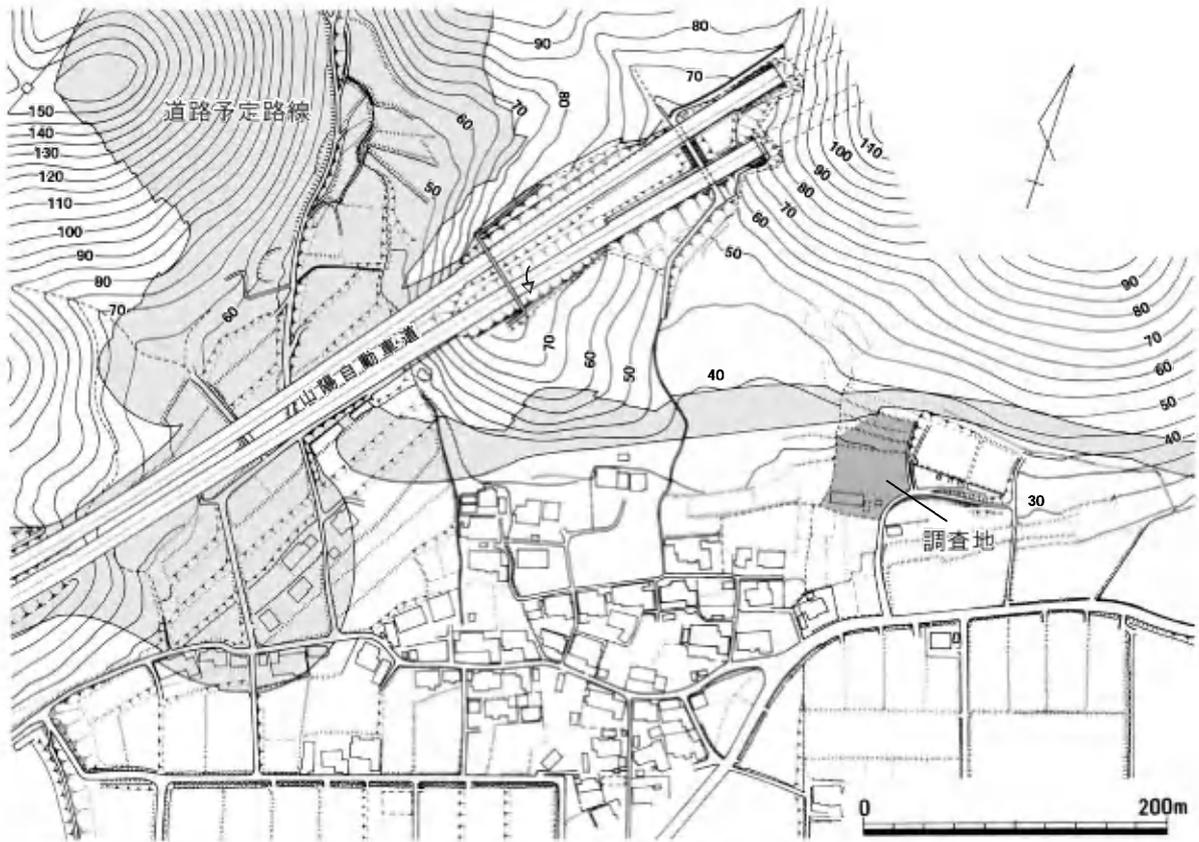
平成13年度末の協議では、東備局から最速スケジュールで諸手続きが進行すれば、平成14年度中の発掘調査を依頼する可能性があるという報告を受けるとともに、集団での墓地移転に関する説明を受けた。それによれば、墓地造成工事の発注は瀬戸町であった。そうであるならば、調査は原則として町教育委員会の対応となるため、町と協議するように要請する。その後の協議の結果、この墓地移転は岡山県が事業用地を取得するために瀬戸町と協定を交

わし、墓地移転の施工を町へ依頼したものであり、一義的には美作岡山道路事業が墓地移転の母胎の事業であることから、確認調査及び全面調査についても県事業として実施することになった。

その後、用地買収が順調に進捗し、確認調査が平成14年度後半には実施可能となったため、東備局に対して調査開始に向けての地元調整を依頼するとともに、平成14年11月19日に開催された平成14年度第2回目の「美作岡山道路建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」で墓地移転に伴う確認調査を12月2日から開始することを報告した。



第3図 道路予定路線と対象遺跡（1/80,000）



第4図 調査地の位置（1/5,000）

## 第2節 調査及び報告書作成の体制

本報告書に所収の塩納成遺跡は、平成14年度に確認調査、平成15年度に全面調査と整理・報告書作成を実施した。次にその体制を記す。

平成14年度

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

次長 三浦 一男

文化課

課長 西山 猛

課長代理 松本 和男

(埋蔵文化財係長)

課長代理 宮田 正彦

文化財保護主任 尾上 元規

主事 浜原 浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長 藤川 洋二

〈総務課〉

課長 安西 正則

課長補佐(総務係長) 田中 秀樹

主任 小坂 文男

〈調査第三課〉

課長 柳瀬 昭彦

課長補佐(第三係長) 岡田 博

文化財保護主幹 光永 真一

文化財保護主事 物部 茂樹

(調査担当)

主事 福井 優

(調査担当)

平成15年度

岡山県教育委員会		次 長	藤川 洋二
教 育 長	宮野 正司	文化財保護参事	松本 和男
岡山県教育庁		〈総務課〉	
次 長	三浦 一男	課 長	中田 哲雄
文化財課		課長補佐（総務係長）	笏本 弘忠
課 長	西山 猛	主 任	小坂 文男
課長代理	田村 啓介	〈調査第三課〉	
課長補佐		課 長	柳瀬 昭彦
（埋蔵文化財係長）	平井 泰男	課長補佐（第三係長）	井上 弘
文化財保護主任	尾上 元規		（調査担当）
主 事	浜原 浩司	文化財保護主事	杉山 一雄
岡山県古代吉備文化財センター			（調査・整理担当）
所 長	正岡 睦夫		

調査及び報告書作成協力者

稲田孝司（岡山大学文学部）、岡本芳明（瀬戸町教育委員会）、河本 清（くらしき作陽大学食文化学部）、竹広文明（広島大学文学部）、村上恭通（愛媛大学文学部）

### 第3節 調査及び報告書作成の経過

#### 1 調査経過の概要

塩納成遺跡は、平成3年度に瀬戸町教育委員会により、今回墓地造成工事の対象となる地区の東に隣接した斜面地において発掘調査が行われていた。その際、旧石器時代と弥生時代中期から中世にわたる遺構・遺物が確認されていた。このため、平成14年度に工事対象地区全体に10本のトレンチを設定し確認調査を実施した。その結果、対象地全域で弥生時代中期から中世の遺物が出土し、竪穴住居や溝などの遺構も確認され、平成15年度に全面調査を実施することになった。

全面調査は、平成15年4月から調査員2名で9月までの半年間行う予定であったが、2ヶ月遅れて6月からの開始となった。調査は、排土場所と進捗状況に合わせて、I～IV区に分割して実施した。平成15年度の確認調査では、対象地区南端の確認が行えていなかったが、T6を設定した段以下が緩斜面になることから、当初から南端についても調査対象として含めた。弥生時代の基盤層下層については、I区にT11～T13を設定して、旧石器包含層が形成されていないことを確認した。

牛舎の建つIV区は、平成16年3月、建物が移動した後に重機によりトレンチ（T14～T16）を掘削したところ、T15において中世の包含層と弥生時代から中世の柱穴が確認され、遺構が良好に残存することが明らかとなった。この確認成果を基に、瀬戸町役場と瀬戸町教育委員会が協議し、設計変更を行い現状で遺跡を保存することとなった。また、対象区内にある墓地については、調査中には移動できないため、工事に入った際に文化財課によって立会調査を実施することにした。

## 2 報告書作成経過の概要

報告書作成は、平成15年11月から平成16年3月まで調査員1名が専従し、文化財センターにおいて行った。

検出した遺構には、竪穴住居、段状遺構、土壇、溝と多数のピットがある。ピットについては、調査時に掘立柱建物や柱穴列としてのまとまりが認識できたものが僅かであったため、整理作業時に埋土と深さ、間隔などを参考にまとまりを掴むべく努力した。

出土遺物は、土器類と土製品、石器、金属器などコンテナ約50箱で、それらのうち10箱が石器で占められる。石器については、残核や剥片・碎片が竪穴住居中などにまとまって出土しており、石器製作址と考えられることから、石器間と遺構間での接合作業を随時行った。

## 3 日誌抄

平成14年12月2日(月) 確認調査トレンチ掘削開始。	8月22日(金) I・II区東半重機埋戻し終了。III区調査開始。
12月18日(水) 掘削終了。埋め戻し開始。	8月25日(月) II区西半重機表土掘削開始。
12月24日(火) 埋め戻し終了。	8月28日(木) II区西半表土掘削終了。
12月25日(水) 現場撤収。	塩納地区子供会現場見学。
平成15年6月2日(月) I区重機表土掘削。	9月16日(火) II区南拡張区重機表土掘削。
T13掘下げ。	9月22日(月) III区調査終了。
6月3日(火) II区東半重機表土掘削。	9月29日(月) ラジコン・ヘリによる空中写真撮影。
6月5日(木) T11・12掘下げ。	10月1日(水) III区拡張区重機表土掘削、調査開始。
6月9日(月) 現場立上げ。	10月2日(木) III区拡張区調査終了。
6月10日(火) I区調査開始。	10月10日(金) II区調査終了。
6月23日(月) II区調査開始。	現場資材撤収。
7月8日(火) I区調査終了。	10月21日(火) 第2回対策委員会開催。
7月28日(月) III区西半重機表土掘削開始。	平成16年2月6日(金) 第3回対策委員会開催。
7月29日(火) III区西半重機表土掘削終了。	3月16日(火) IV区確認調査実施。
8月5日(火) 第1回対策委員会開催。	
8月18日(月) III区東半重機表土掘削開始。	
8月19日(火) III区東半重機表土掘削終了。	
8月20日(水) I・II区東半重機埋戻し開始。	

## 第4節 確認調査の概要

### 1 概要

調査対象地は、斜面の中位以上は畑や果樹園として利用されているが、下位は竹林や、牛舎と小屋、祠といった建物があるため、平成14年度には斜面中位以上に人力でトレンチ10本の調査を実施した。

斜面下位については、平成15年度の全面調査開始後に重機によって、竹林部分に3本、建物解体後にトレンチ3本の掘削を行った。

## 2 平成14年度確認調査の概要

事業対象地は、周知の遺跡である塩納成遺跡の範囲内にあることから、遺跡の広がりや残存状況を確認するため、平成14年の11月から12月にかけて確認調査を実施した。対象地は、階段状の造成がなされた山麓の緩斜面で、調査前は畑地や果樹園として利用されていた。トレンチは、対象範囲の東縁部にT1～T4、中央部にT5・T9・T10、西縁部にT6～T8をそれぞれ斜面上方から下方へおよそ一直線になるように設定した。南端部の最下段は密集した竹林と牛舎があるため、すぐ上段に配置したT3・6・10の状況から判断することにした。なお、トレンチの掘削は人力で行い、調査終了後は埋め戻した。

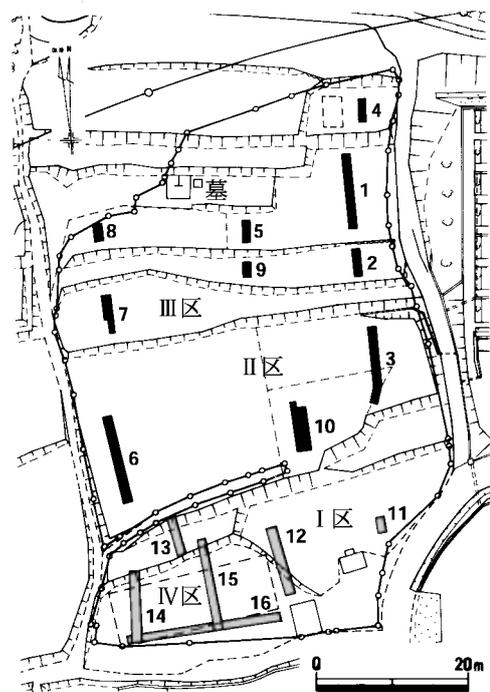
調査の結果、暗渠が集中していたT5を除くすべてのトレンチで、灰色を呈する弥生時代中期頃の包含層を確認した。包含層は、近世以降の畑地造成による改変を受けており、各畑地の山側は削平されているが、盛土部分には良好に残っていた。そして、これらの包含層は、今回調査範囲の南縁に当たるT3・T6・T10において、それぞれの南端で厚く堆積する状況が確認されたことから、南の竹林部分にも延びていると判断でき、本来は事業対象範囲全体に広がっていたものと考えられた。

遺構はトレンチ10本のうち6本で検出された。柱穴5個、溝3条、竪穴住居1軒である。T3では削平部分でも柱穴が検出された。時期は遺物や埋土の特徴から、弥生時代中期と考えられる。

遺物は、弥生土器が整理用コンテナ2箱、須恵器、備前焼、石斧2点、砥石1点、サヌカイト剥片多数、鉄製鏝1点、炉壁状の焼土塊などがあり、弥生土器はすべてのトレンチから出土した。相対的に調査範囲の斜面上方で少なく、下方ほど多い傾向にある。弥生土器はほとんど摩滅しておらず、遠くから移動したものではないと考えられた。

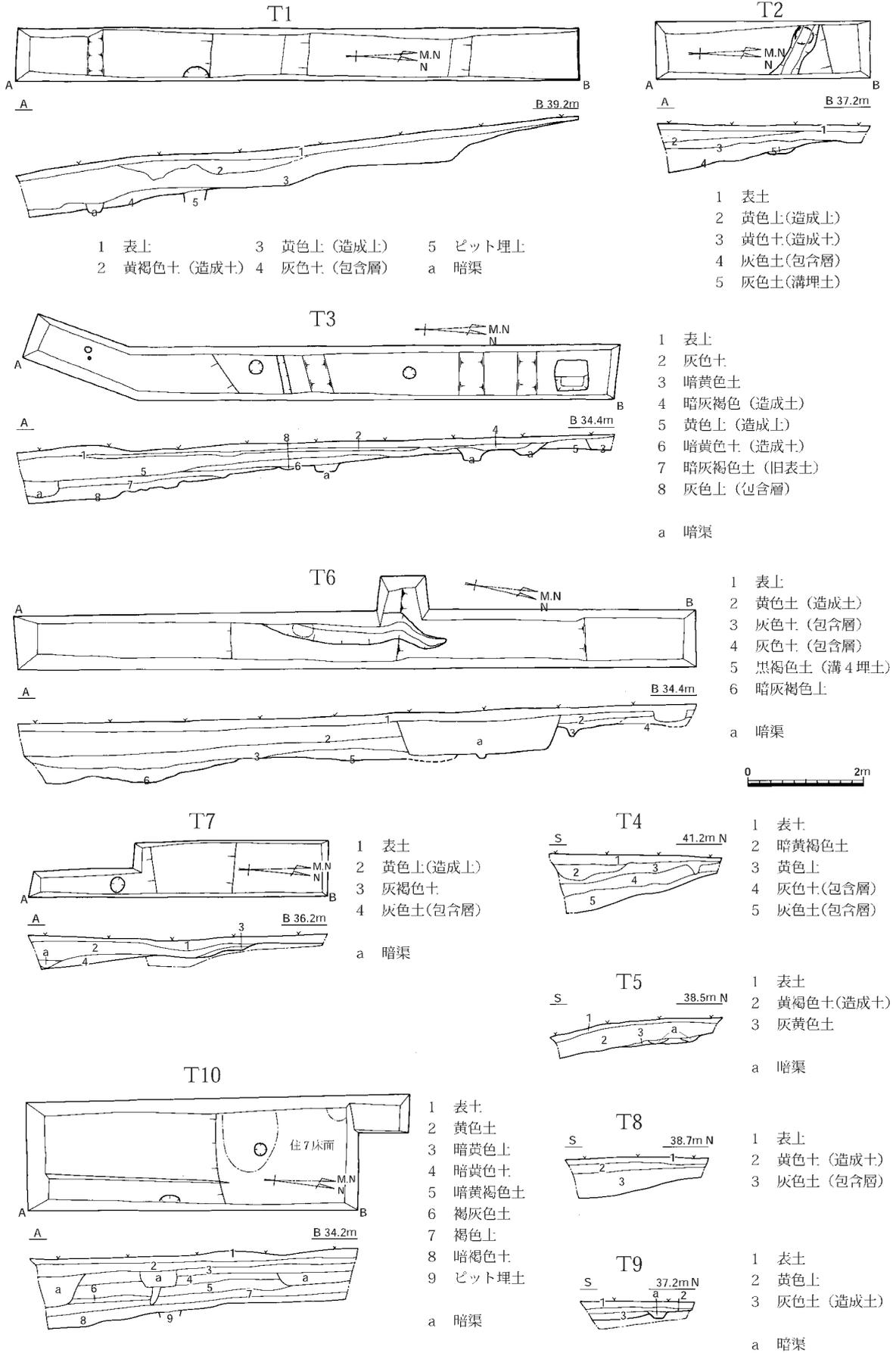
以上のことから、畑地造成によって部分的に削平を受けているものの、竪穴住居や掘立柱建物などで構成される弥生時代の集落が対象範囲全域に広がっていると判断され、また、中世の遺構も存在する可能性が高く、対象地全域の発掘調査の必要性が認められた。

第7図には確認調査で出土した、遺構に伴わない遺物を掲載した。1～3・5・6、10～13は弥生時代中・後期の土器で包含層から出土した。4カマド、7土師質土器羽釜、8瓦質土器羽釜、9備前焼播鉢およびS1流紋岩製砥石は、畑地造成の際の掘削土中から出土したもので、古代末から中世にかけての時期が考えられる。14は凹面が布目、凸面が格子目タタキの平瓦で、近世以降の暗渠の礫に混じっていた。S2・S3も同様に暗渠の礫として使用されたもので、S2は珩岩製太形蛤刃石斧の基部で、敲打行程後部分的に研磨している。S3は緑色片岩製柱状片刃石斧で風化が著し

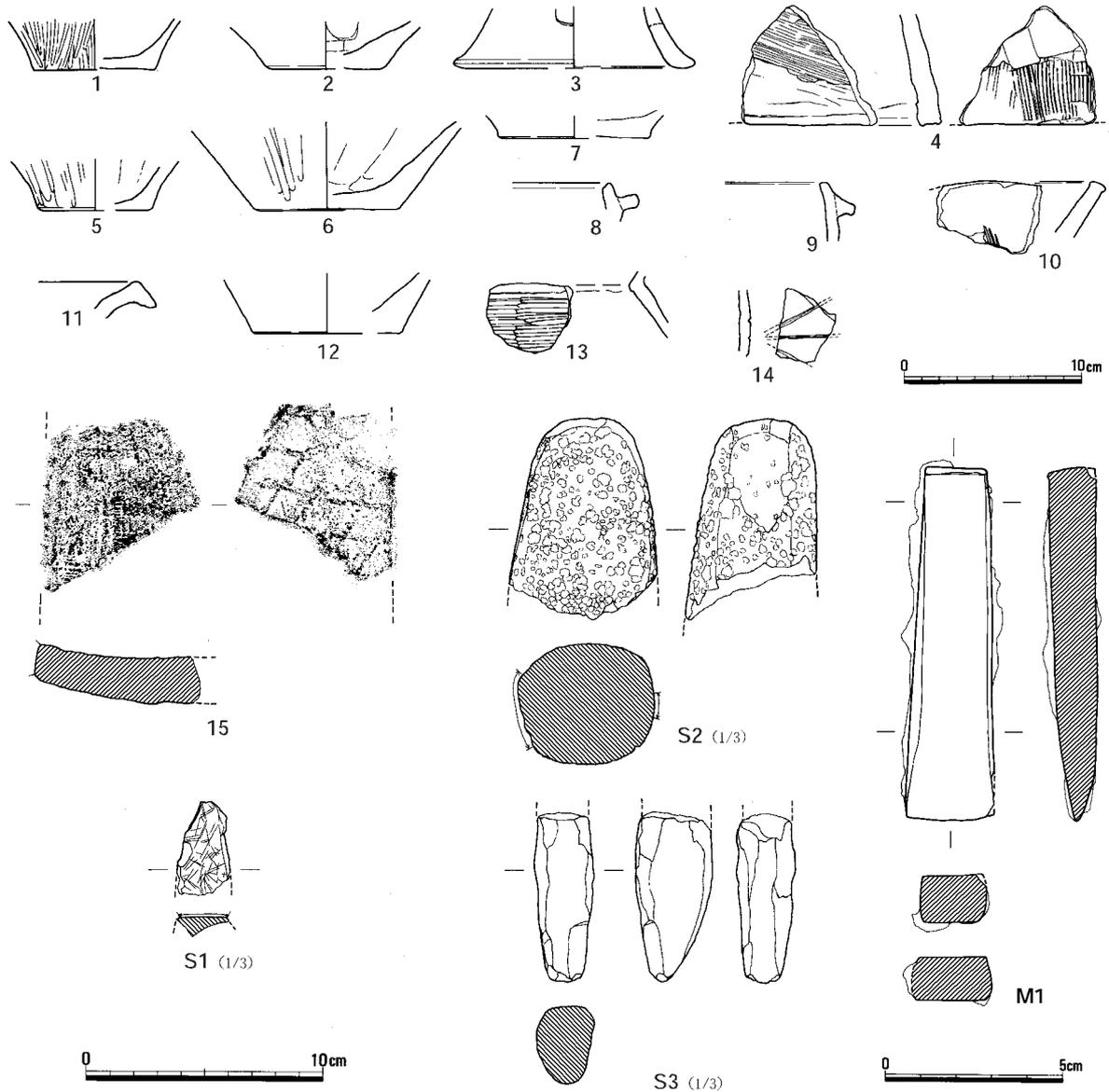


第5図 確認トレンチの配置 (1/1,000)

第2章 調査の経緯と経過



第6図 確認トレンチT1~T10 (1/100)



第7図 確認トレンチ出土遺物（1/2・1/3・1/4）

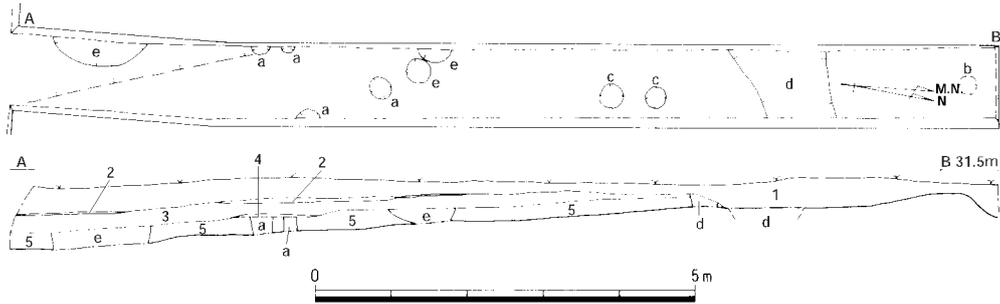
い。**M10**はT10から出土した鉄製の鑿で、長さ10.0cm、幅1.8cm、厚さ1.8cm、刃部幅2.5cm、重量148gを測る。弥生時代の包含層上部付近から出土したが、その形態から室町時代後期頃と推定される。

### 3 平成15年度確認調査の概要

調査開始時には牛舎が解体されていなかったため、建物部分以外に表土掘削と平行してT11～T13を重機によって掘削した。その結果、T11では弥生時代の柱穴と包含層を、T12では現代の攪乱層によって、包含層・遺構は確認されなかったが、T13では包含層が確認された。また、T12・T13はT1～T11の基盤層である花崗岩バイラン土などは確認されず、弥生時代以前に堆積した礫や土砂によって現地形が形成されていた。平成3年度の町教育委員会の調査時に旧石器と推察される遺物が出土していることから、土層断面や排土を詳細に観察したが、旧石器など弥生時代以前の遺物は確認されなかった。

この結果から、斜面下位についても全面調査が必要であることが明らかとなったが、弥生時代以前の堆積層については調査対象から除外した。

第2章 調査の経緯と経過



- |            |          |              |              |             |
|------------|----------|--------------|--------------|-------------|
| 1 碎石（整地層）  | 3 暗灰色粘質土 | 5 灰褐色礫層（包含層） | b 白色土（ピット埋土） | d 黒色粘質土（暗渠） |
| 2 真砂土（整地層） | 4 灰黄色粘質土 | a 灰色土（ピット埋土） | c 黒色土（ピット埋土） | e 攪乱土       |

第8図 確認トレンチ T15（1/100）

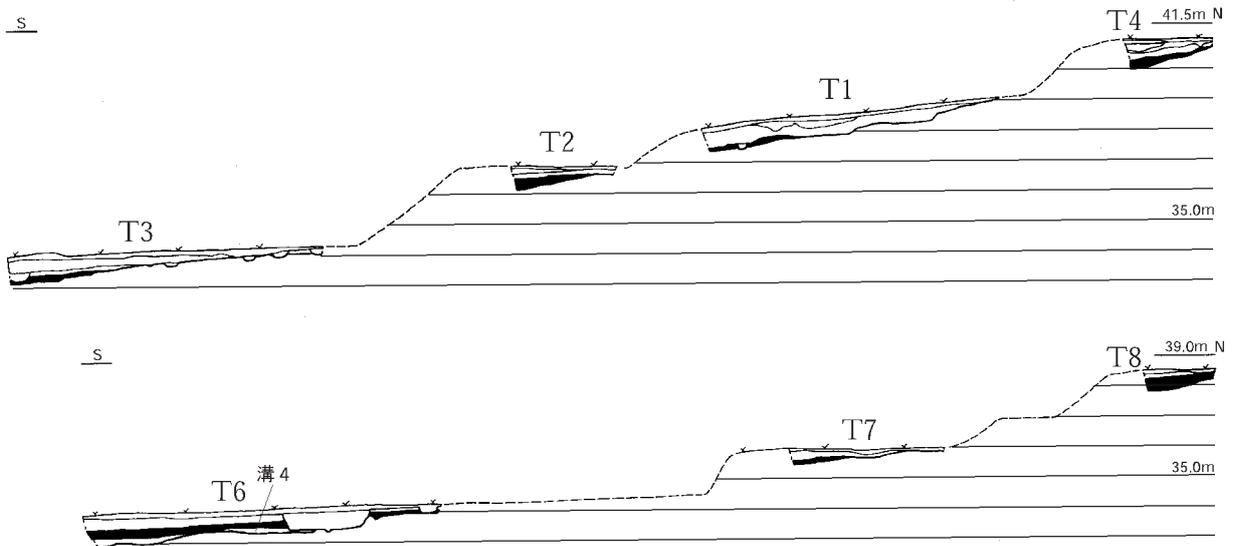
全面調査終了後の3月に入って、ようやく牛舎が解体されたことを受けて、重機によって、T14～T15を掘削して遺構の確認を行った。その結果、T14は建物の基礎などの攪乱で明確ではなかったが、T15では弥生時代の包含層とその上下で中世から弥生時代の柱穴を確認した。また、東西方向に設定したT16においても弥生時代と考えられる包含層を全面で検出した。

これらの結果から、牛舎部分についても弥生時代以降の遺構が比較的良好に残存していることが推察された。このため、瀬戸町教育委員会と瀬戸町役場との間で牛舎部分の取り扱いを協議した結果、設計変更によって、現状保存することとなった。

#### 4 遺跡の地形復元

今回の調査対象地は、段差が1.0～2.5m程度の段々畑や果樹園として利用されている。この地形は、遺物包含層（第9図内、断面黒塗りの層）の堆積状況から、近代以降に大きく斜面上位の掘削土を下位に整地して築かれている。しかし、T2～T3とT7～T6の段については、柱穴が段裾で比較的深く残存する状況から、中世にはすでに掘削されていたと判断される。

T1～T16までの確認調査の結果、塩納成遺跡は急峻な大盛山山塊の南裾で、傾斜が緩くなり舌状にのびる台地上に営まれた集落遺跡であることが明らかとなった。



第9図 調査地土層縦断模式図（1/250）

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概要

遺跡は、海拔約31~41mで、東西幅約45mの舌状に南に延びる斜面地に営まれている。近・現代の削平により、大きく段が生じているため、第10図に記したように最上段、上段、中段、下段、最下段



第10図 検出遺構全体と地形縦断面 (1/400)

に区分けして遺構の位置を示す。

遺構は、下段と最下段の緩斜面を中心に弥生時代から中世のものが高密度に確認される。上・中段でも、南側が削平されているものの同時期の遺構が築かれている。また、最上段は比較的急斜面だが、土層断面の観察から中世の包含層が形成される。僅かにピットと東側に浅い谷状の窪みが残るのみだが、上段に最上段からの流出と考えられる弥生時代の遺物が出土することから、もともとは弥生時代の遺構も存在していたと判断される。

## 第2節 弥生時代の遺構と遺物

### 1 概要

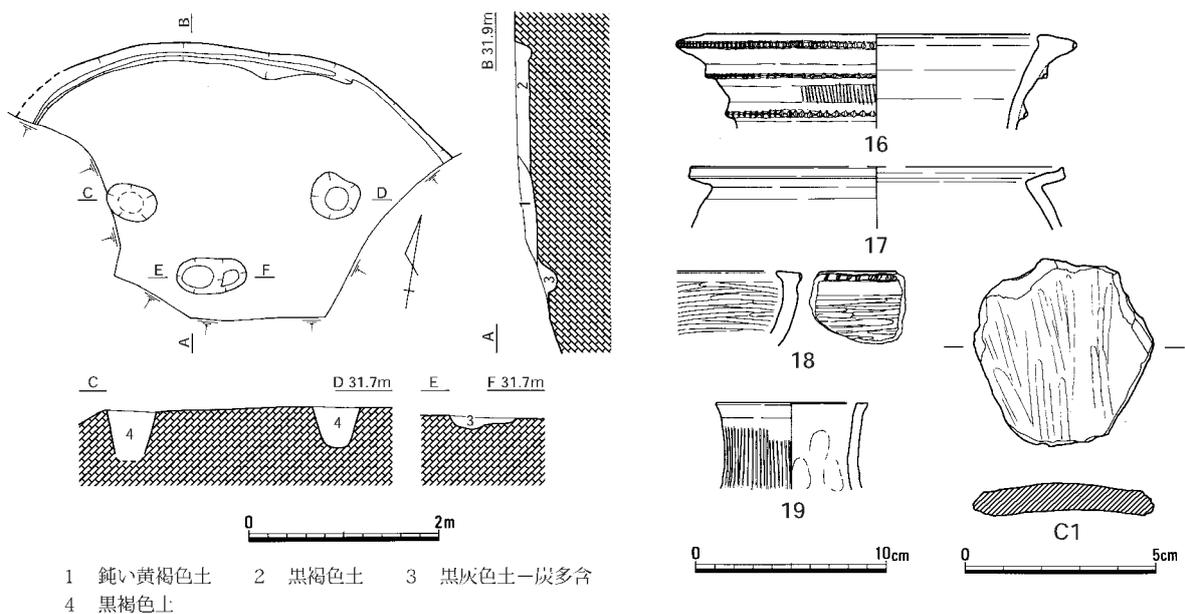
弥生時代の遺構は、第12図に示したように、最上段から最下段まで広く存在し、竪穴住居15軒、掘立柱建物6棟、段状遺構11基、柱穴列3列、土壇9基、溝7条、くぼみ1基、斜面堆積1ヶ所がある。これらのうち、掘立柱建物は、調査時には認識できていなかったが、整理作業段階で段状遺構の区画と一致し、埋土や分布状況から該期の遺構と判断した。

出土遺物は、後期前葉の土器が少量認められるものの、大半が中期中葉～末葉の時期に含まれる。したがって、遺構に伴わない石器も中期中葉～末葉を主体とすると判断される。

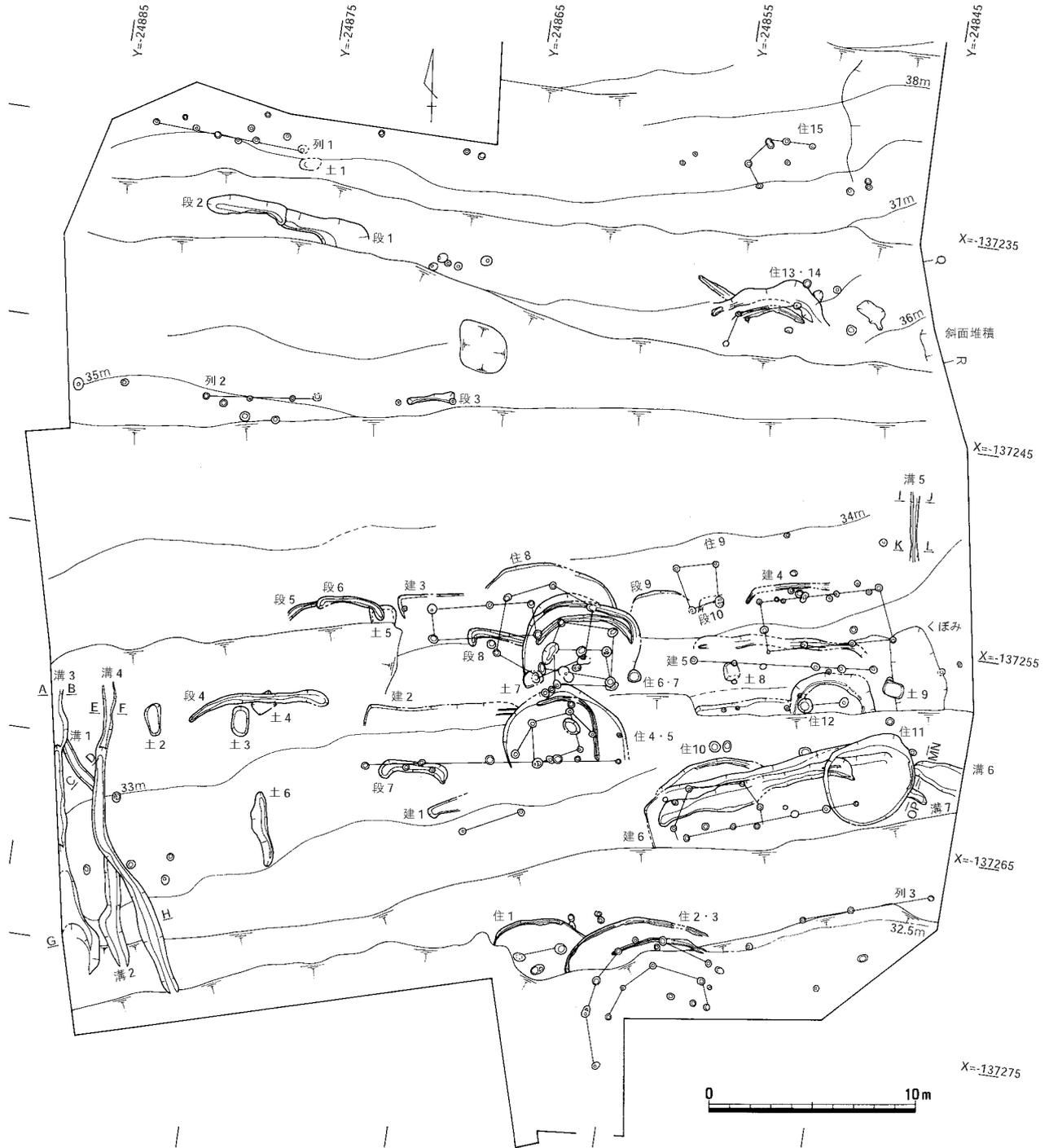
### 2 竪穴住居

竪穴住居1（第11・12図、図版2・3・8・10）

中央最下段に位置し、竪穴住居3に東側を切られる。南半を大きく削平されているが、4本柱であったと考えられる。床面中央には楕円形の中央穴があり、周辺に炭の散布がみられる。埋土は15cmほどが残っており、遺物は第2層中の床面近くから少量出土した。壺16・19、甕17、鉢18と甕の胴部片の周囲を粗く打ち欠いた円板形土製品C1がある。時期は、出土土器から中期中葉と判断される。



第11図 竪穴住居1（1/80）・出土遺物（1/2・1/4）

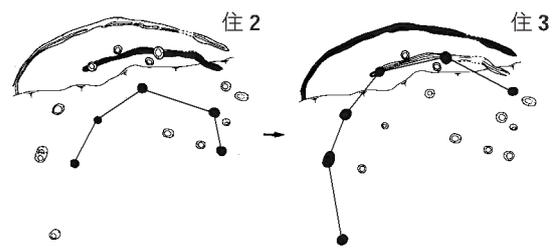


第12図 弥生時代の遺構全体 (1/300)

竪穴住居2・3 (第12~16図、図版2・3・8・10  
~12・14・15)

最下段中央で、床面の大半が削平をうけ、埋土も15cmほどが北壁際に残るのみである。

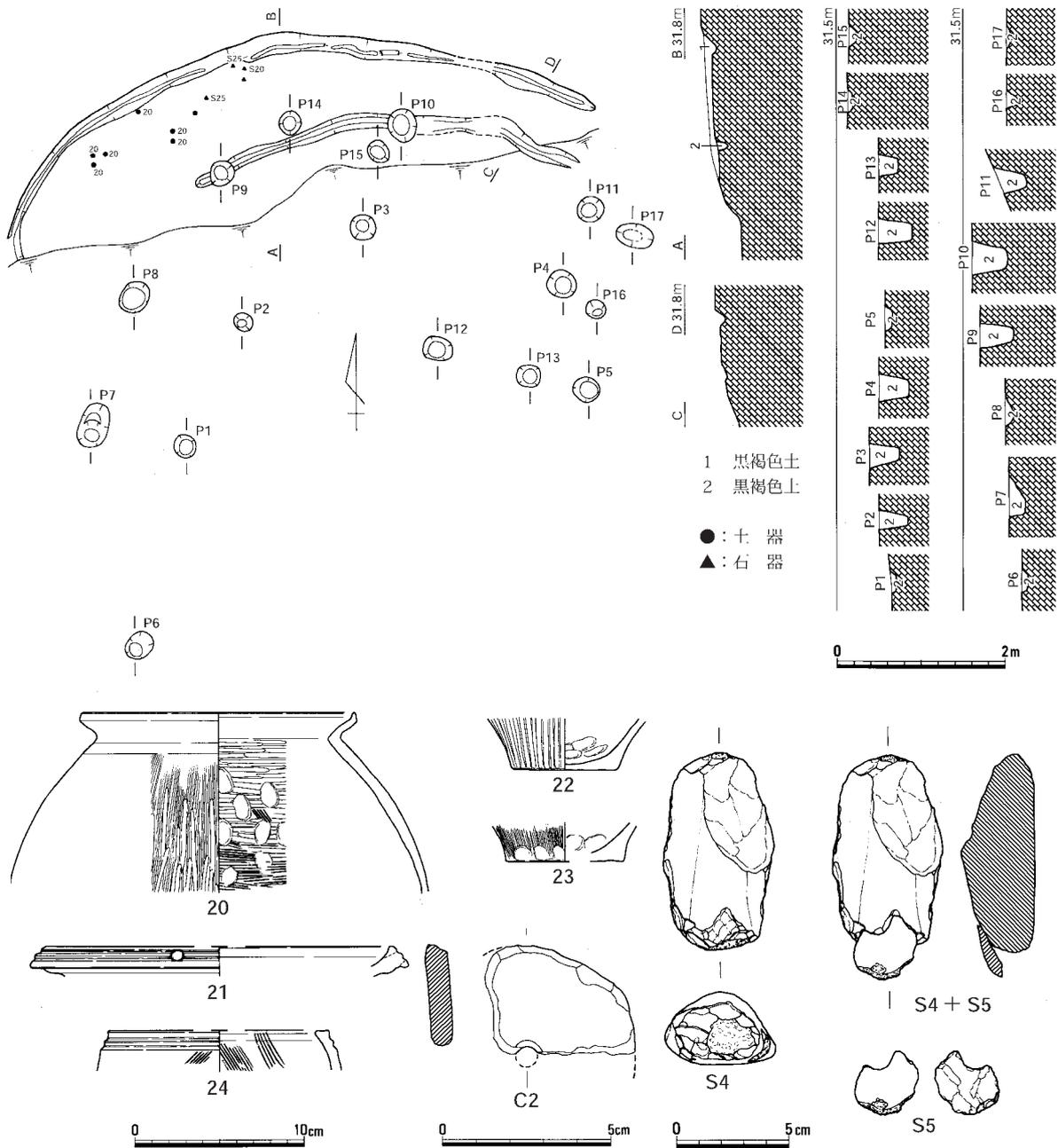
床面には二条の溝があり、土層断面と柱穴の切り合い関係から、住居2から住居3に1回の拡張がなされたと判断される。したがって、出土遺物はほと



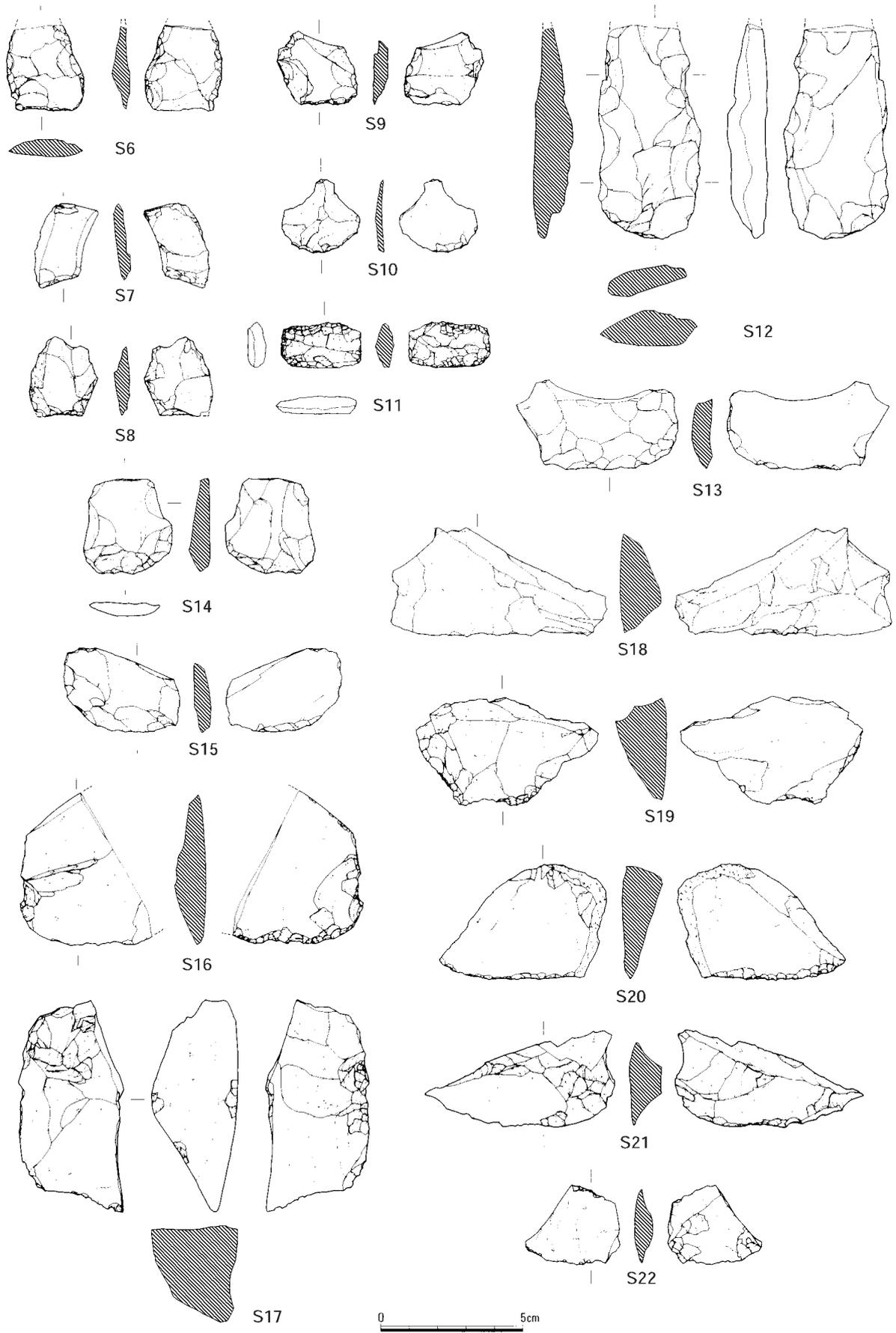
第13図 竪穴住居2・3の変遷 (1/250)

んどが住居3に伴っていたものである。

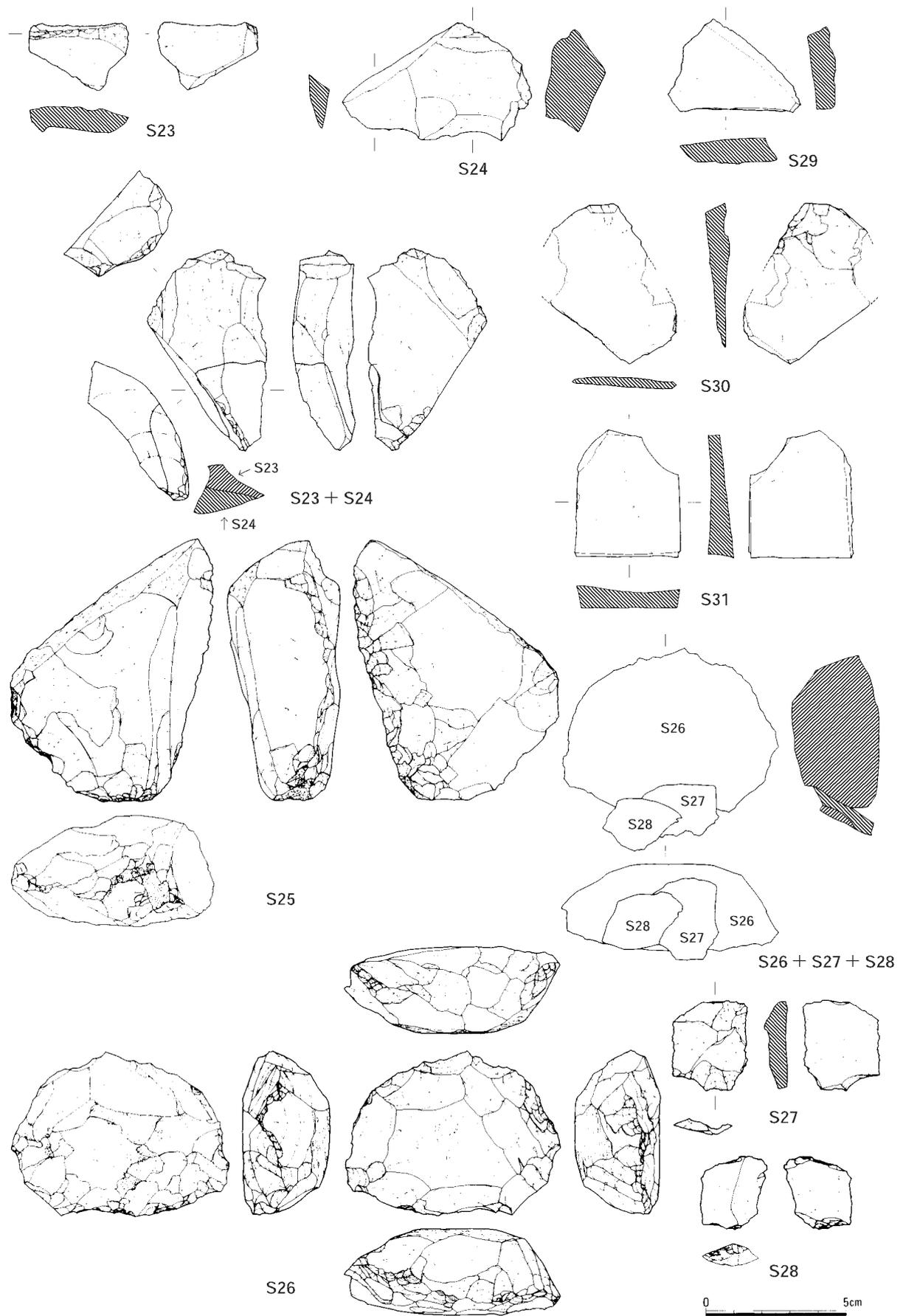
甕20は床面からまとまって出土したが、そのほかは小片で、甕21~23、高杯24がある程度である。C2は甕片転用の紡錘車である。石器は床面近くから多く出土した。S4は棒状の円礫の両端に細かい敲打痕がみられ、S5と接合することから、S5が欠損した後にさらに使用していたことがわかる。S6~S10はサヌカイト製品で、S6は三角形に加工した後、長辺に部分的に細部調整がみられることから、石鏃の未製品と考えられる。しかし、二次加工が非常に粗雑であることから非製品の可能性もある。S7・S8は潰れや階段状剥離が看取されることから楔形石器と考えられる。S9・S10は連続する微細な剥離痕がみられる剥片である。頁岩製のS11は、周縁に階段状剥離や潰れがみられることから楔形石器と判断される。S12~S15は古銅輝石安山岩製品で、表面風化が顕著で詳細な剥離状況は不明で



第14図 竪穴住居2・3 (1/80)・出土遺物① (1/2・1/3・1/4)



第15図 竪穴住居2・3出土遺物② (1/2)



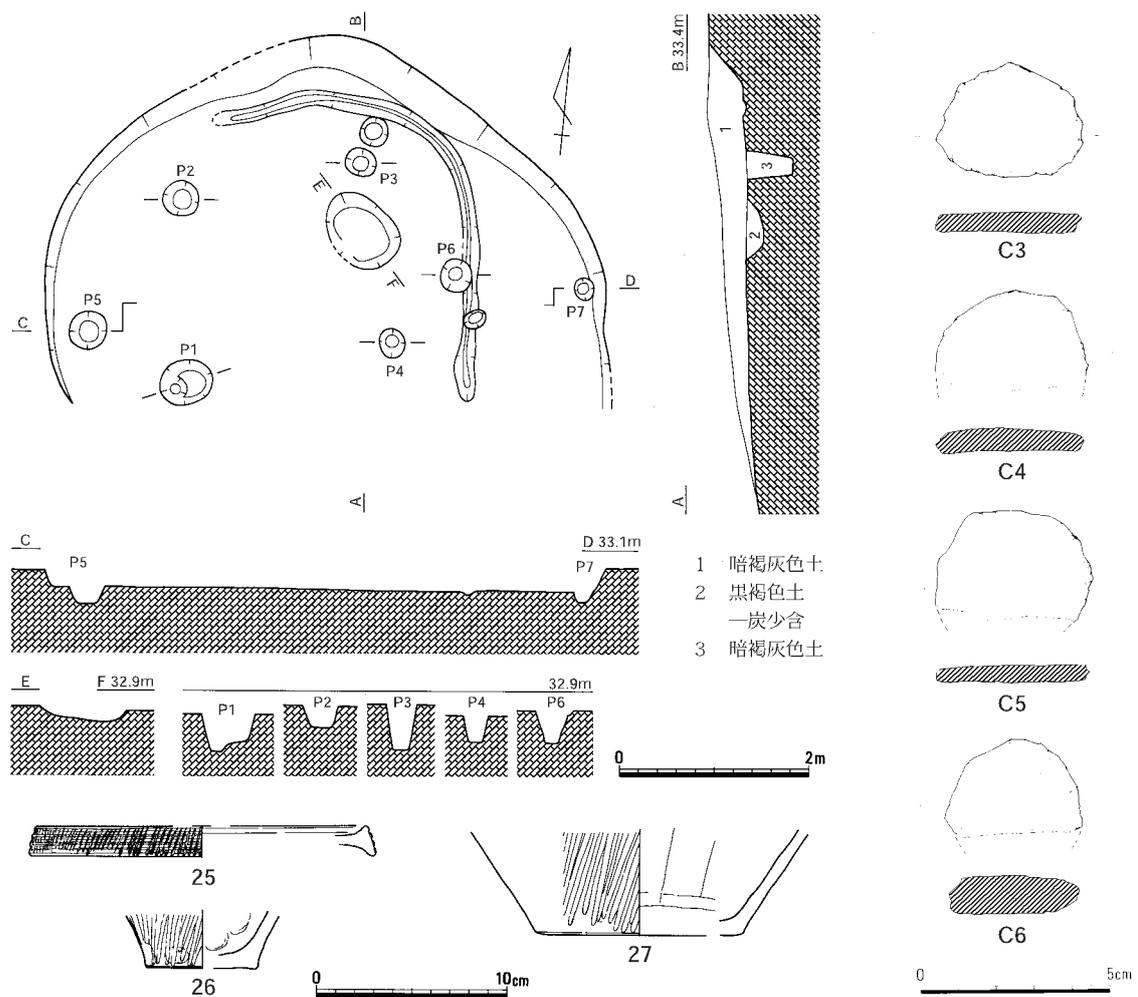
第16図 竪穴住居2・3出土遺物③ (1/2)

ある。**S12**は全面に二次加工を施し、短冊形に成形していることから石鎌と考えられる。**S13・S15**は横長剥片の1辺に細部調整が看取されることからスクレイパーと判断される。**S16～S28**はガラス質流紋岩製品である。**S16**は比較的丁寧な成形された刃器だが、**S17～S20**はほとんど細部調整を行わずに刃部を作出した刃器である。**S21・S22**は使用痕のある剥片である。**S23**と**S24**は接合関係にある。両者は自然面が残る剥片で、核から剥離された後に刃器として使用し、**S23**が剥がれた後に廃棄されている。**S25・S26**は塊状の剥片で、全面にネガ面を持つことから残核と判断されるが、細かい敲打痕が看取されるためハンマーに転用されたと考えられる。**S26**は亀甲形に剥離痕が残っており、打点を転回し鱗状に剥片剥離が行われたと推察される。しかし、接合する**S27・S28**の接合状況と剥片観察から、ハンマーとしての使用時に剥離したのものも含まれていると判断される。**S29・S31**は板状の剥片で、各辺は折れている**S30**は縦長剥片の一端に二次加工が看取される薄い剥片である。

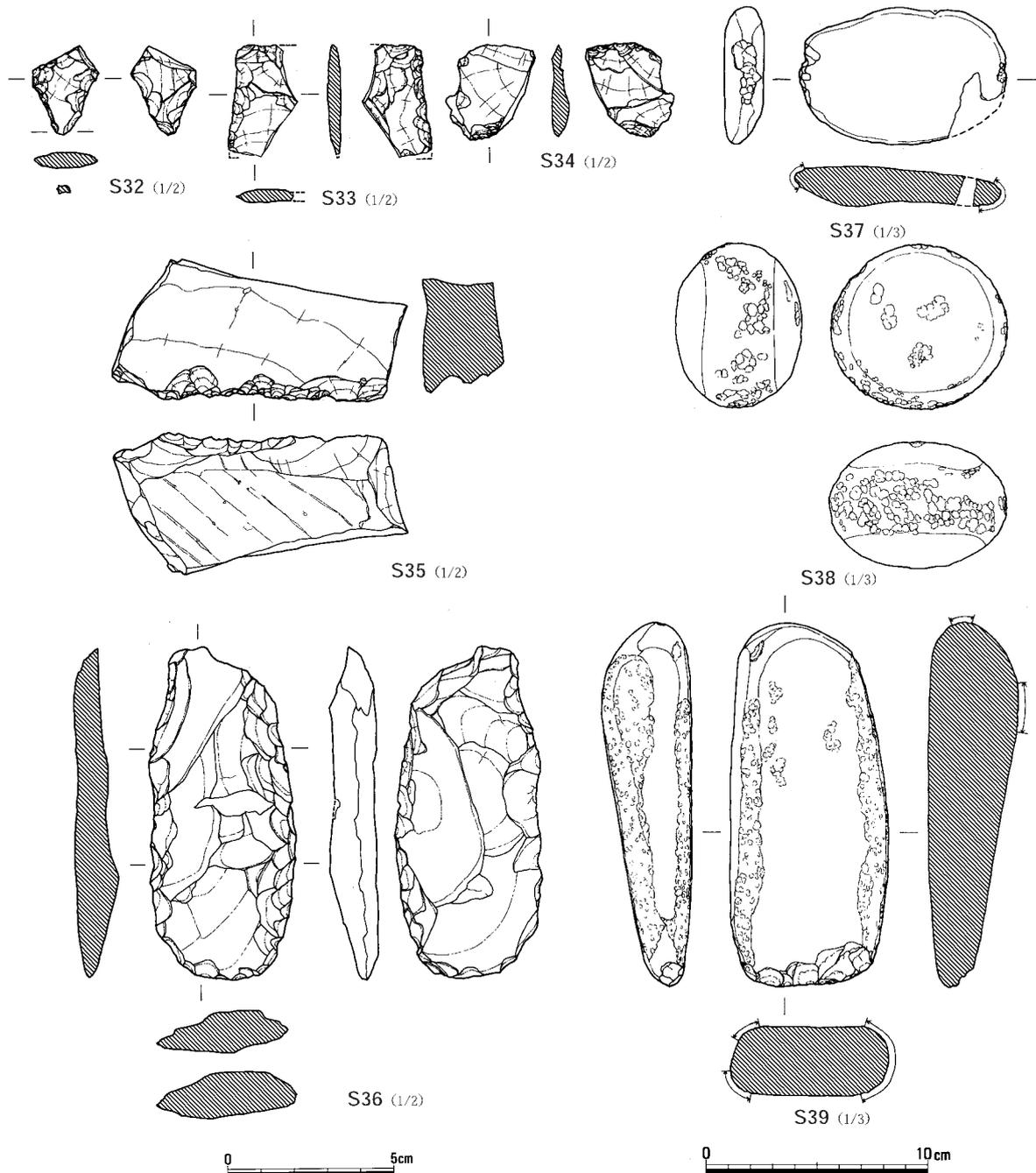
住居の時期は、出土遺物や住居1との切り合い関係から中期中葉頃と判断される。

竪穴住居4・5（第12・17・18図、図版3・10～14）

下段中央で、竪穴住居6・7の下位に位置する。床面には隅丸方形の溝1条が確認されることから、1回の建て替えがなされ、土層堆積状況から住居4から住居5へ拡張されたと判断される。中央穴は北寄りに位置し、柱穴は壁体や溝との位置関係から、住居4はP1～P4の4本柱、住居5はP2・P3・



第17図 竪穴住居4・5（1/80）・出土遺物①（1/2・1/4）



第18図 竪穴住居4・5出土遺物② (1/2・1/3)

P5・P6の4本と、確認できなかった南側の2本を加えた6本柱であったと考えられる。

出土遺物は、土器では壺25・27、甕26があり、甕や壺の体部片の周囲を打ち欠いて成形した円板形土製品C3～C6がある。石器は図示した以外にも出土しているが、S32はつまみ部が欠損した錐と考えられる。S33は方形に成形された非情に薄い石器だが、刃器片であろうか。S34は剥片の1辺に微細な剥離がみられるが、人為的なものか偶発的なものか判断しにくい。S35は塊状のガラス質流紋岩製の節理面を残す横長剥片で、長辺に連続した細部調整を施し刃部を作出した刃器である。S36は短冊形に成形した石器で、先端に線状の使用痕が残る石鎌である。S37は打欠き石錘、S38は被熱した叩き石である。S39はP3中から出土した石斧で、周囲を敲打し刃部も粗く作り出している。

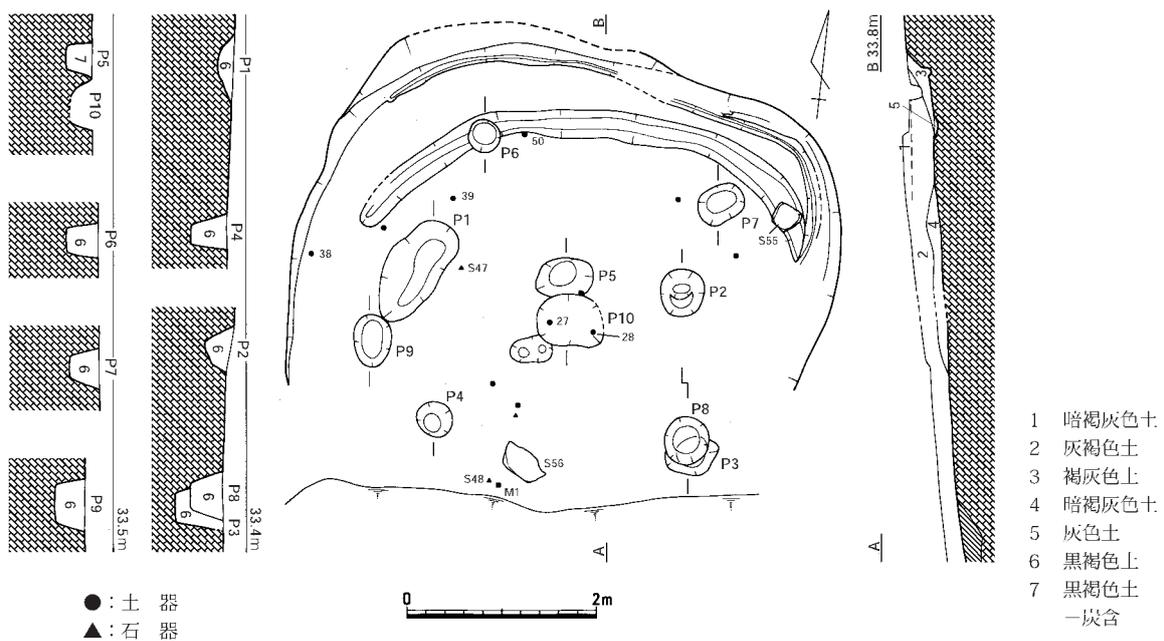
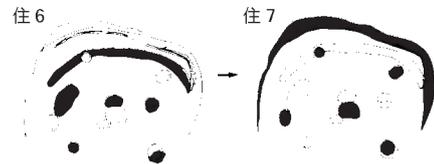
住居の時期は、遺構の切り合い関係や出土遺物から中期後葉頃と判断される。

竪穴住居 6・7 (第12・19~23図、図版4・8・10・11・14・15)

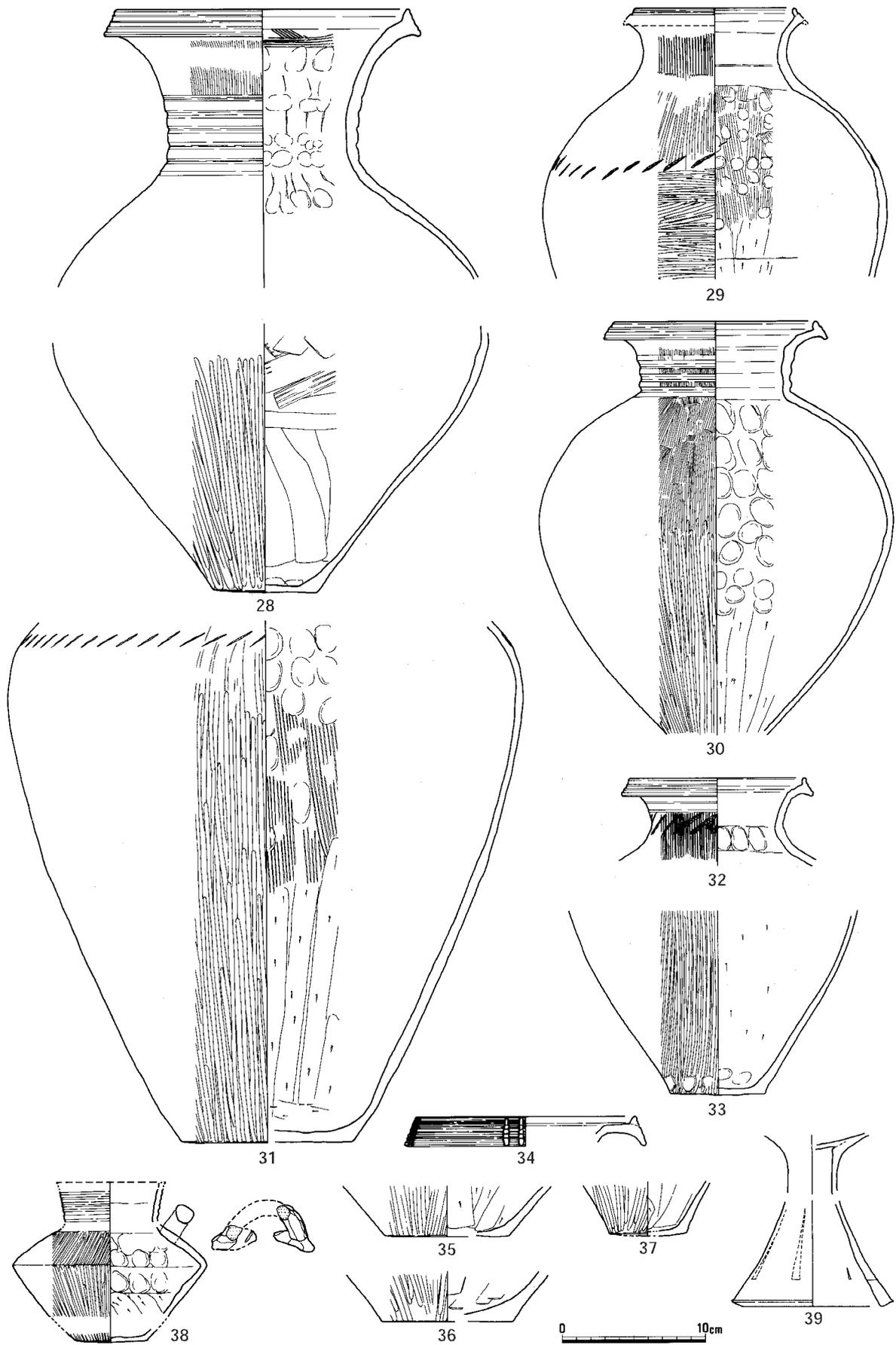
下段中央で、住居5を人為的に埋めた後に築いている。床面の溝の検出状況から、1回の建て替えを行い、住居6から住居7へ拡大しているため、出土遺物は住居7に伴うものである。柱穴は6がP1~P4、7がP6~P9を支柱穴とし、それぞれP5・P10を中央穴としており、周辺に炭が散布する。

28~39は床面から、40~51は埋土出土の土器である。壺28は口縁部と胴部下半の直接の接点は見られないものの、中央穴付近で潰れた状態で出土した。29・30も壺で、31は甕の胴部片で、32・33は同一個体と考えられる壺である。34は壺の口縁部で棒状浮文が付く。35~37は甕の底部、取っ手付壺38は壁際で出土した。39は高杯の脚で貫通する透かし孔を持つ。40~43は甕、44は器台であろうか。45・46は鉢、47~51は高杯である。C7は甕体部片を打ち欠いて成形した円板形土製品である。M2は床面中央付近で出土した板状鉄斧で、上面のみに繊維状の緊縛痕が残り、裏面には炭化木材の痕跡が一部看取される。石器は製品の他にサヌカイトやガラス質流紋岩製の剥片・碎片も出土したが、それらの分布状況などについては明確にできていない。剥片石器はS49がガラス質流紋岩製以外すべてサヌカイト製である。S40~S44は石鏃で、S45は碎片だが表裏に細部調整が看取され、その形状から石鏃非製品と推察される。S46は横型の石匙だが、明瞭な使用痕は認められない。S47は打製石包丁である。S48は自然面を残す小形のスクレイパーだが、長方形に成形されており石包丁であろう。S50・S53は縁辺に細部調整を施し刃部を作出していることから刃器で、S51はスクレイパーと判断される。S54は薄い剥片に細かい二次調整がみられる。S49は片面に自然面を残し、対面には主要剥離面を大きく残しながら二次調整を加えた刃器である。S55・S56は床面から出土した非情に強く被熱した台石である。両者とも粗く周囲を敲打し成形している。また、上面に摩滅痕が残る点では共通するが、S55は敲打痕もみられるものの鉄鏃などの付着物は看取されない。

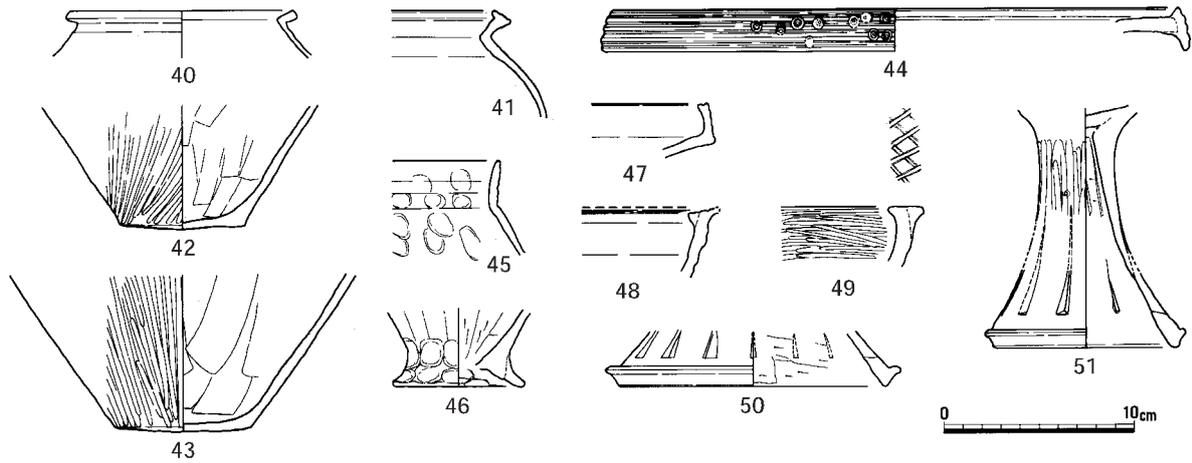
時期は、出土遺物から中期末葉と判断される。



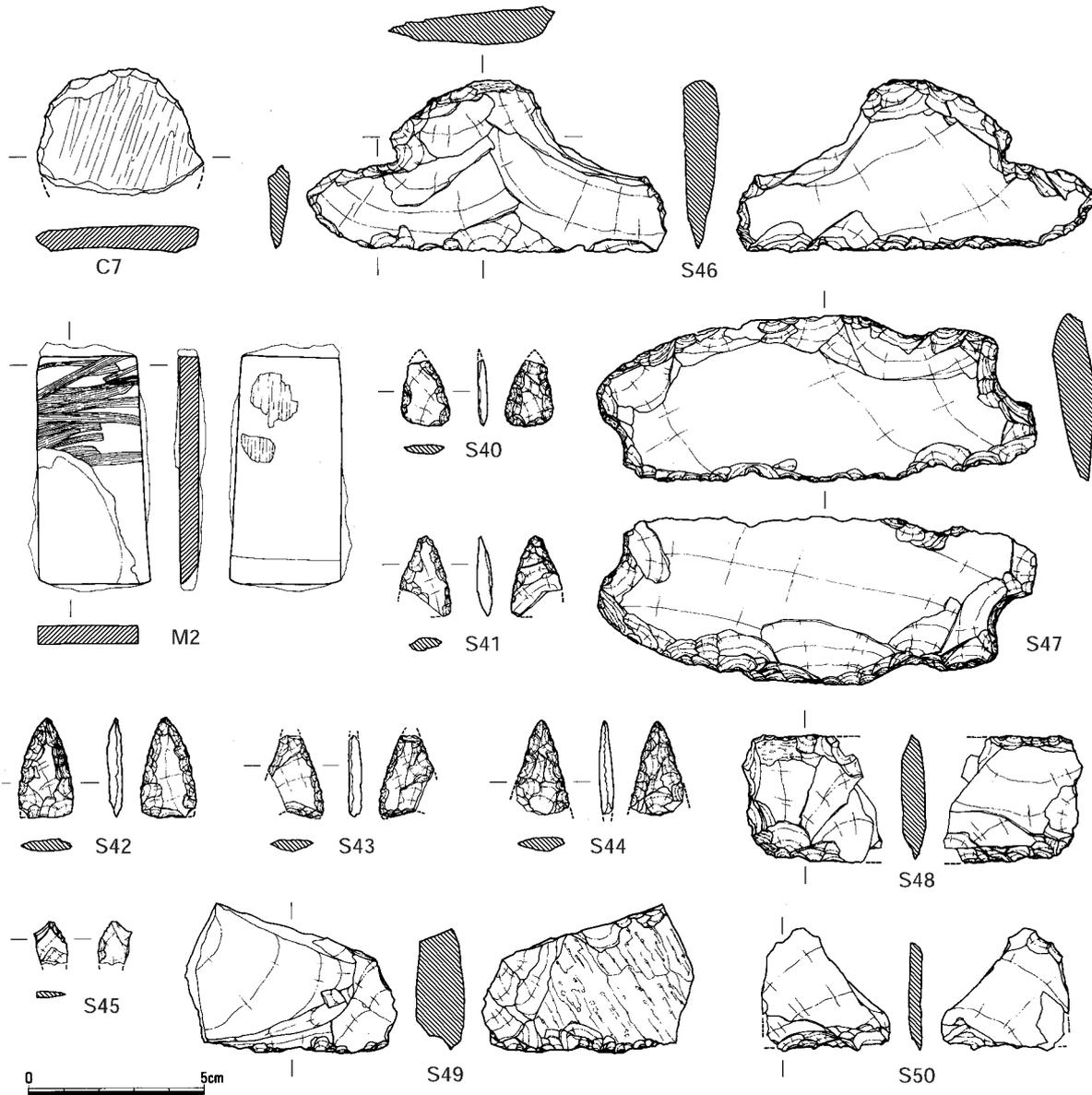
第19図 竪穴住居 6・7 (1/80)・変遷 (1/250)



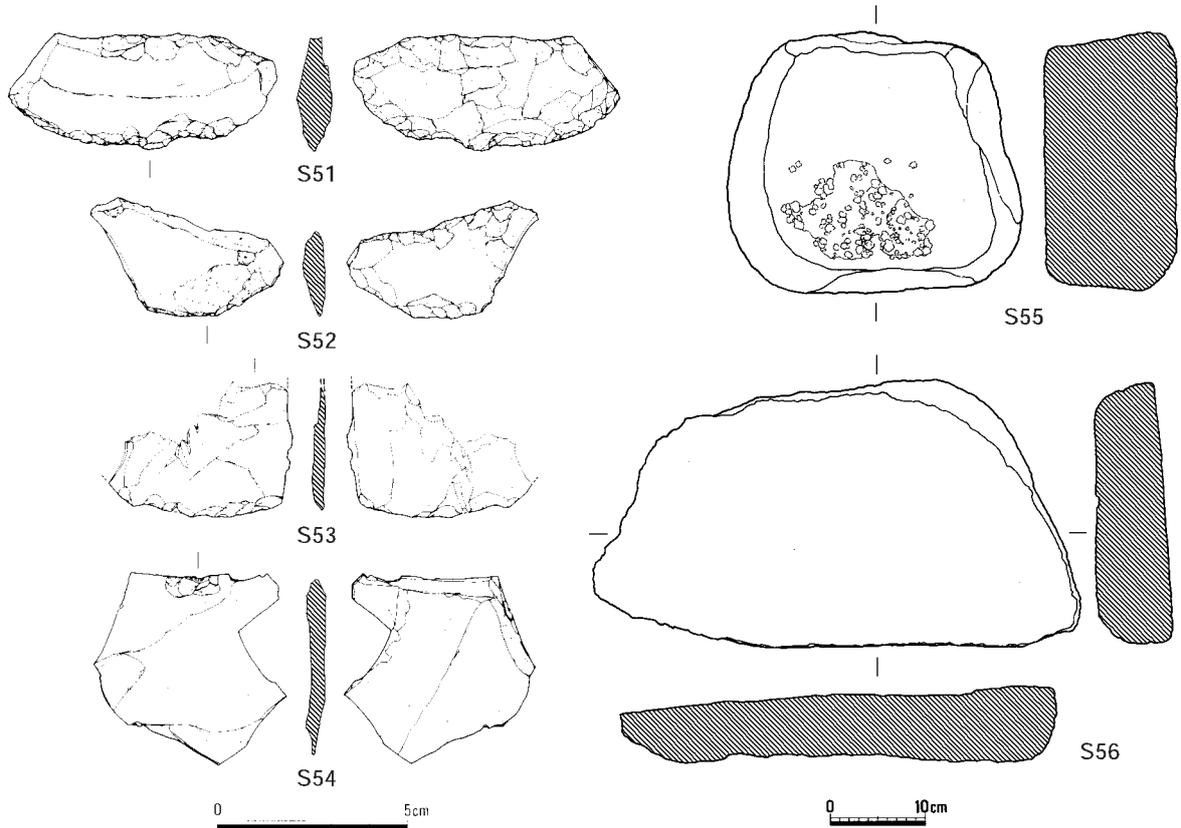
第20図 竪穴住居6・7出土遺物① (1/4)



第21図 竪穴住居6・7出土遺物② (1/4)



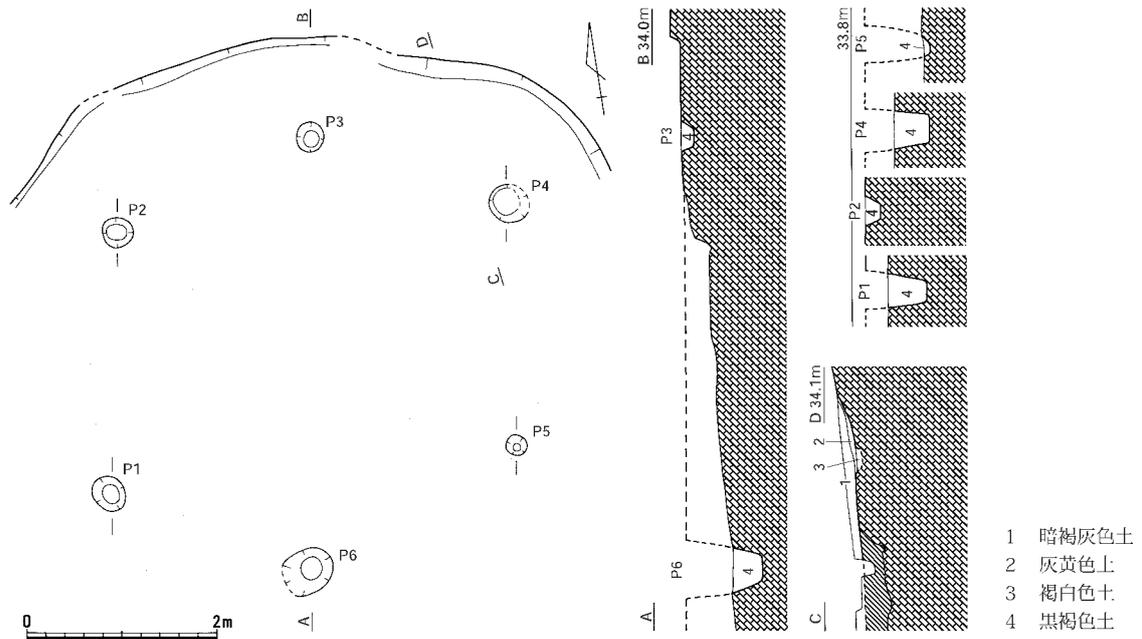
第22図 竪穴住居6・7出土遺物③ (1/2)



第23図 竪穴住居6・7出土遺物④ (1/2・1/8)

竪穴住居8 (第12・24・25図、図版4・10・11)

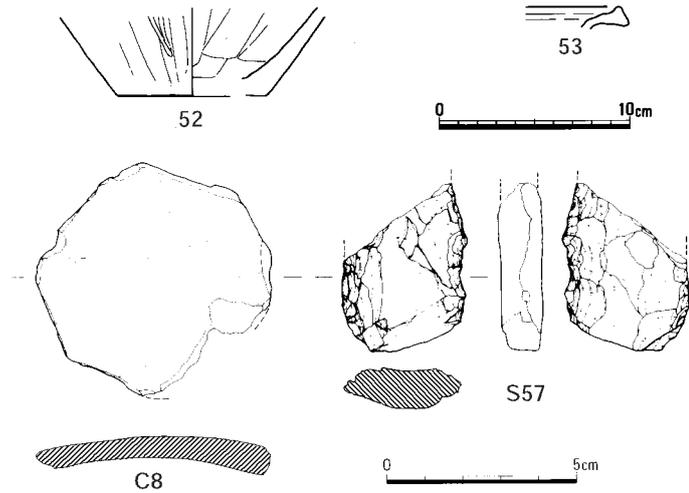
下段中央に位置し、竪穴住居6・7の埋没後に築かれている。埋土の大半は流出しており、床面は一部で検出されたのみで中央穴は不明である。また、土層断面では壁際に壁体溝状の落ち込み(第3層)が確認できたが、平面では明確にできなかった。支柱穴は6本と考えられる。P2~P4が他の柱



第24図 竪穴住居8 (1/80)

穴よりも極端に浅くなっているのは、これらを固い基盤層に掘削しているためである。

出土遺物は、埋土が残っていないため僅かな小片のみで、甕底部**52**と壺口縁部**53**のみが図示できるにすぎない。**C8**は壺体部片の周囲を粗く打ち欠いて成形した円板形土製品である。**S57**はサヌカイト製石器で、側辺部に丁寧な調整を行い方形に成形しており、一部刃潰し状の加工が看取されることから石槍の基部と判断される。

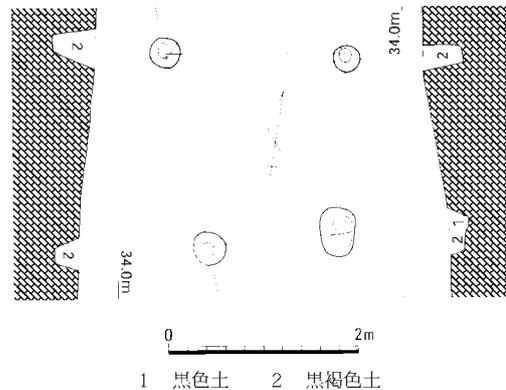


第25図 竪穴住居8出土遺物 (1/2・1/4)

時期は、図示した土器は古いが、遺構の切り合い関係から中期末から後期初頭と推察される。

竪穴住居9 (第12・26図)

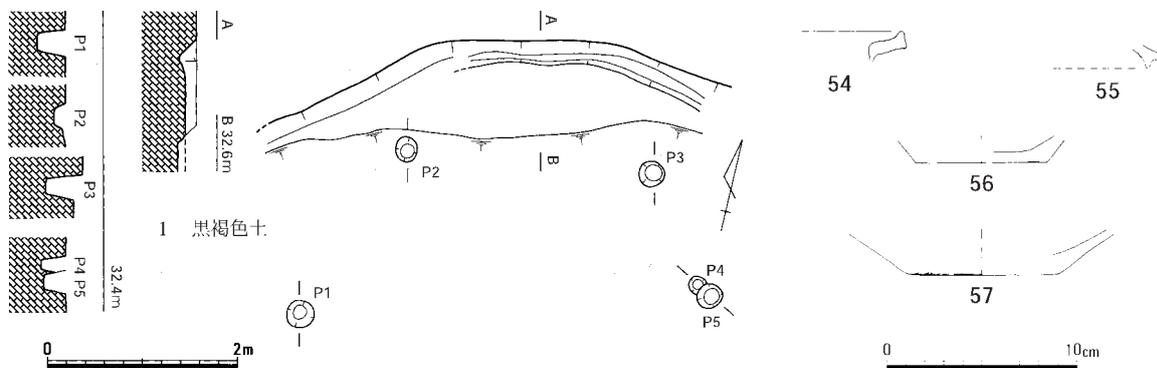
下段中央に位置する。中世の柱穴に対して、埋土の色調や規模が異なることから4本柱の住居の支柱穴と判断した。柱穴からは弥生土器の細片のみが出土しており、時期は明確ではないが、周辺の遺構の状況から中期後半頃と推察される。



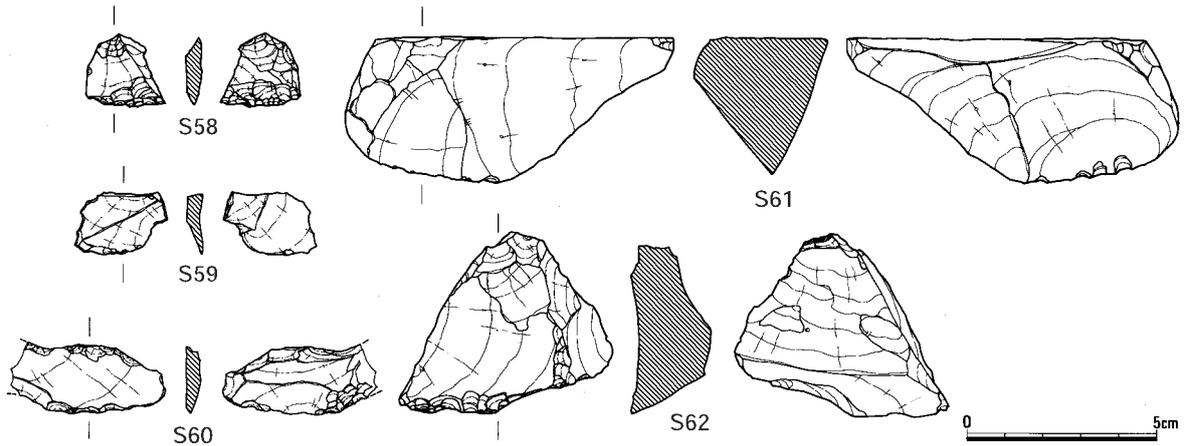
第26図 竪穴住居9 (1/80)

竪穴住居10 (第12・27・28図、図版3)

下段中央で、掘立柱建物6に切られ、南側は大きく近代以降に削平を受けている。壁面は北側に僅かに残っており、部分的に壁体溝が巡る。柱穴は4本が確認されたが、本来は6本柱であったと考えられる。出土遺物は少なく、土器で図示できたものは壺**54・57**、高杯脚**55**、甕**56**だけである。図示した石器は、**S58・S61・S62**はガラス質流紋岩製、**S59・S60**はサヌカイト製である。**S58**は潰れと階段状剥離が対辺で看取されることから楔形石器と判断される。**S59・S60**は1辺もしくは2辺に使用痕のある剥片である。**S61**は塊状の剥片に使用痕のみられるものである。**S62**は肉厚な三角形の剥片



第27図 竪穴住居10 (1/80)・出土遺物① (1/4)



第28図 竪穴住居10出土遺物② ( 1/2 )

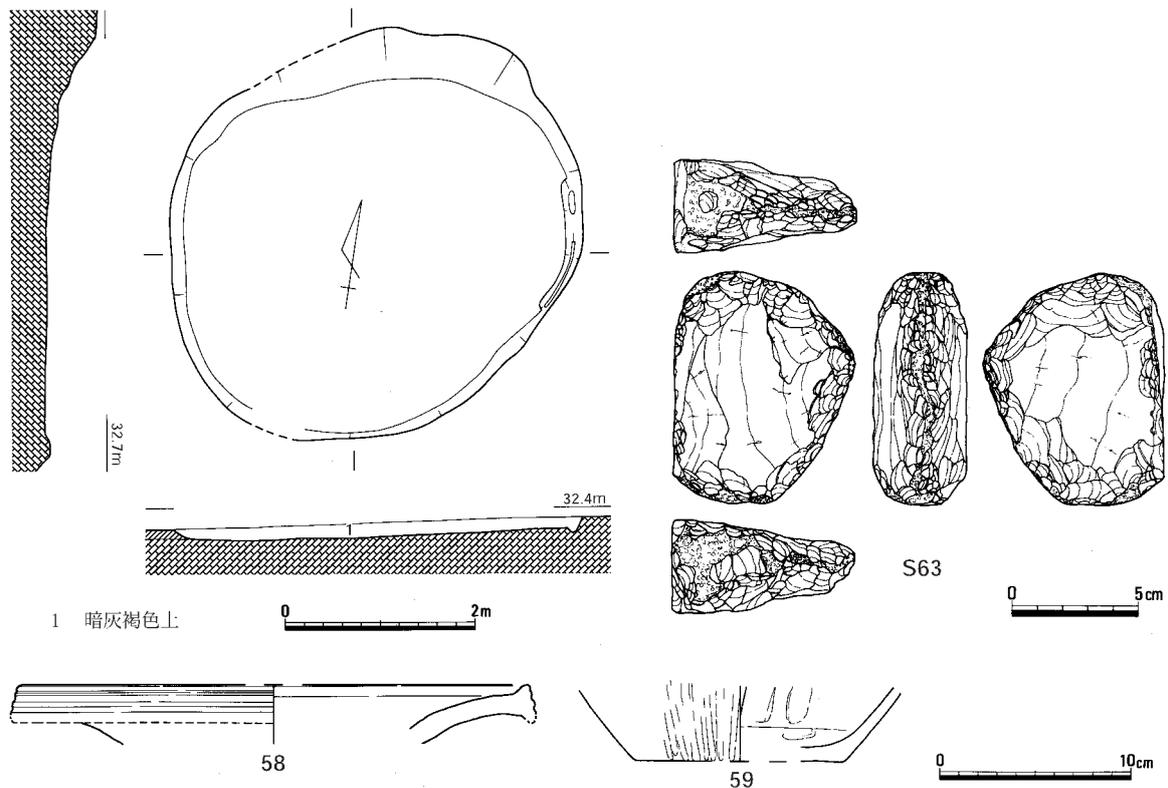
の一辺に細部調整を施していることから、不定形な刃器と判断される。

時期は、出土土器や遺構の切り合い関係から中期中葉と考えられる。

竪穴住居11 (第12・29図、図版14)

下段東端に位置する。掘立柱建物6を埋めたのちに築かれた円形の掘り方のみが検出されたが、規模から住居と判断した。床面には岩脈が走り、精査したが柱穴や焼土面は確認されなかった。一部東側でのみ壁体溝状の溝が確認された。埋土は20cm弱と浅く、出土遺物も土器の小片で、図示できる土器は壺58・59のみである。S63はガラス質流紋岩製の石器で、側辺全周に細かい敲打痕が看取されることからハンマーと考えられる。

時期は、出土土器や遺構の切り合い関係から中期中葉頃と判断される。

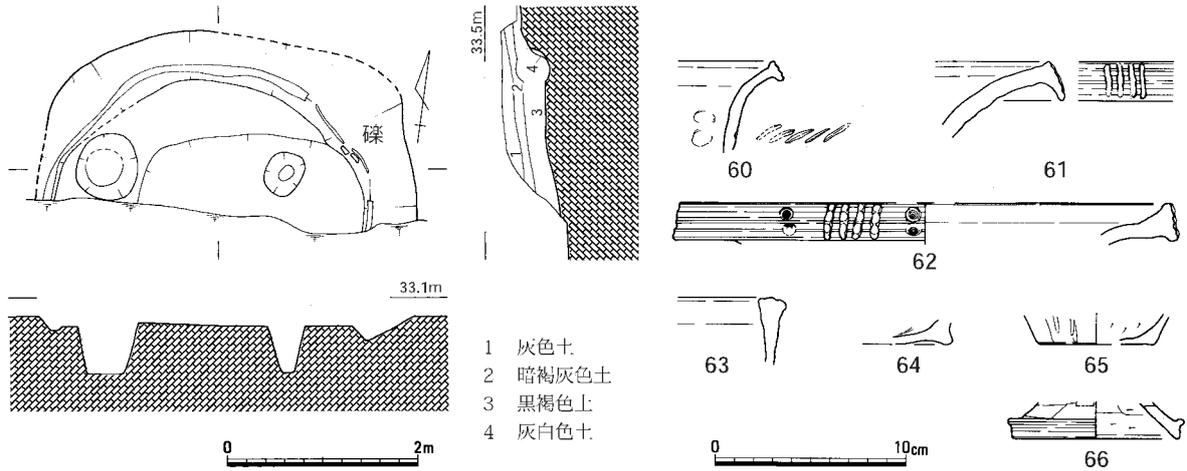


第29図 竪穴住居11 ( 1/80 ) ・ 出土遺物 ( 1/3 ・ 1/4 )

竪穴住居12 (第12・30図)

下段東端に位置し、南側を近代以降に削平されている。壁際には断面形「V」字状の溝が巡り、東側では角礫が詰め込まれているところもある。床面には柱穴2基が確認され、その配置からもともとは4本柱で合つたと推察される。出土遺物は少なく、図示した土器は第3層中から出土した。60～62は壺で、62の口縁端部には棒状浮文と竹管文がみられる。63は口縁端部に3条の凹線がみられる高杯、64・65は甕の底部で、66は高杯の脚である。

時期は、出土遺物から中期中葉と判断される。

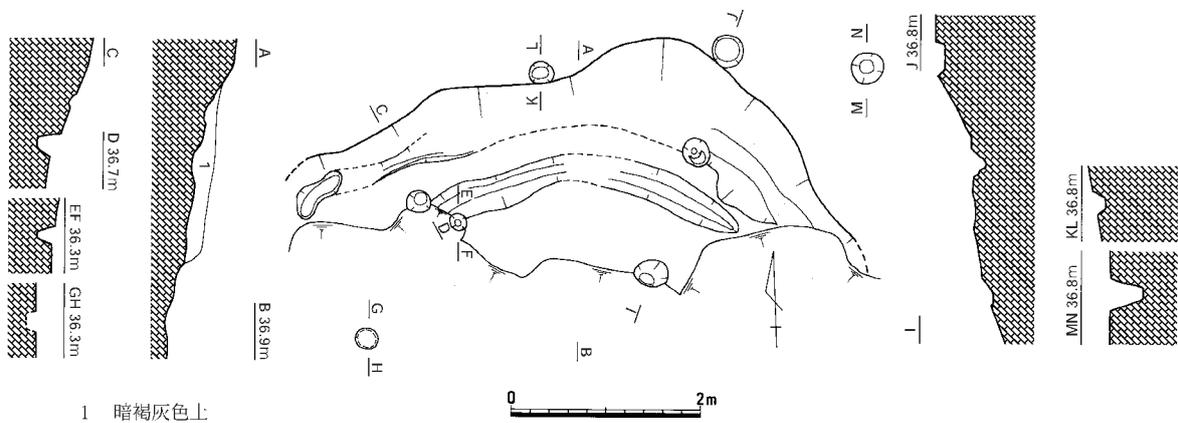


第30図 竪穴住居12 (1/80)・出土遺物 (1/4)

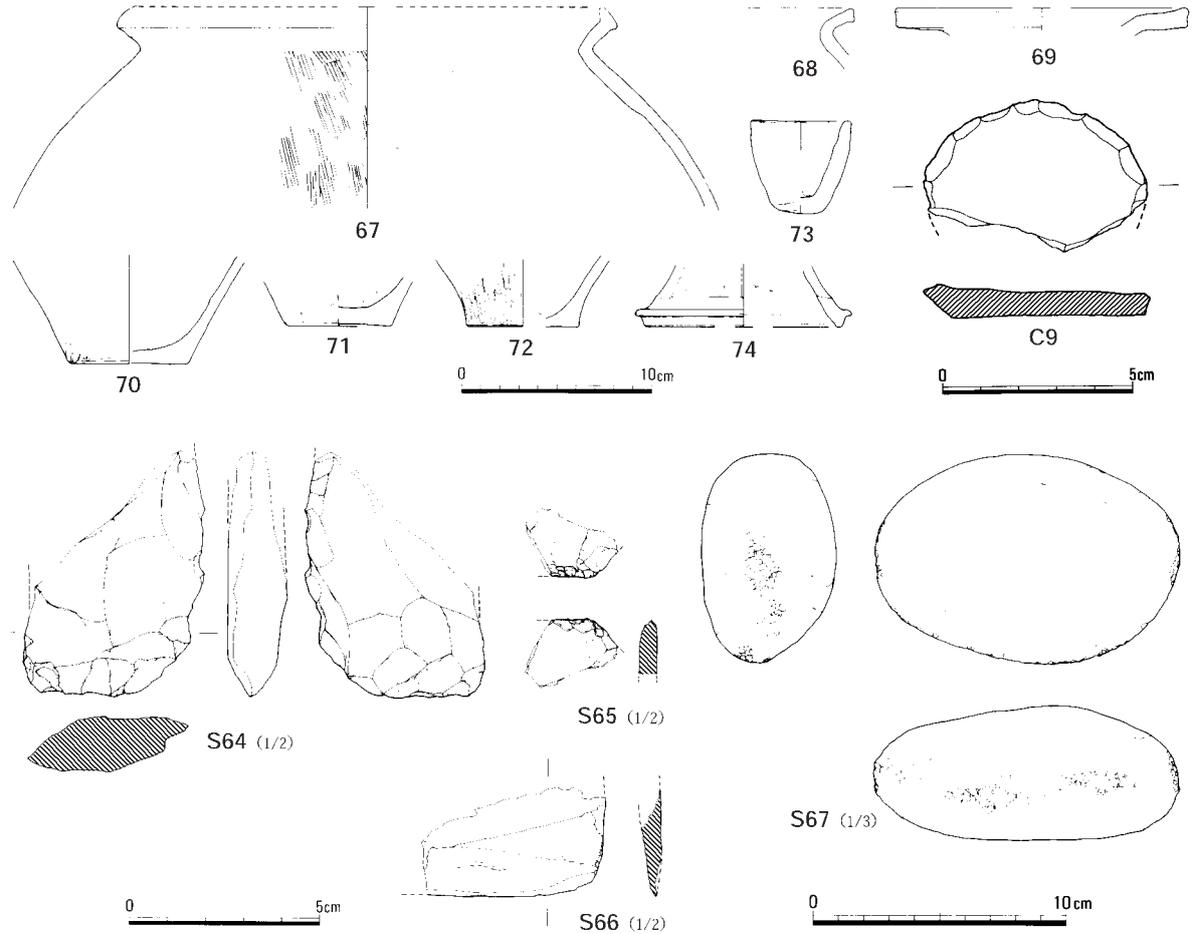
竪穴住居13・14 (第12・31・32図、図版10・12・14)

上段東側に位置し、南側は古墳時代の段状遺構12と現代の攪乱によって大きく削平されている。壁体上面は不整形だが、床面に弧状に巡る溝2条が検出されたことから平面形は円形で、1回の建て替えが行われたと判断される。柱穴は床面で5基検出されたのみで支柱穴については明確でない。

遺物は埋土中から小片を含めて比較的多く出土した。67・68・70～72は甕、69は壺、73は鉢で内外に丁寧なナデがみられる。74は高杯の脚で貫通した透かし孔が残る。円板形土製品C9は、甕の体部片の周囲を粗く打ち欠いて成形している。S64は古銅輝石安山岩製の石鍬、S66はセンマイ岩製の磨製石器で、石包丁の刃部片と考えられる。S65は肉厚なサヌカイト製の剥片で、端部に細かい階段



第31図 竪穴住居13・14 (1/80)



第32図 竪穴住居13・14出土遺物（1/2・1/3・1/4）

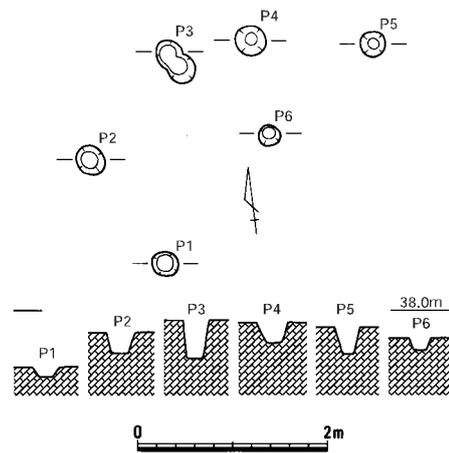
状剥離が看取されることから楔形石器と考えられる。円礫S66は、周縁に細かい敲打痕の看取される叩き石である。

時期は、出土土器から中期中葉と判断される。

竪穴住居15（第12・33図）

最上段東側に位置する柱穴群で、壁体の掘り方は検出していない。比較的深い柱穴がまとまることと、この下位に斜面堆積が形成されていることから竪穴住居と判断した。P6を中央穴として主柱穴は6本と推測されるが、東側については谷部に入ることから流出したものと判断される。

時期は、柱穴から弥生土器の小片があり、東斜面堆積出土遺物から中期中葉と考えられる。



第33図 竪穴住居15（1/80）

### 3 掘立柱建物

掘立柱建物1（第12・34図、図版11）

下段中央に位置し、斜面上位に深さ10cm弱と浅い「L」字形の溝を有する。柱穴は、溝の裾から約150cm南側に柱間約300cmの2本のみ確認できる。南列については斜面下位でもあり、流出したと推察

される。東西規模は、柱穴と溝の関係から約5mと推測される。

遺物は、溝からガラス質流紋岩製の剥片石器S68のみが出土した。長方形に成形した縦長剥片の長手側辺には微細な剥離痕と対向する辺に潰れが認められることから、楔としての機能が考えられる。

時期については、土器がないため詳細は不明である。

掘立柱建物2（第12・35図、図版14）

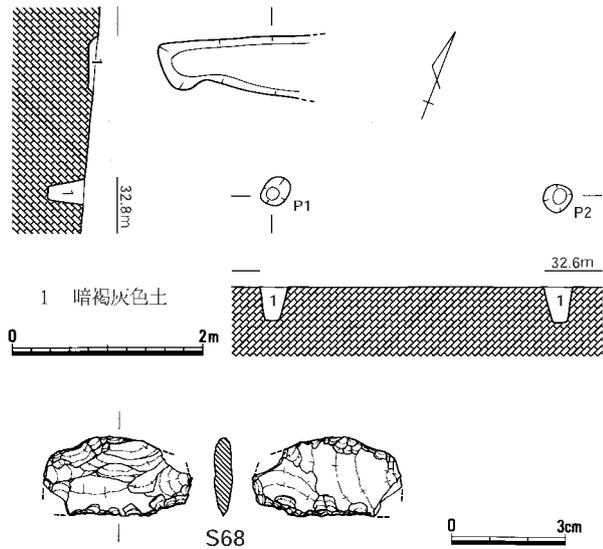
下段中央に位置し、竪穴住居4・5に東側を切られる。斜面上位を「L」字形に削平し、その裾に深さ5cm程の溝が部分的に確認される。柱穴は段裾から約240cm離れてP1～P5の北列のみ、総延長約13mを確認した。柱間は270～330cmとほぼ均等に配置されている。南列の柱は現状では確認できない。

出土遺物には溝中から棒状の円礫S69がある。先端部両端に敲打痕と共に割れが確認でき、若干の擦痕もみられることから、石器の細部調整や加工に用いたハンマー兼磨き石と考えられる。

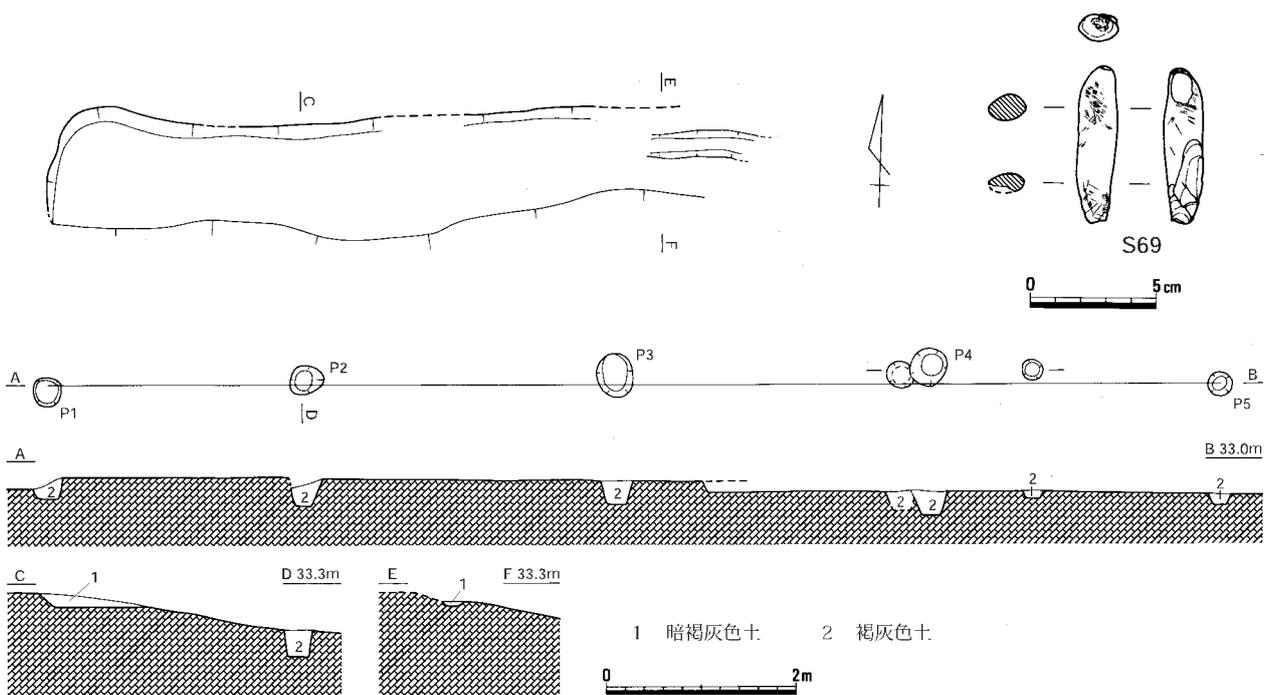
土器の出土はないものの、住居との切り合い関係から中期後半と判断される。

掘立柱建物3（第12・36図、図版10）

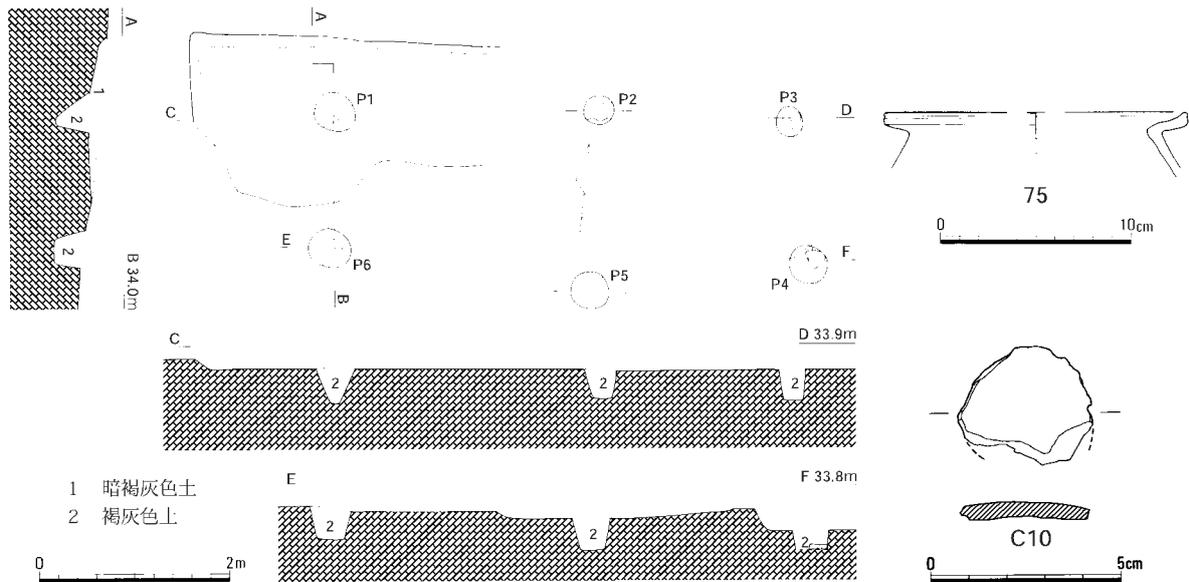
下段中央で、竪穴住居6の壁体溝に切られる。斜面上位を「L」字形に削平し、段裾から約80cmの



第34図 掘立柱建物1（1/80）・出土遺物（1/2）



第35図 掘立柱建物2（1/80）・出土遺物（1/3）



第36図 掘立柱建物3 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/4)

位置に北列の柱を配する。柱の深さと通りから1×3間に復元したが、第10図に示したように、P4～P6の南側には柱穴が多くみられ、南側に延びる可能性は否定できない。柱間は南北約140cm、東西200～280cmで配置している。柱穴P4の底面にある根石状の岩塊は地山に含まれるものである。

遺物は、第1層中から甕75と円板形土製品C10が出土した。C10は甕の体部片を転用し、周囲を粗く打ち欠いて円形に整形している。

遺構の時期は、切り合い関係と出土土器から中期中葉と判断される。

#### 掘立柱建物4 (第12・37図)

下段東端に位置し、掘立柱建物5の溝にP6・P7が切られる。斜面上位に「L」字状の溝が走り、溝裾から50cm前後離れて北側の柱列が並ぶ。P4・P5の間の柱穴は確認できていないが、2×3間と考えられる。柱間は、南北110～140cm、東西160～230cmである。

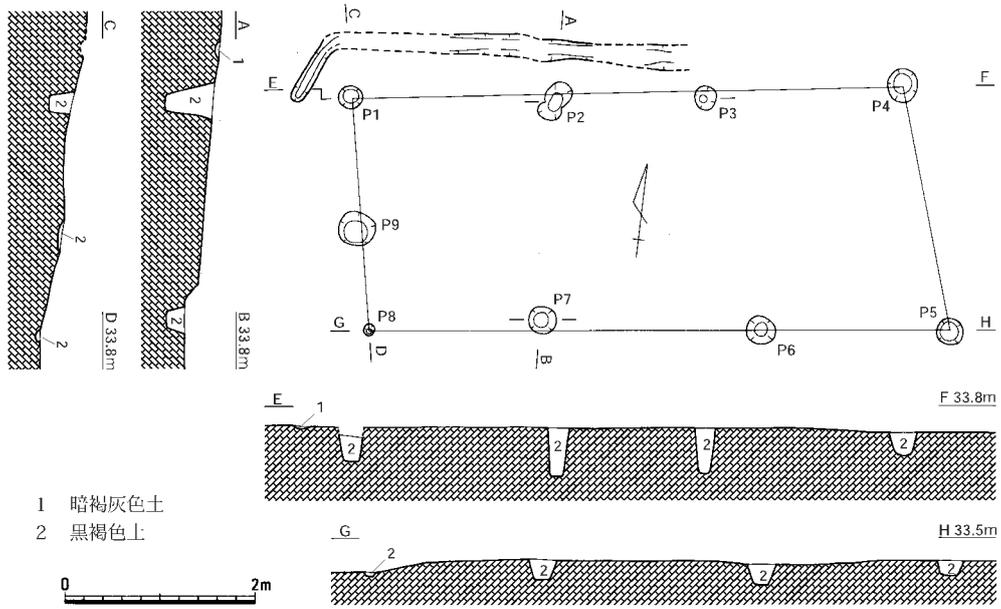
出土遺物はないが、遺構の切り合い関係から中期後葉頃と推察される。

#### 掘立柱建物5 (第12・38図、図版11)

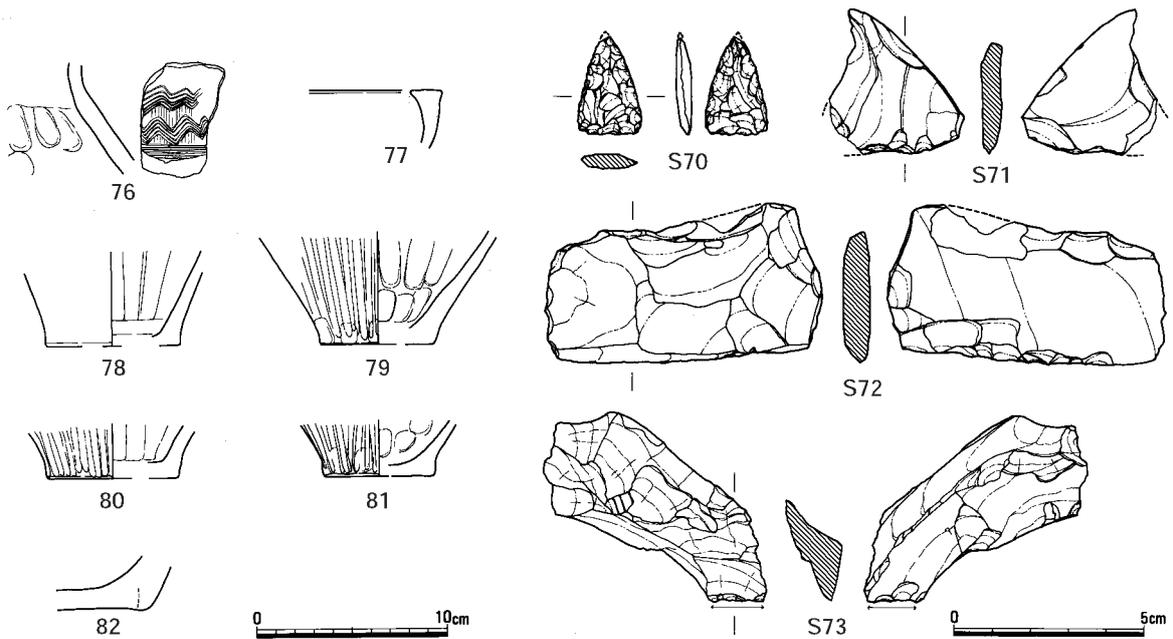
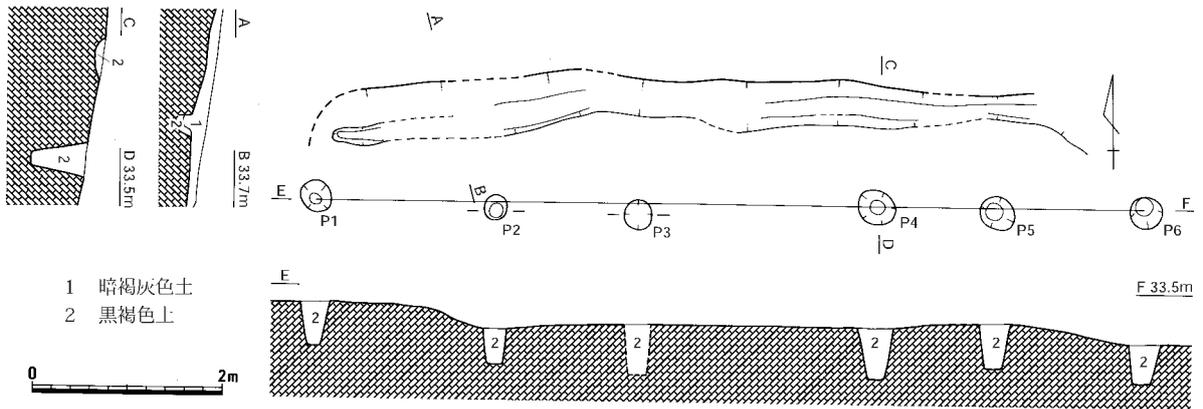
下段東端に位置し、北側に走る溝の裾から約1m離れて柱穴列がある。柱穴は6基あり、柱間距離は120～250cmを測る。溝と柱穴列の状況から東西幅約9mと推察される。

出土遺物は、斜面上位からの流入土である第1層土中からのもので、床面出土のものと厳密には分別できていない。このため、本来は上位の遺構に伴うものを含むと考えられる。中期中葉の土器76は粗いクシ描きの波状文と直線文を持つ壺、77は水平に拡張した口縁端部に二条の浅い凹線がみられる。78～81は甕、82は壺の底部である。78と80の内面には板状工具によるナデ、79・81の内面には指頭圧痕もしくはわナデが看取される。また、S70はサヌカイト製の石鏃、S71・S72は古銅輝石安山岩製の石器である。両者共に風化が顕著に進んだ剥片で、剥離の詳細は不明瞭だが、側縁に連続した剥離が確認できることから刃器と判断した。S73はガラス質流紋岩製の剥片の一端に微細な剥離痕を持つ使用痕のある剥片である。

時期は、出土遺物から中期中葉頃と考えられる。



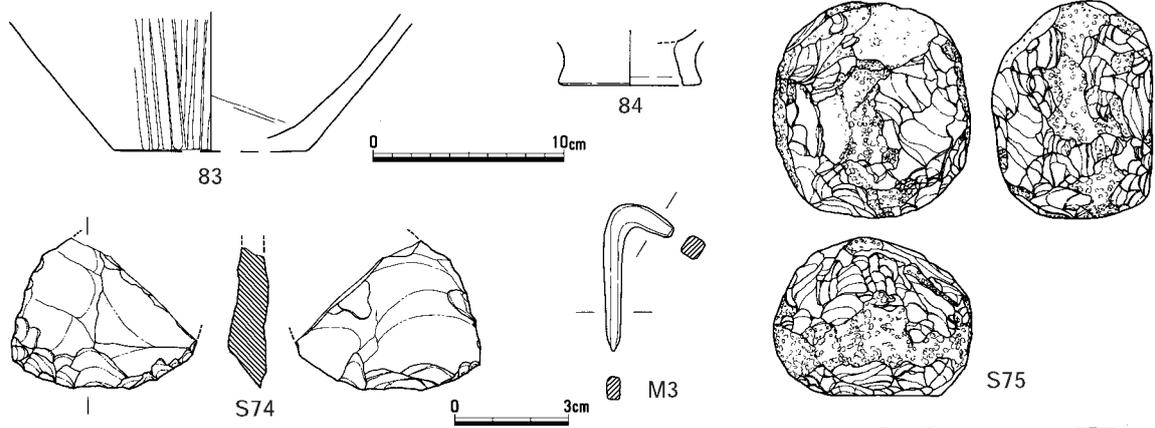
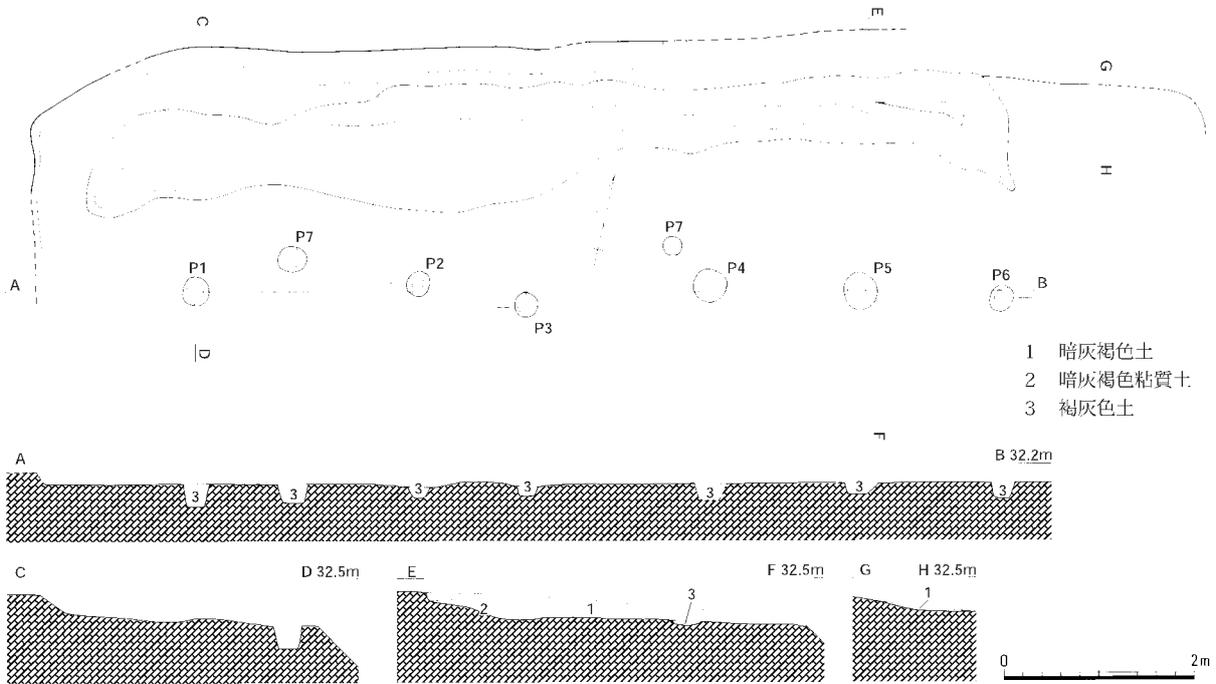
第37図 掘立柱建物4 (1/80)



第38図 掘立柱建物5 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/4)

掘立柱建物6 (第12・39図、図版5・10・13・14)

下段東端に位置し、南側は大きく削平されている。斜面上位を「L」字に切った裾に浅い溝を持ち、溝から1m前後離れて柱穴列がみられる。溝は床面から5cm弱と浅く、東側では特に不明瞭であった。柱穴の状況から東西幅約10mが一区画と判断され、この東側にある段が、建て替えに伴うものか、竪穴住居11に関連する段なのかは判然としない。



第39図 掘立柱建物6 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

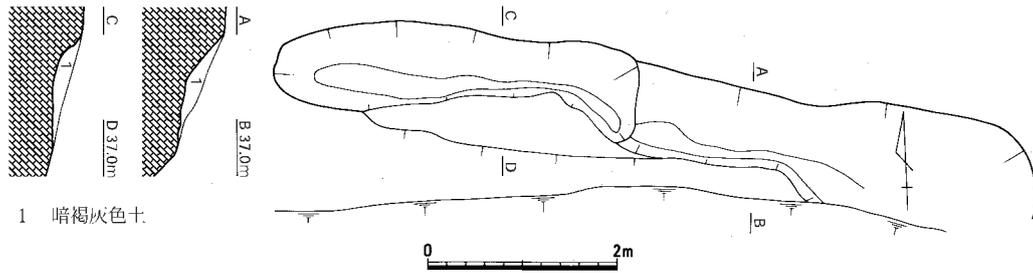
遺物は、床面から壺の底部83と鉄釘状の形態を持つM3が出土した。第1層の床面付近からは、鉢か壺の台84、ガラス質流紋岩製の刃器S74と全面に敲打痕のあるハンマーS75が出土している。また磨製石斧S76は、P2内に側面を上にして東西方向に向けて埋納されていた。

時期は、竪穴住居10を切り、竪穴住居11に切られることから中期中葉頃と判断される。

#### 4 段状遺構

段状遺構 1・2 (第12・40図、図版5)

上段西端に位置し、全面は大きく削平されて30cmほどの段になっている。1と2は検出時は同一埋土であったが、壁際の溝の状況から2基が重なっていると判断される。床面は流出しており遺物は弥生土器の小片が埋土にみられる程度である。また、南側の段裾に柱穴が数基確認されたが、本遺構との共伴関係は明確でない。時期は、周辺の状況から中期後半頃と推察される。



第40図 段状遺構 1・2 (1/80)

段状遺構 3 (第12・41図)

中段中央で、前面は1m以上の段になっている。埋土はほとんど流出しており、出土遺物もなく、溝もかろうじて確認できる程度である。溝と重複して浅い柱穴2基を確認した。

時期は、周辺の状況から中期後半頃と判断される。

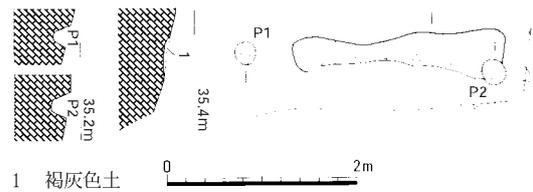
段状遺構 4 (第12・42図)

下段西側に位置し、長さ約7mの「コ」の字状の溝のみを検出した。斜面に直交することから人為的な区画溝と判断されるが、この南側には共伴する柱穴が検出されないため、性格は明確でない。遺物は、埋土中から甕85・86と壺87の口縁部が出土した。87の内面には櫛ガキの格子目文がみられる。

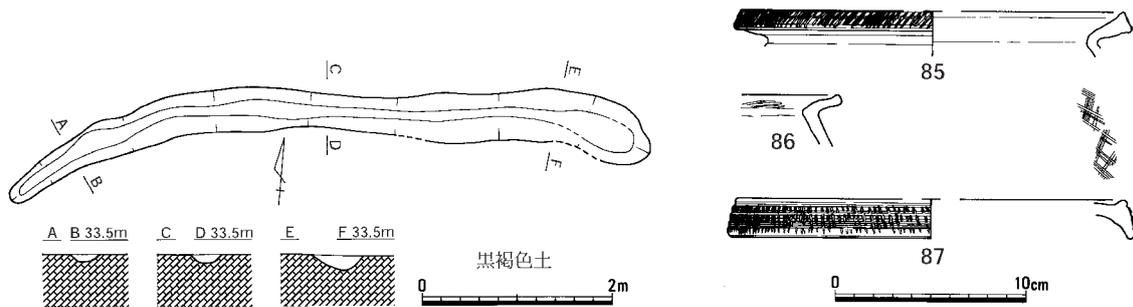
時期は、出土土器から中期中葉と判断される。

段状遺構 5・6 (第12・43図)

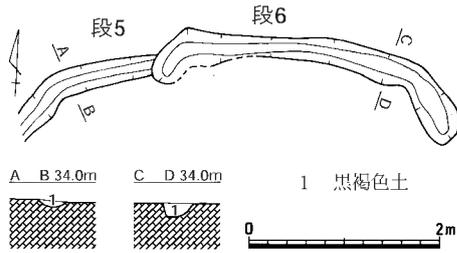
下段西側に位置する、切り合い関係を持つ2条の溝である。段状6は長さ約3mの「コ」の字状の区画がみられるが、両者とも柱穴は確認できない。時期は、周辺の状況から中期後半頃と推察される。



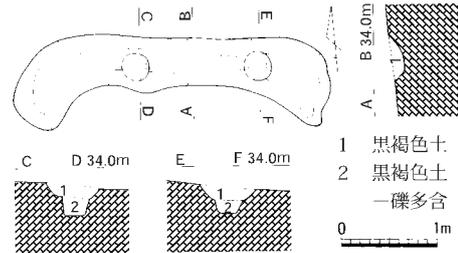
第41図 段状遺構 3 (1/80)



第42図 段状遺構 4 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第43図 段状遺構 5・6 (1/80)

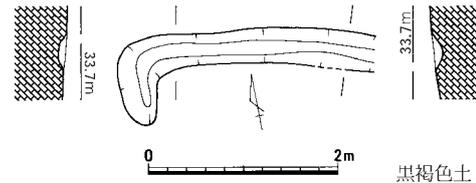


第44図 段状遺構 7 (1/80)

段状遺構 7 (第12・44図)

下段中央に位置する「コ」の字状の溝である。約3mの幅を区画しているが、南側には柱穴はみられない。溝の底面には深さ30cmほどのピット2基が溝埋土除去後に確認されたが性格は不明である。

時期は、出土遺物はないが中期後半頃と推察される。



第45図 段状遺構 8 (1/80)

段状遺構 8 (第12・45図)

下段中央に位置し、竪穴住居7に東側を切られる「L」字状の溝で、現状で約2.5mの幅を区画する。

遺構の切り合い関係から中期中葉頃と推察される。

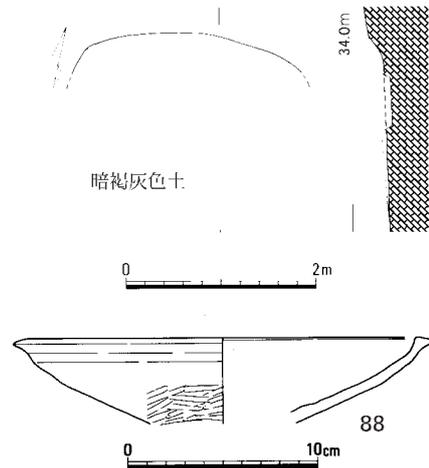
段状遺構 9 (第12・46図)

下段中央に位置し、斜面を「L」字状に削平して平坦面を削出しているが、明確な柱穴は確認されない。

出土した高杯88から、時期は中期末葉頃と判断される。

段状遺構10 (第12・47図)

下段東側で、竪穴住居9の柱穴によって切られている。西側隅部分のみの検出で、柱穴や規模は不明である。遺物は、溝を切る後世の柱穴から出土した磨製石包丁片S77などがあり、周辺状況から中期後半頃と推察される。

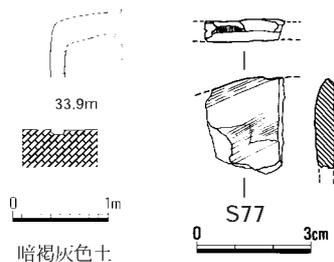


第46図 段状遺構 9 (1/80)  
・出土遺物 (1/4)

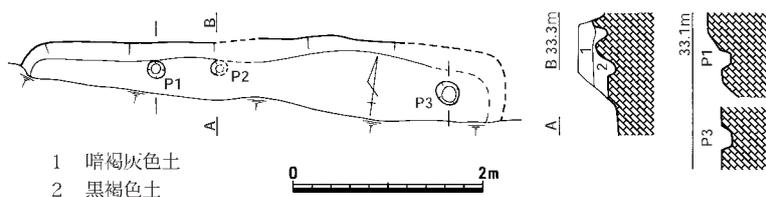
段状遺構11 (第12・48図)

下段東側に位置し、幅約5mに区画されているが、南側は約10cmほどの段になり、床面は削平を受けている。壁際のピット3基以外には柱穴はなく、出土遺物も土器の細片のみである。

時期は、竪穴住居12との切り合い関係が不明瞭ながら、おおよそ中期中葉頃と推察される。



第47図 段状遺構10 (1/80)  
・出土遺物 (1/2)

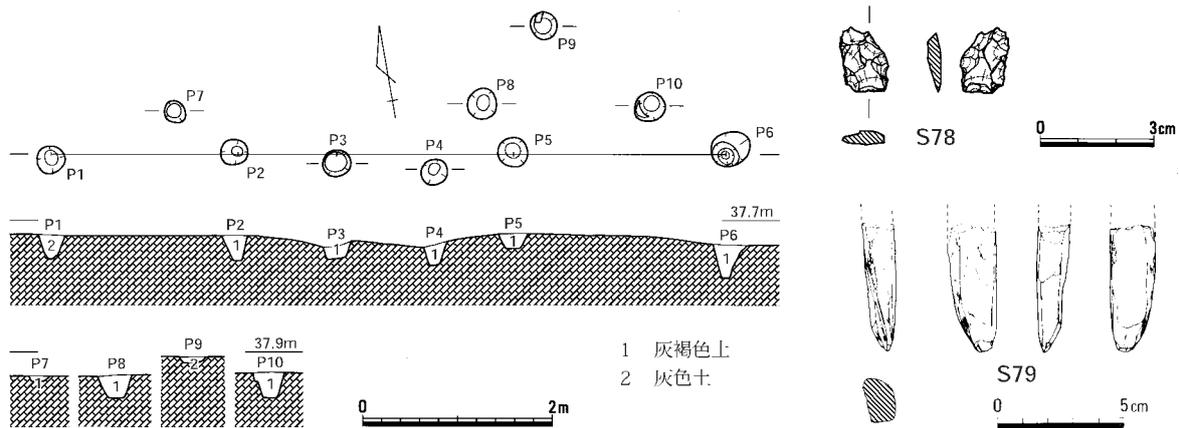


第48図 段状遺構11 (1/80)

## 5 柱穴列

### 柱穴列 1 (第12・49図、図版11・13)

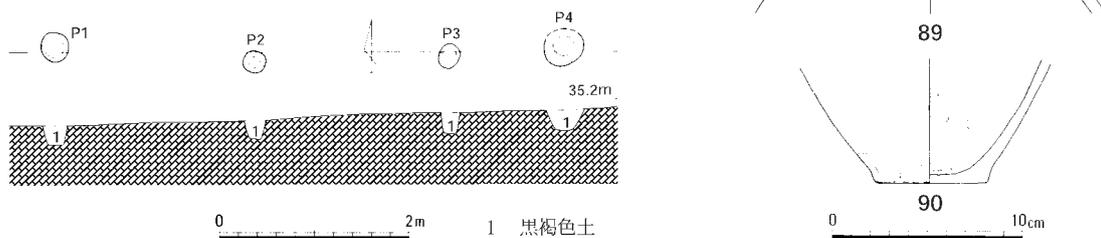
最上段西端に位置し、検出面からの深さも深い柱穴群である。P1～P6が斜面に対して比較的平行して直線的に並ぶ。柱穴群の下位には段状遺構1・2があることから、これらに伴っていた可能性がある。遺物はP8からサヌカイト製の両面に粗い二次調整のみられる石器S78、P9から柱状片刃石斧S79がある。調整の状況から石鏃の失敗品と考えられる。このほかP9からは被熱痕のある台石が縦に詰められた状態で出土した。時期は、周辺の状況から中期後半頃と推察される。



第49図 柱穴列 1 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/3)

### 柱穴列 2 (第12・50図)

中段西端に位置する。南側が大きく削平を受けていることから掘立柱建物の可能性もある。遺物はP3中から甕89・90が出土した。89は口縁端部に刻みと棒状浮文がみられる。これらから、時期は中期後葉と判断される。

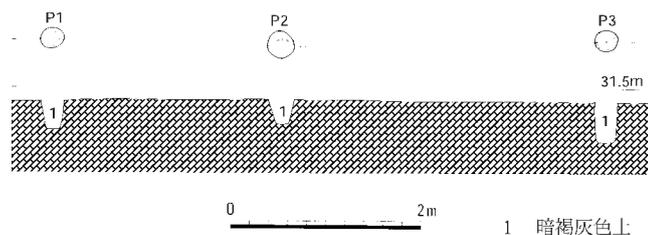


第50図 柱穴列 2 (1/80)・出土遺物 (1/4)

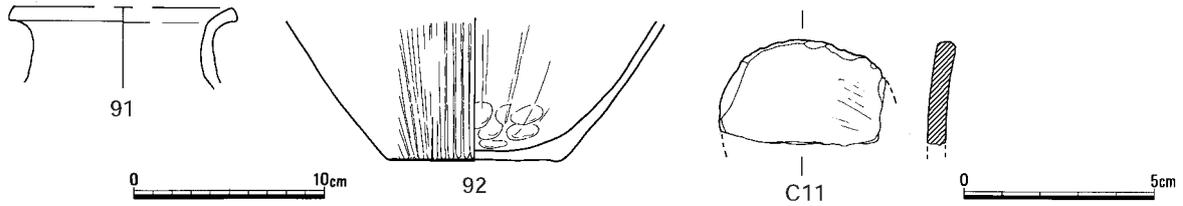
### 柱穴列 3 (第12・51・52図、図版2)

最下段東端に位置し、南側は30cm程の削平を受けている。遺物は、P2から壺91・92が柱穴一杯に詰め込まれた状態で出土した。円板形土製品C11はP3から出土した。

時期は、周辺の遺構状況や出土土器から中期中葉と判断される。



第51図 柱穴列 3 (1/80)



第52図 柱穴列3出土遺物 (1/2・1/4)

## 6 土壇

### 土壇1 (第12・53図)

最上段西端で、柱穴列1の東に位置する。楕円形の掘り方の東壁には、被熱した地山礫がみられるが、他に出土遺物がないため、性格は不明である。時期は、周辺の状況から中期後半頃と推察される。

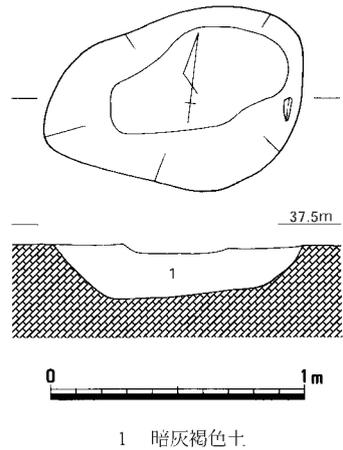
### 土壇2 (第12・54図、図版6)

下段西端に位置し、平面長方形を呈し、斜面に平行する主軸を持つ。埋土は3層に分層でき、第2・3層は自然流入土と判断されるが、第1層が人為的埋土か明確でない。遺物は第1層中から、甕93、壺94・95、台96があり、これらから時期は、中期中葉と判断される。

### 土壇3 (第12・55図、図版6)

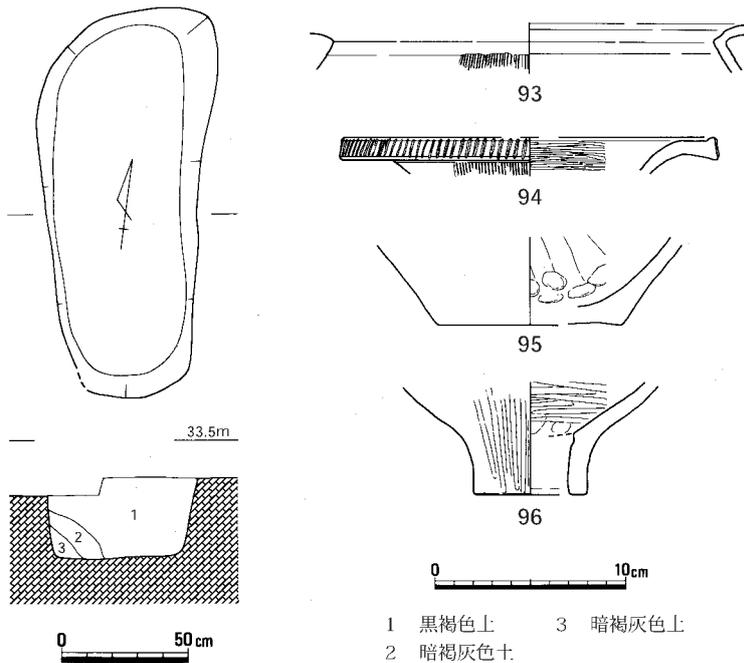
下段西端で、段状遺構4の中に位置する。長方形を呈し、斜面に平行する主軸を持つ。埋土は小礫を多く含み、大きく4層に分層される。埋土は西側からの自然流入土と判断され、性格は明確でない。

出土遺物はないが、周辺の状況から中期後半頃と推察される。



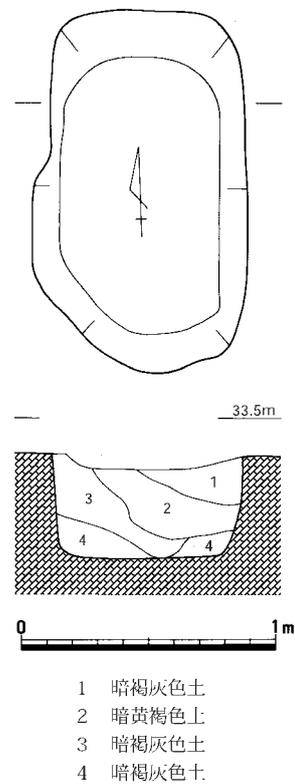
1 暗灰褐色土

第53図 土壇1 (1/30)



1 黒褐色土 3 暗褐色灰色土  
2 暗褐色灰色土

第54図 土壇2 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 暗褐色灰色土  
2 暗黄褐色土  
3 暗褐色灰色土  
4 暗褐色灰色土

第55図 土壇3 (1/30)

土壌4 (第12・56図)

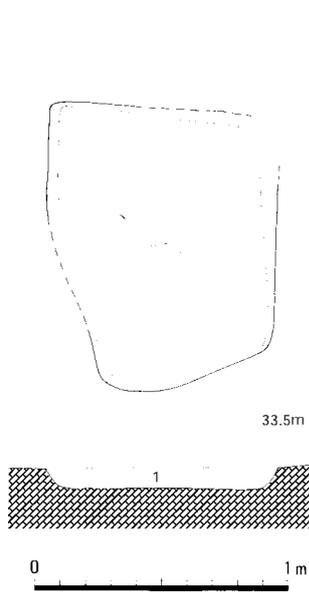
下段西側に位置し、段状遺構4に切られる。歪な方形を呈し、検出面からの深さは近接する土壌よりも浅い。出土遺物がないため、性格は明確でないが、時期は中期中葉頃と推察される。

土壌5 (第12・57図)

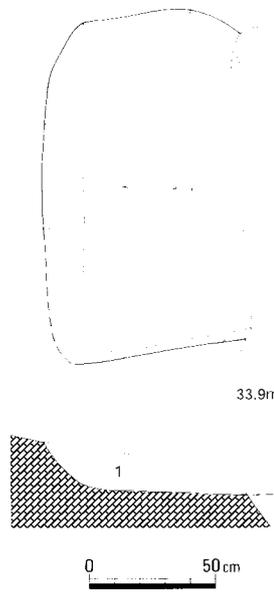
下段中央付近に位置し、段状遺構6に切られ、南側は大きく削平を受けている。埋土は単層でほぼ中央の底面からやや浮いた状態で垂角礫の地山礫が立った状態で検出された。しかしながら、出土遺物がなく性格や時期は不明確で、遺構の切り合い関係から中期中葉頃と推察される。

土壌6 (第12・58図、図版6・8)

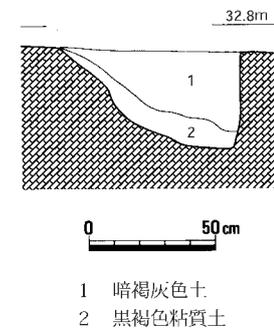
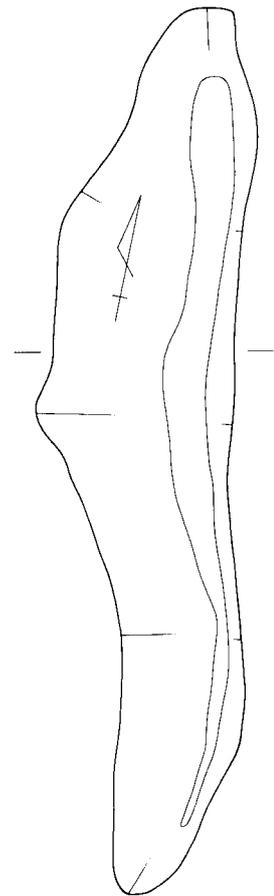
下段中央で、竪穴住居6・7の上面に位置する。遺物は高杯97のみが東壁際で出土した。杯部のみほぼ完形で、口縁部外面には細い凹線があり、肥厚する端部には沈線が1条看取される。時期は、出土土器から後期前葉と判断される。



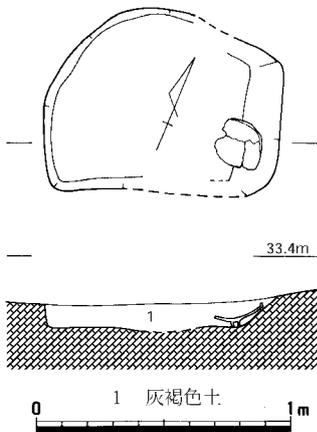
1 暗褐色土  
第56図 土壌4 (1/30)



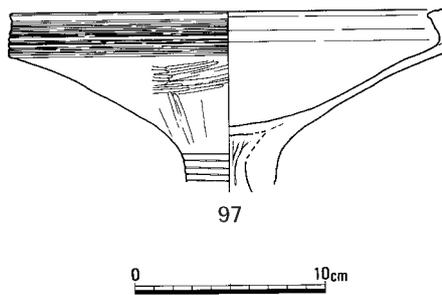
1 暗褐色土  
第57図 土壌5 (1/30)



1 暗褐色土  
2 黒褐色粘質土



1 灰褐色土  
第58図 土壌6 (1/30)・出土遺物 (1/4)



97



98

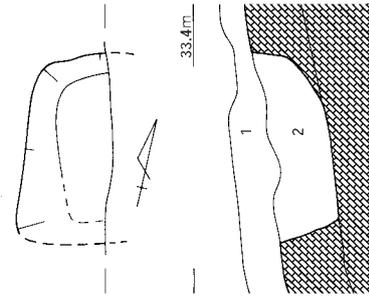
第59図 土壌7 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

第3章 発掘調査の概要

土壙7 (第12・59図、図版6)

下段西側に位置し、斜面に対して平行する。平面形溝状を呈しているが、埋土の第2層の堆積状況から東壁が直立することが明らかで、人工的な土壙と判断した。

出土遺物は壺の口縁98のほか小片が僅かにあり、これらから中期後葉頃と判断される。



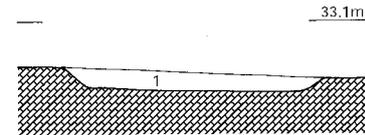
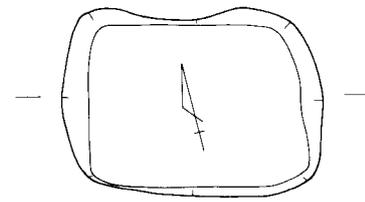
1 暗褐色土 2 黒褐色土

第60図 土壙8 (1/30)

土壙8 (第12・60図)

下段東側に位置する方形の土壙である。埋土は第2層の単層で、上面を掘立柱建物5の埋土の第1層で被覆されている。

出土遺物はないが、遺構の切り合い関係から中期中葉頃と推察される。



第61図 土壙9 (1/30)

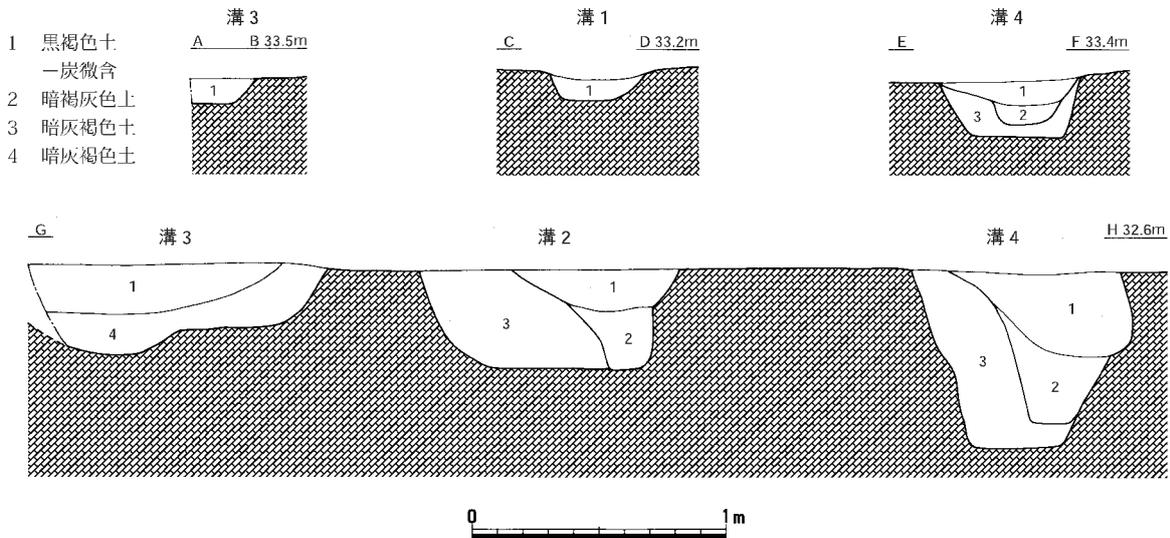
土壙9 (第12・61図)

下段東側で、たわみの上面に位置する。埋土は単層で、残存状況が悪く出土土器はない。ただ、検出面上面で鍛冶滓片が出土したが、この鉄滓が遺構に伴うかどうかは明確ではない。埋土の状況から弥生時代の遺構と判断され、他の鉄滓が古代以降のもの可能性が高いという分析結果から共伴しないと判断した方が良さそう。したがって、土壙の時期は、埋土と遺構の切り合い関係から中期後葉以降と判断される。

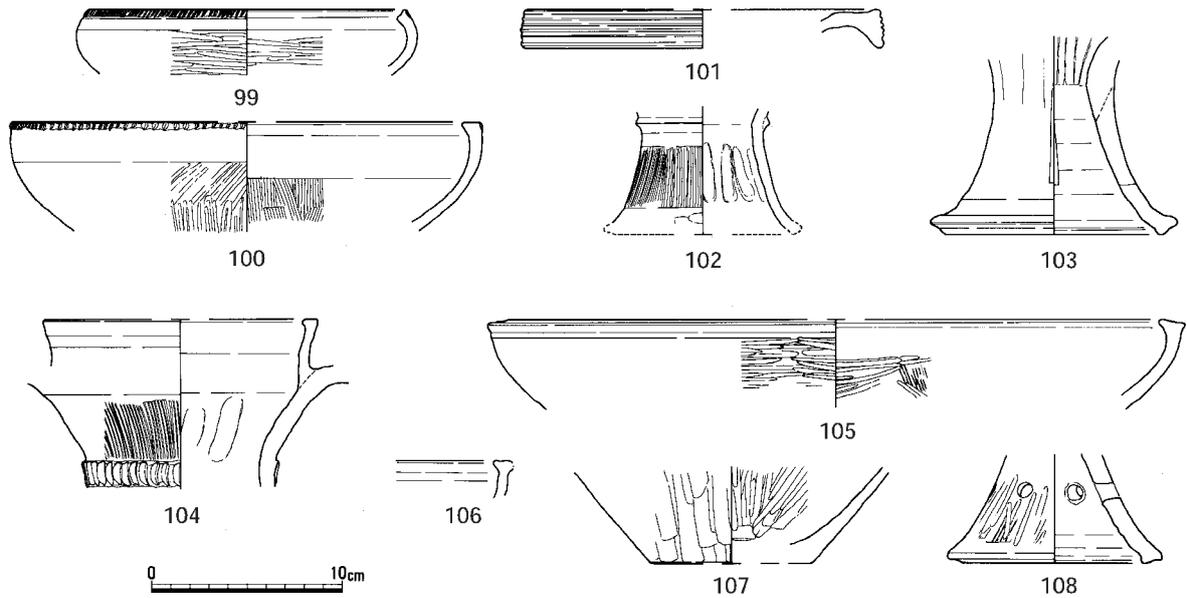
7 溝

溝1～4 (第12・62～65図、図版9・10・13)

調査区西端で、下段から一部最下段に位置する。検出状況から溝1・2が最も古く次いで溝3・4となるが、溝1・2は同一流路の可能性が高い。また、溝3はこの西側に浅い谷が入っており、断面



第62図 溝1～4 (1/30)



第63図 溝1・2出土遺物（1/4）

の形状も他の溝と異なることから自然流路の可能性がある。溝1・2・4の埋土は同様な状況で、最初の掘り方が基盤層の山砂利である第3層によって一度に埋没した後もう一度掘りかえしている。第2層も山砂利を主体とした土で、一気に埋没しているが第1層土は炭や遺物を含む土砂である。流路を違ってまで掘り返しを行っていることから、集落の西端の排水や区画などの機能を持った溝であったと推察される。

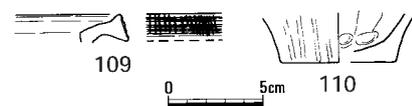
出上遺物は、第1層中を主体として、他の層からも小片が僅かにみられる。

溝1からは、高杯**99・100・102・103**、壺**101**がある。**99・100**は、色調や胎土、口唇部に刻みを有する点と同じだが、内面調整と口縁端部の拡張方法が異なる。口縁部**101**は下方へ拡張した後端部に凹線が巡る。**102**は脚端部はナデによって消されているが、外面にはハケメが残り、屈曲部に断面三角形の貼り付け凸帯が付く。**103**は三角形の貫通する透かし孔がみられる。

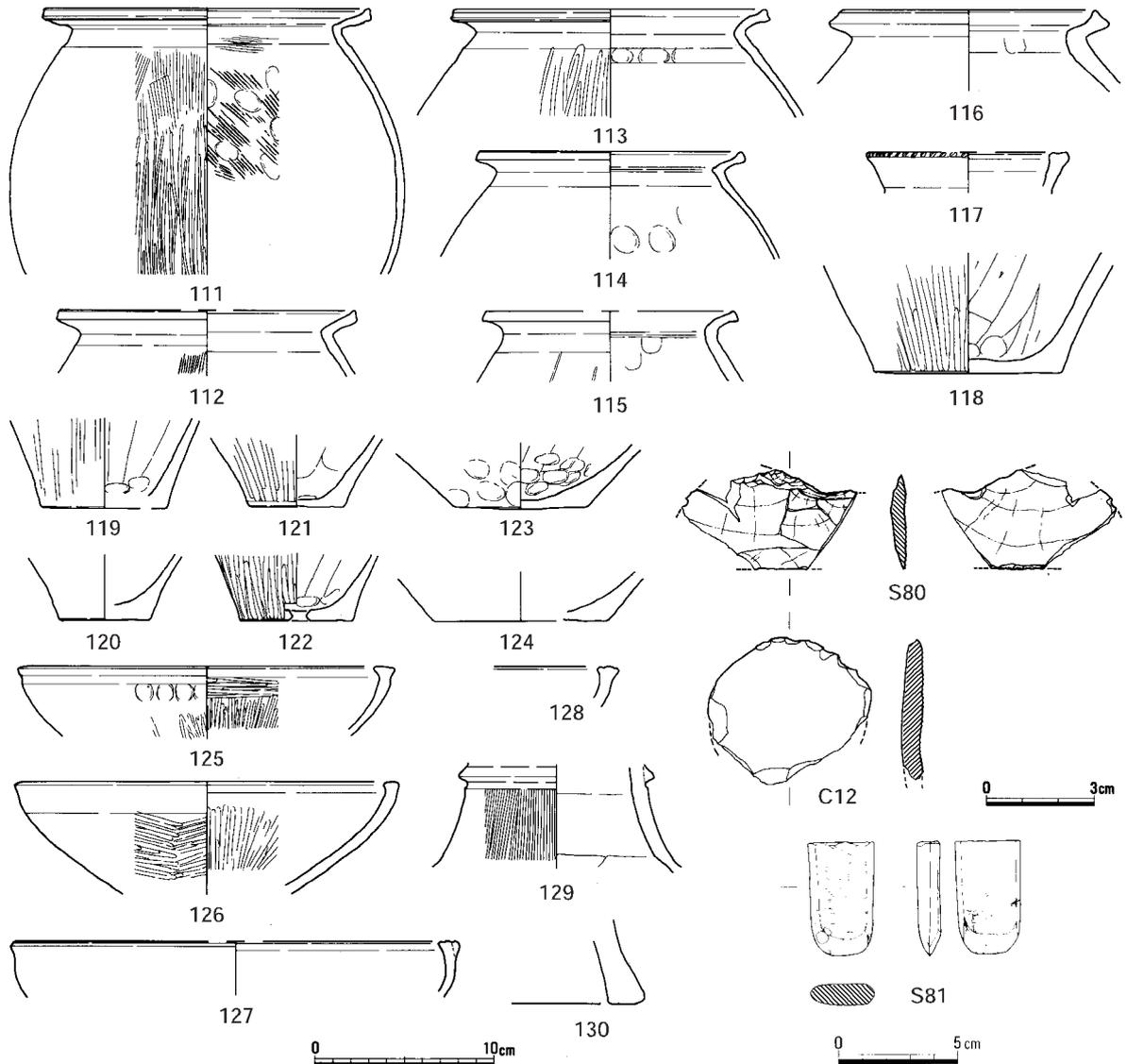
溝2からは、壺**104・107**と高杯**105・106・108**がある。**104**は大きく外反する口縁部の内側に更に直立する粘土帯を貼り付け口縁部にし、外反部分を鏢状にしている。

溝3からは出土遺物は少なく、図示できるものは、口縁拡張部に細い凹線の後にヘラ状工具で刻みを入れる壺**109**と甕**110**のみである。

溝4からの出土遺物は、溝1・2のものも混入していると考えられるが、最も多い。**111～116・119～122**は甕で、**111～113**は僅かに拡張する口縁端部に凹線がみられる。底部**122**には焼成後の貫通孔が残る。**117・118・123・124**は壺で、口縁部**117**は、端部外面に刻みを施し、端部上面には1条の凹線が巡る。**125～128**は高杯で、水平に拡張する口縁端部は、**125・126**が平らで**127・128**は2条の凹線が巡る。**129**は底径が大きく器壁も厚めであることから壺か鉢の台と考えられる。**130**は形状から器台と推察される。また、土製品としては甕の体部片を転用した円板形土製品**C12**が1点のみある。図示した石器は、**S80**は横長のサヌカイト剥片に使用痕が残るものである。磨製石器**S81**は、もともとは長い扁平片刃石斧であったものを折損後に折面を含めた全周を研磨し直している。



第64図 溝3出土遺物（1/4）

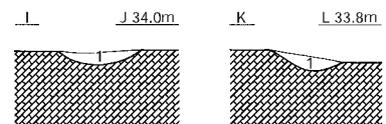


第65図 溝4出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

出土遺物から、溝1～4は中期中葉から後葉まで機能していたと判断される。

溝5 (第12・66図)

下段東端に位置する。一部のみが僅かに残存しており出土遺物はない。斜面に平行しており、自然流路の可能性もあるが、埋土の色調から弥生時代の遺構と推察される。

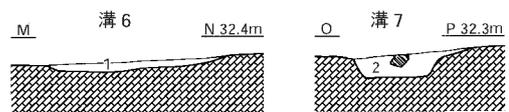


1 暗褐色土

第66図 溝5 (1/30)

溝6・7 (第12・67図)

下段東端に位置し、両者とも西側を竪穴住居11に切られる。溝6はくぼみ状に非常に浅く西側で収束する。しかし、溝7は断面箱形で比較的深く、流路方向から掘立柱建物6に関連する可能性もある。



1 暗灰褐色土 2 灰褐色土

第67図 溝6・7 (1/30)

両者とも出土遺物がなく性格は不明確だが、時期は遺構の切り合い関係から中期中葉頃と推察される。

## 8 その他の遺構

くぼみ (第12・68図、図版12)

下段東端で斜面に平行する幅広い溝状に灰白色の落ち込みを確認した。非常に硬化が進んでおり、完掘できていないため底面の状況が未確認で、性格も明らかにできていない。

遺物は土器の小片が多く石器もみられるが、最終的な流れ込み遺物である。**131**~**133**は壺で、**134**は器種は明確でないが、高杯の脚であろうか。**S82**は板状剥片の周辺のみを調整し、短冊形に加工した石鋏である。**S83**は二次加工のある剥片である。

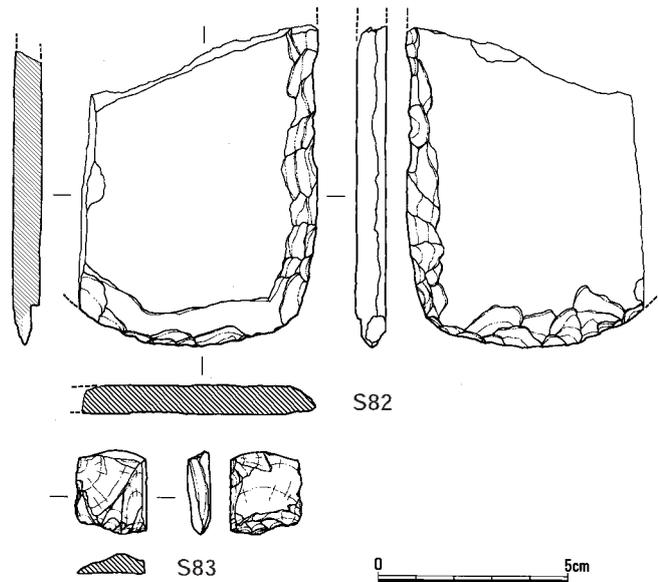
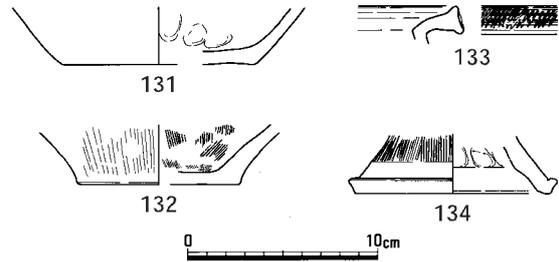
くぼみの形成時期は、掘立柱建物4の柱穴が埋没後に掘削されていることから中期中葉と推察される。

斜面堆積 (第12・69・70図、図版9・10)

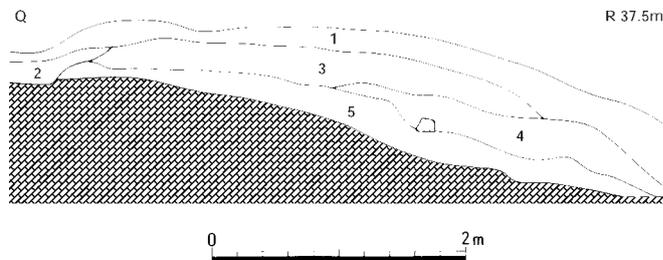
上段東端に位置する土器包含層で、この位置より竪穴住居15から谷部への流出遺物が主体であると推察される。

遺物は主に第5層から出土し、**S84**は板状の円礫の周縁に敲打痕が残る叩き石で、一部線状の敲打痕も看取される。**S85**は基石状の円礫に摩滅痕の残る石器で、磨製石器の刃部を研磨するミガキ石である。**C13**は壺体部を転用した円板形土製品である。**135**は壺、**136**は接点はないが復元器高約28cmの甕、**137**・**138**・**140**~**142**も甕である。**143**は厚いが、大形の甕の底部であろう。**139**は大形高杯で、内傾する拡張した口縁端部には細い凹線2条が巡る。**144**は器台と考えられるが、裾部に粘土を貼り付けた補修痕がみられる。

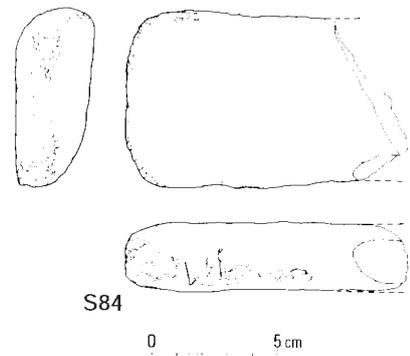
斜面堆積の形成時期は、出土遺物から中期中葉頃と判断される。



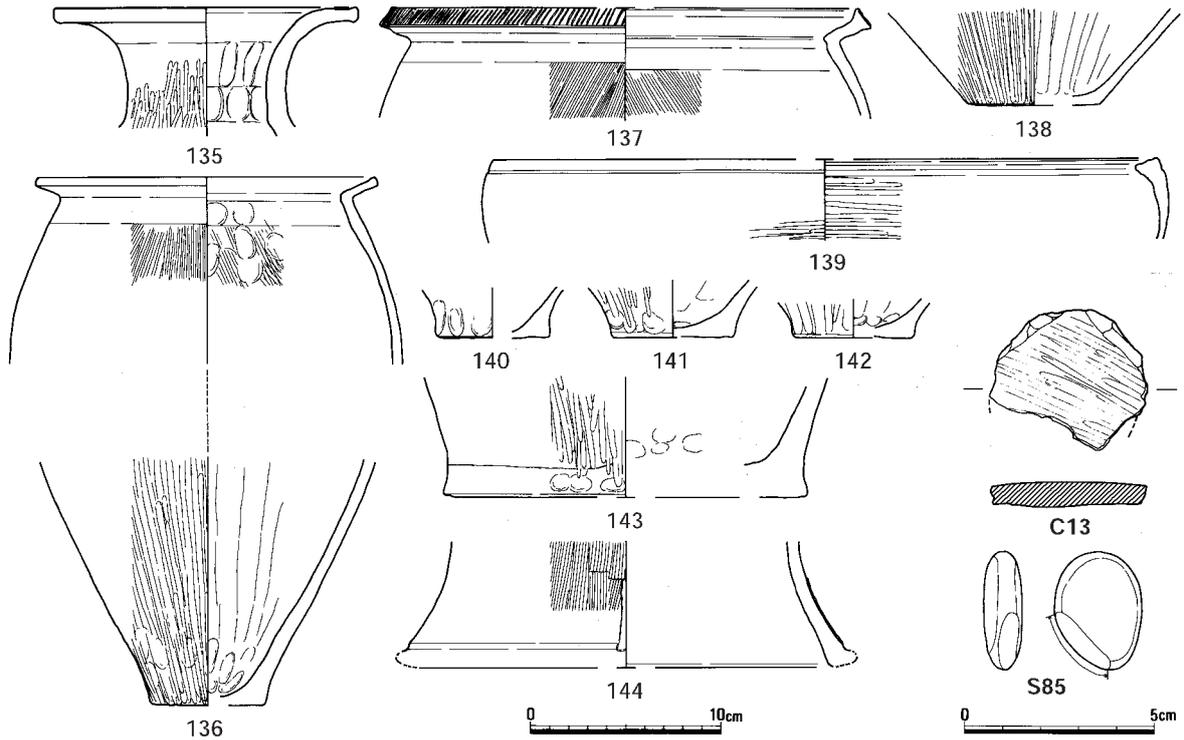
第68図 くぼみ出土遺物 (1/2・1/4)



- |                |              |
|----------------|--------------|
| 1 暗灰褐色土 (表土)   | 4 暗褐色土 (包含層) |
| 2 鈍い黄褐色土 (造成土) | 5 黒褐色土 (包含層) |
| 3 鈍い黄褐色土 (造成土) |              |



第69図 斜面堆積 (1/60)・出土遺物① (1/3)

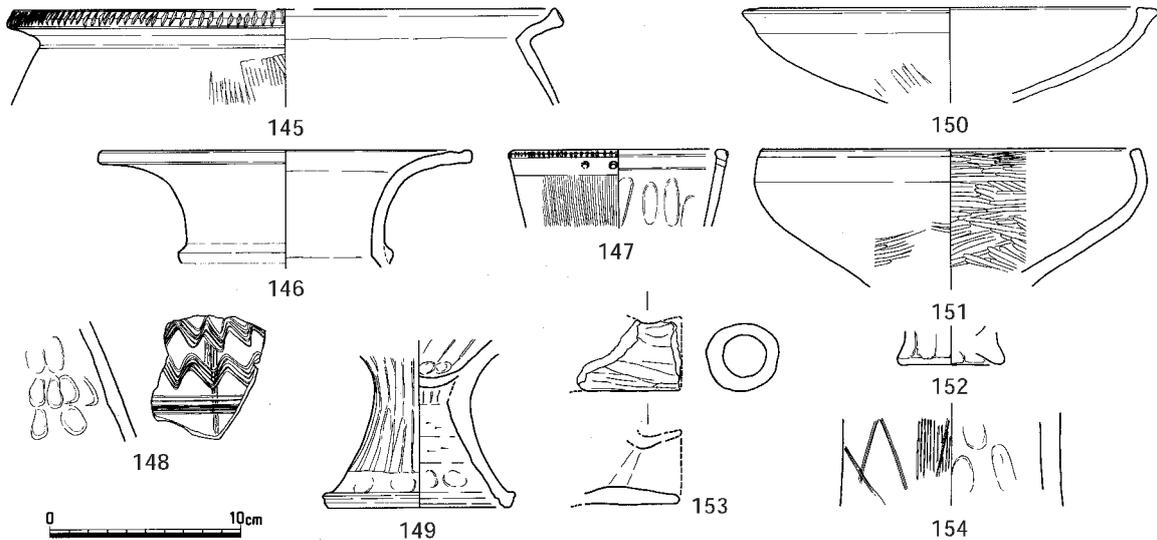


第70図 斜面堆積出土遺物② (1/2・1/4)

9 遺構に伴わない遺物 (第71~73図、図版9~13・15)

遺跡が斜面に立地するため、遺物の大半が遺構から遊離した状態で出土した。出土土器は中期中葉から後期前葉までがみられ、遺構出土のものと同様時期差は認められない。したがって、土製品や石器も厳密には時期比定はできないが、中期後半を主体とするものと考えてよいだろう。

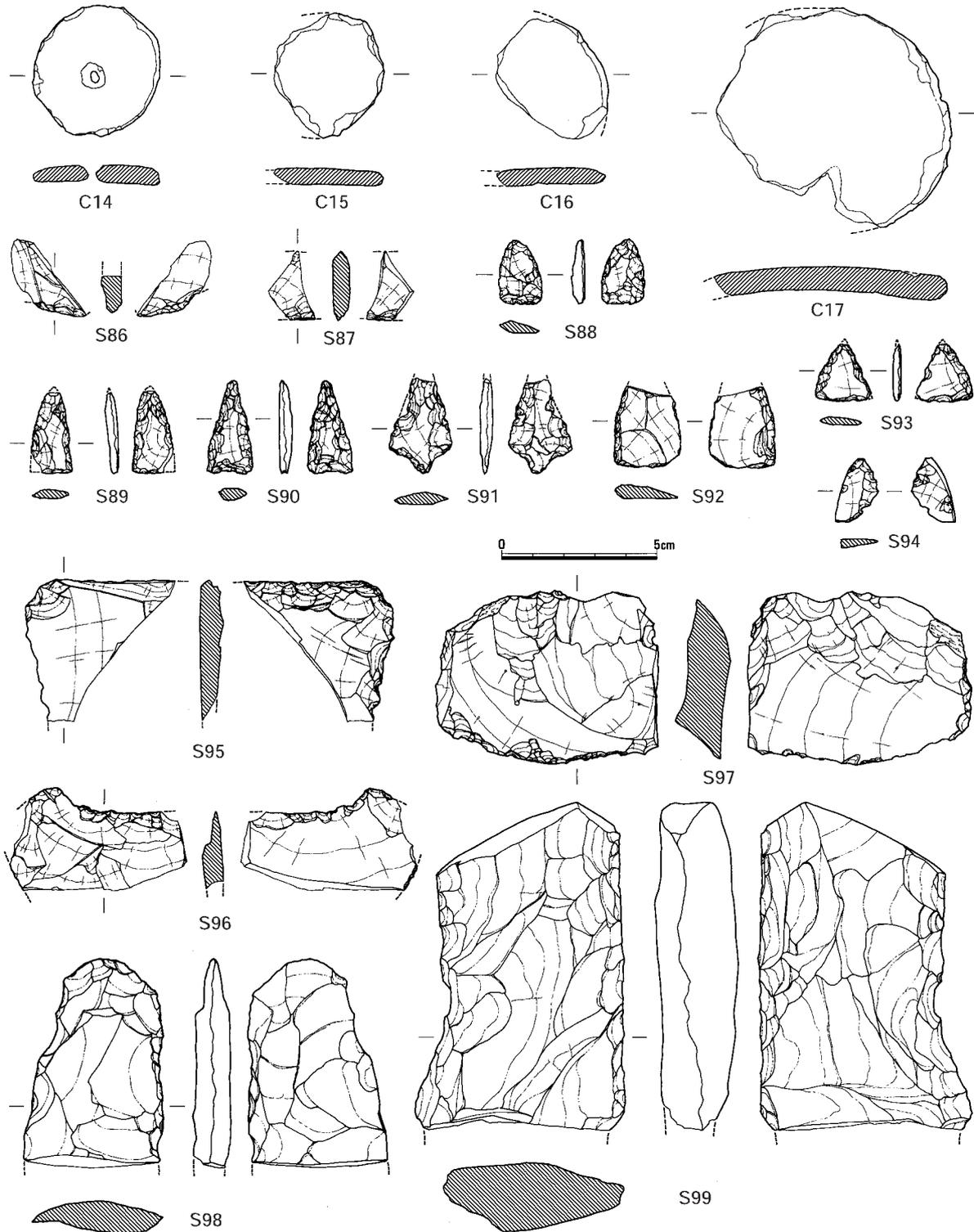
図示した上器は下段出上で、145~147・149・150が東半、148・151~154が西半から出土した。145は大形の甕で口縁端部に刻みを施す。146の壺は頸部に貼付凸帯が巡る。鉢147は小片で口縁部に2個一対の穿孔がみられる。壺148は櫛ガキ文がみられる。149~151は高杯、152は鉢の脚で、若



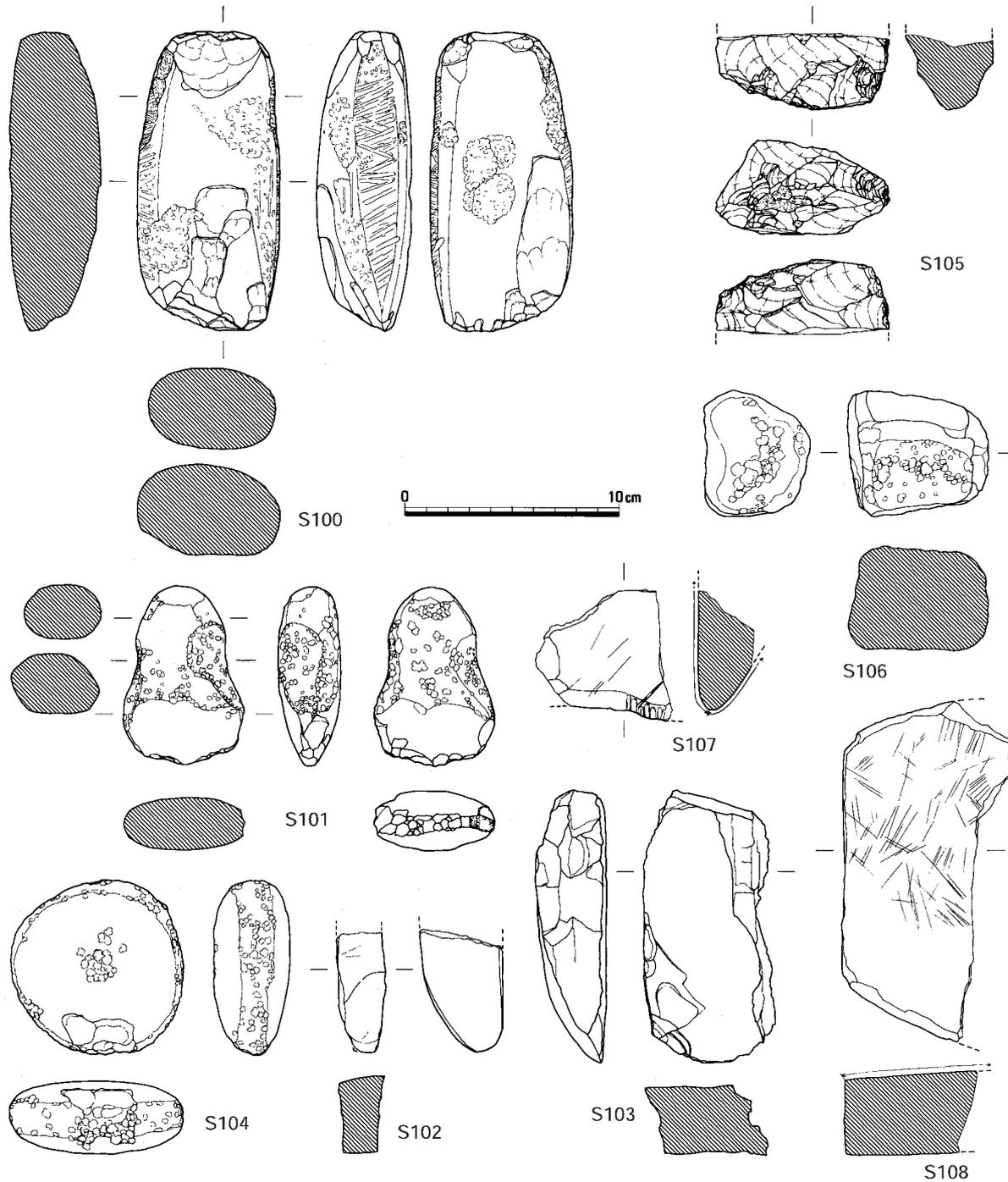
第71図 遺構に伴わない遺物① (1/4)

干被熱による赤化がみられることから製塩土器と考えられる。153は注口付き鉢と考えられる。154は器台片と考えられる筒状の体部片で、外面にハケメののち格子状の線刻が残る。

土製品は、C14が最下段、円板形土製品C15～C17が下段で出土した。C14は甕の体部片の周囲を打ち欠いて整形し、中央に穿孔した紡錘車と考えられる。C15・C16も甕の体部片を打ち欠いて円形に整形している。C17は大形で、壺の体部片の周囲を打ち欠いて整形している。



第72図 遺構に伴わない遺物② (1/2)



第73図 遺構に伴わない遺物③ (1/3)

石器は、遺構分布に比例して出土しており、特にサヌカイトやガラス質流紋岩の碎片・剥片は、下段東半部を主体に分布していることから、竪穴住居近くで石器加工が行われていたと推察される。

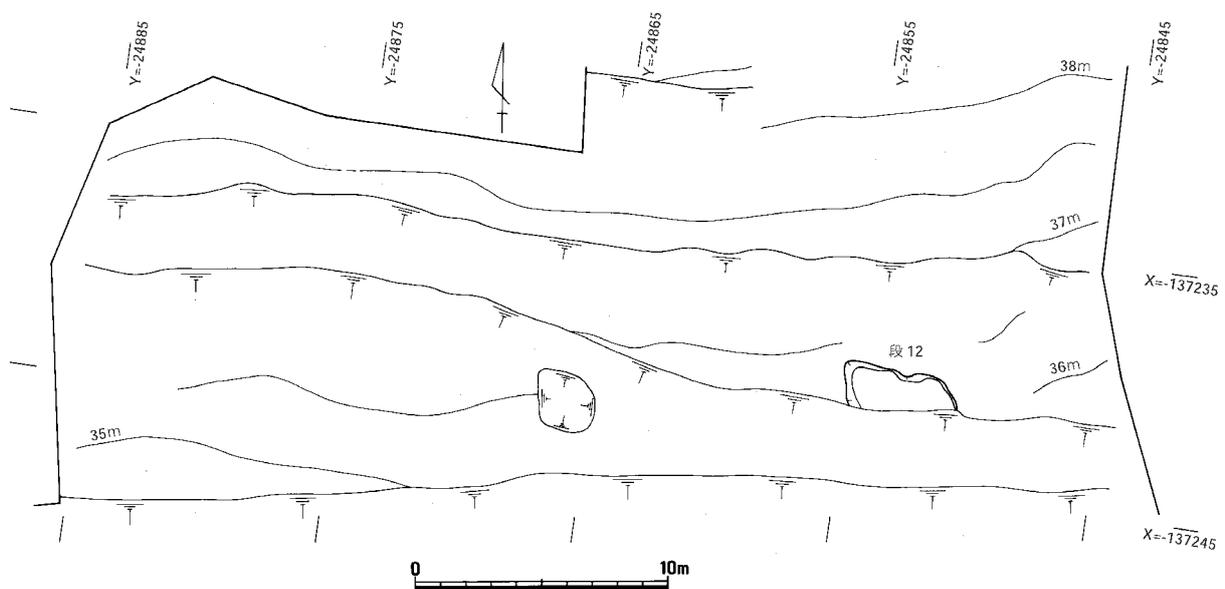
S86～S96はサヌカイト製の剥片石器である。S86・S87は小片だが一辺に潰れが顕著にみられ、肉厚なことから楔形石器と考えられる。S88～S91は石鏃で、S91は唯一の有茎式である。S92は表裏に大きく剥離面を残し、一側辺には丁寧に細部調整を加えているが、もう一側辺と基部はほとんどそれがみられない。形状から石鏃と考えられるが、未製品の可能性がある。S93もS92と同様に表裏に大きく剥離面を残すが、周辺部には丁寧に細部調整が施されており、小形の石鏃の完成品である。S94は剥片の一側辺には片側に粗く細部調整を施し、その裏面に細部調整を行いかけているが、もう

一側辺には折損面がみられる。調整の状況や大きさから石鏃の製作時の失敗品と推察される。**S95**は厚めの剥片の側辺に細部調整を加えて方形に整形していることから石包丁片と考えられる。**S96**は横長剥片の一辺に細部調整を加え、つまみ状の突起を作出している。刃部は残っていないが、刃器片であろう。**S97**はガラス質流紋岩製のスクレイパーで、一部自然面が残るものの全面に二次加工を加えて方形に整形している。その長辺に片側のみ細部調整を行い刃部を作出している。**S98・S99**は古銅輝石安山岩製の石鏃で、風化が顕著なため剥離状況の詳細は不明瞭である。**S98**は表裏に二次加工を加え、端部に粗く細部調整を行う。明確な摩滅や使用痕が看取されなかったことと断面形状から基部と判断した。**S99**も表裏に二次加工を加えて側辺に両面から細部調整を行った後に意図的かどうかは明確でないが、基部を折損している。**S100～S102**は磨製石斧である。**S100**は完形品で、側縁部に製作時のものと考えられる線状痕が顕著に看取される。**S101**は現状では撥形で刃部両面に研磨痕がみられ、全面に整形に伴うと考えられる敲打痕が残る。刃部は細かく剥離し、面を持つことから最終的にはハンマーとして使用されたと推察される。**S102**は柱状片刃石斧の刃部で、摩滅が顕著である。**S103**は円礫のホルンフェルス割った後に側辺部のみ粗く加工し、刃部は剥離面をそのまま使用した片刃石斧である。**S104・S106**は叩き石で、**S104**は扁平な円礫の周囲と平面部に点状の敲打痕を残す。**S105**はガラス質流紋岩製で、側縁部に敲打による潰れが顕著であることから、ハンマー片と判断される。**S107・S108**は砥石で、**S107**の側辺部には線状の使用痕がみられる。

### 第3節 古墳時代後期の遺構と遺物

#### 1 概要

古墳時代の遺物は、遺跡全体で須恵器片が数点みられるのみである。確実に該期に属する遺構は、上段で確認した段状遺構が1基あるのみである。下段で出土した須恵器片の中には柱穴埋土中のものもあり、柱穴の中には古墳時代に帰属するものも含まれる可能性もあるが、埋土等で分別できない。

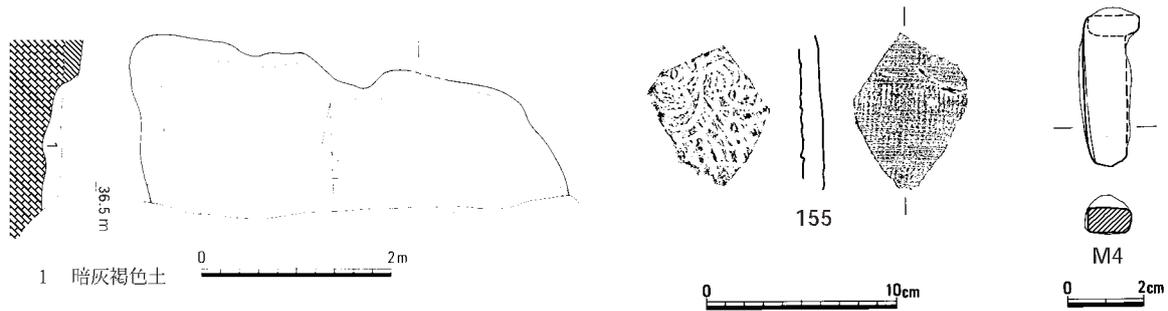


第74図 古墳時代後期の遺構全体 (1/300)

## 2 段状遺構

段状遺構12（第74・75図、図版10）

上段東端に位置し、竪穴住居11の埋没後に築かれている。平面形は歪な方形で、南側床面の大半が流出しており、柱穴の有無は不明瞭である。床面が比較的平らで、幅約5mであることから住居の可能性もある。出土遺物は第1層の上層には弥生土器が多くみられるが、床面付近で灰白色の須恵器甕155と鉄釘M4が出土した。須恵器の時期から本遺構は古墳時代後期頃と判断される。



第75図 段状遺構12（1/80）・出土遺物（1/2・1/4）

## 第4節 古代から中世の遺構と遺物

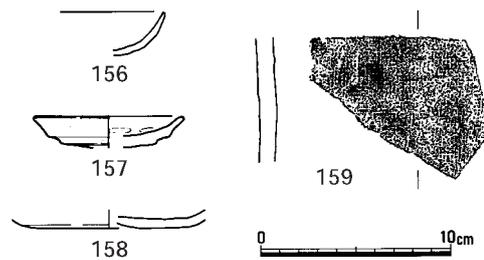
### 1 概要

該期の遺構は、下段を中心に上・中段でも柱穴を主体に検出され、遺物は最上段から最下段まで調査区全域で出土する。検出した遺構は、竪穴1基、掘立柱建物10棟、柱穴列6列、溝4条である。これらのうち掘立柱建物と柱穴列は、調査時に確認できた掘立柱建物10と柱穴列6・7以外は方向と深さを重視して図上復元で確認した。斜面という地形的制約から柱穴底面の海拔高の差違が顕著で、平面的には直線に並ぶものでも柱穴間の差が1m近い場合は、あえて除外している。

### 2 竪穴

竪穴1（第76～78図、図版7）

下段中央に位置し、北壁は花崗岩の岩脈を掘削して築いている。平面形は斜面に直交するように東西に長い長方形を呈する。本竪穴に伴うと判断される柱穴は、四隅に比較的深い柱穴を設け、長軸線の間付近に浅めの柱穴が配される。また、南東隅の壁際に浅く掘り窪め西側に角礫を立てて赤化し、周囲に炭の散布する火処がある。柱穴の掘り方上面も被熱しており、柱との共存状況に課題は残るもののカマドと推察される。出土遺物は、中央床面から土師器小皿156・157と皿158、火処周辺で備前焼159が出土した。

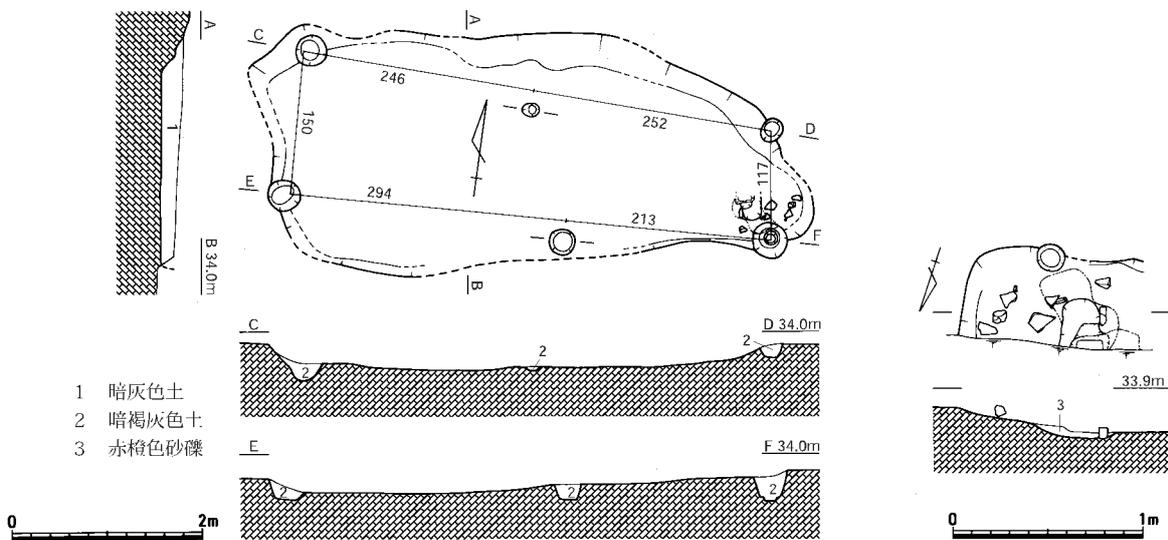


第76図 竪穴1出土遺物（1/4）

時期は、出土備前焼から鎌倉時代頃と判断される。



第77図 古代から中世の遺構全体 (1/300)



第78図 竪穴1 (1/80)・火処 (1/40)

### 3 掘立柱建物

#### 掘立柱建物7（第77・79図）

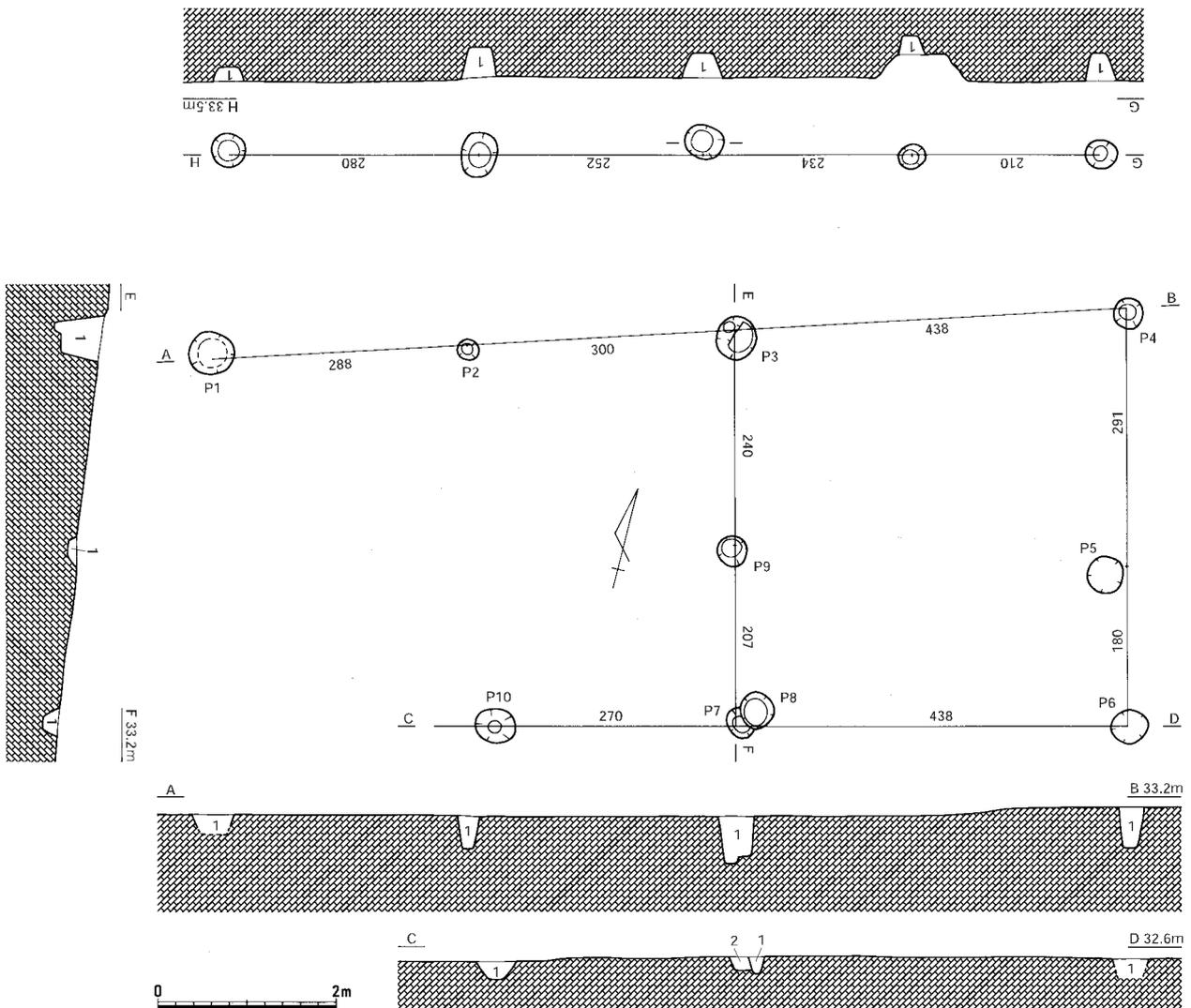
山砂利層を基盤とする下段西側に位置する。2×3間で東西棟で、南西隅の柱穴は検出できない。北側にほぼ平行する柱穴列4がみられる。これはP1～P4と対応するが、柱穴の深さが極端に浅く、柱間も狭いことから塀の可能性はある。柱間は他の建物と比較して広いが、掘り方規模に差違はみられない。時期は、出土遺物がないため不明確だが周辺の状況から中世と推察される。

#### 掘立柱建物8（第77・80図、図版9）

下段西側で掘立柱建物7と重なるように位置する。1×2間の東西棟で、柱穴掘り方は円形で深い。。遺物は、P3から青磁碗**160**が出土した。緑色をおび、外面の蓮弁は線書きで幅も狭い。内面には陰刻がみられる。時期は、鎌倉時代後半以降と推察される。

#### 掘立柱建物9（第77・81図、図版10）

下段西側に位置する。2×2間の南北棟で、P1～P2間の柱穴は現代の攪乱溝の中であつたため確

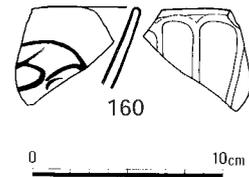
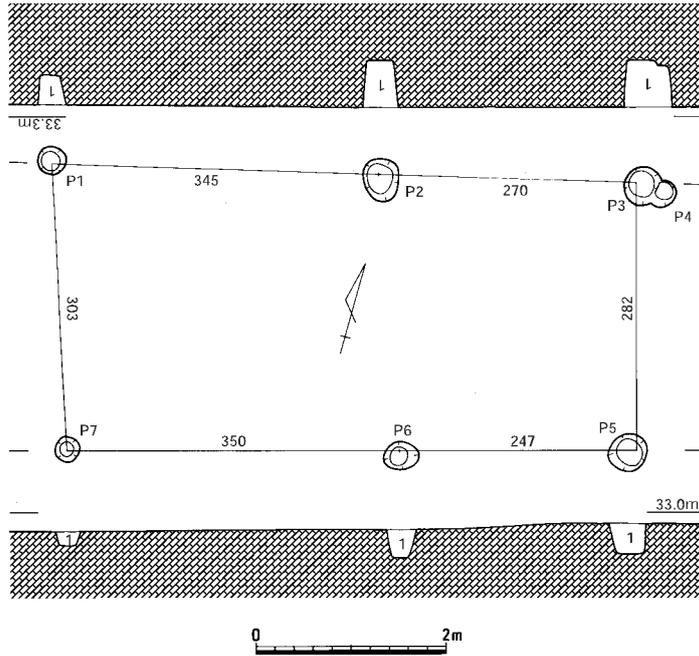


第79図 掘立柱建物7と柱穴列4（1/80）

第4節 古代から中世の遺構と遺物

認できなかった。柱穴掘り方は円形か楕円形で、P8以外は深い。P6の柱痕跡から柱径は20cm程度と推察される。遺物はP7から土師器皿**161**とP6から宋銭**M5**が出土した。

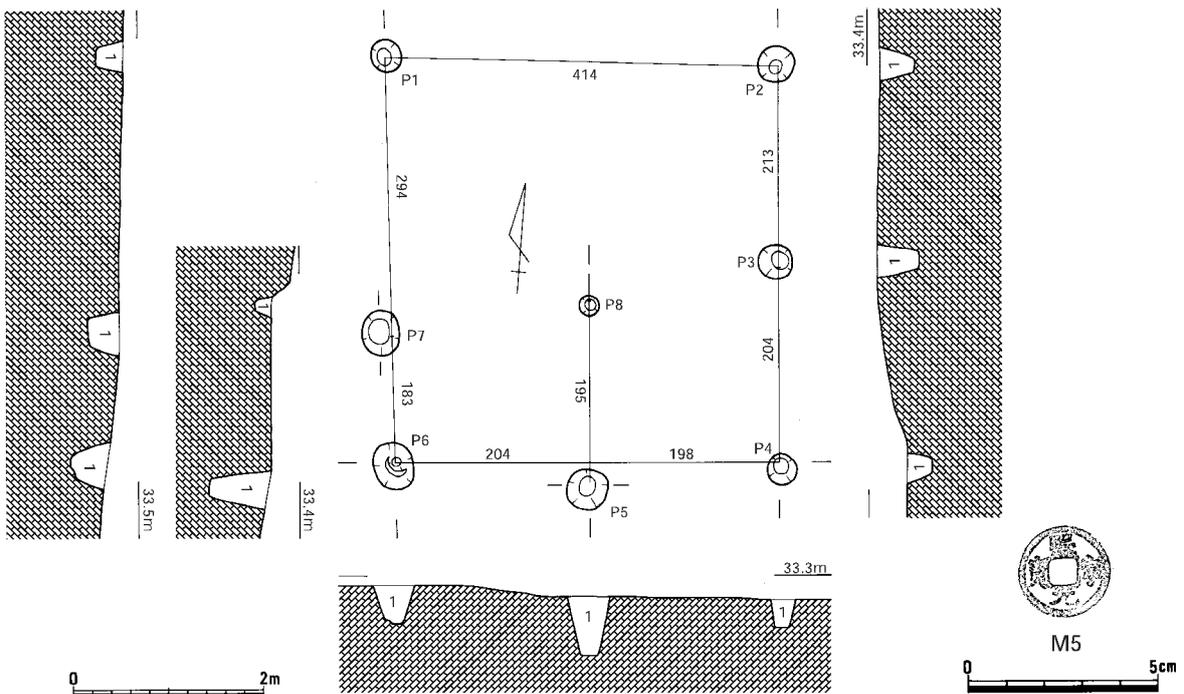
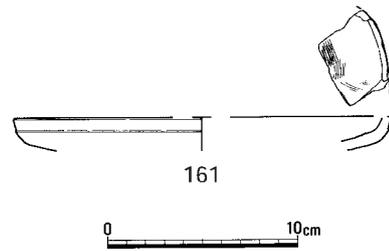
建物の時期は、明確でないが、鎌倉時代頃と推察される。



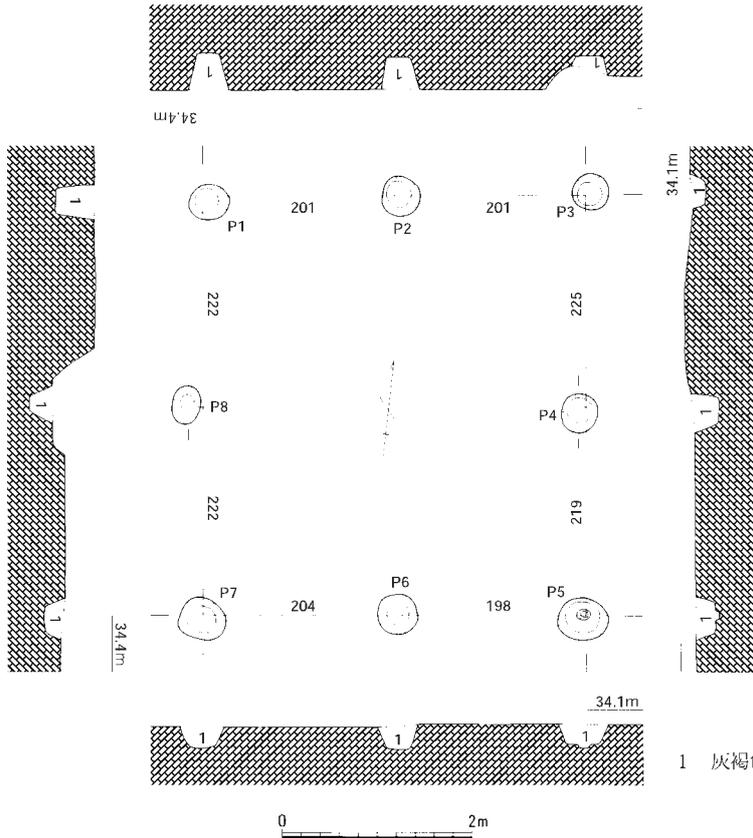
第80図 掘立柱建物8 (1/80)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物10 (第77・82図、図版7)

下段で、西北端に位置する。2×2間の南北棟で、柱穴の掘り方は円形か方形に近い円形を呈す。P6底面の柱痕跡から柱径は約20cmと考えられる。遺物はP5から土師器鍋**162**が出土した。受け口状の口縁端部に溝状の沈線が巡る。



第81図 掘立柱建物9 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/4)



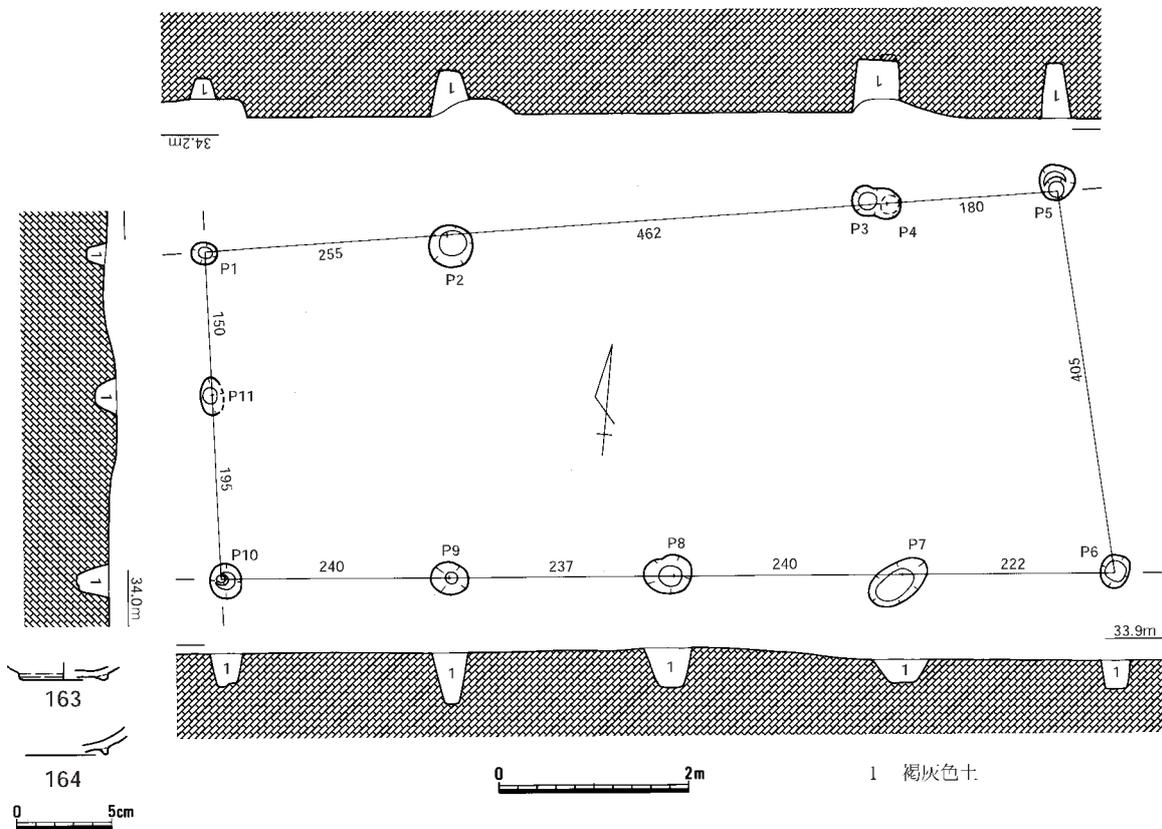
第82図 掘立柱建物10 (1/80)・出土遺物 (1/4)

時期は、土師器から鎌倉時代頃と推察される。

掘立柱建物11 (第77・83図)

下段中央に位置する。2×4間の東西棟で、P2-P3とP5-P6間の柱穴は検出されていない。柱穴掘り方は円形か楕円形を呈する。P10底面の柱痕跡から柱径は約15cmと考えられる。遺物はP2から高台付き土師器碗163・164が出土した。

建物の時期は、これらの土師器から鎌倉時代後半頃と判断される。



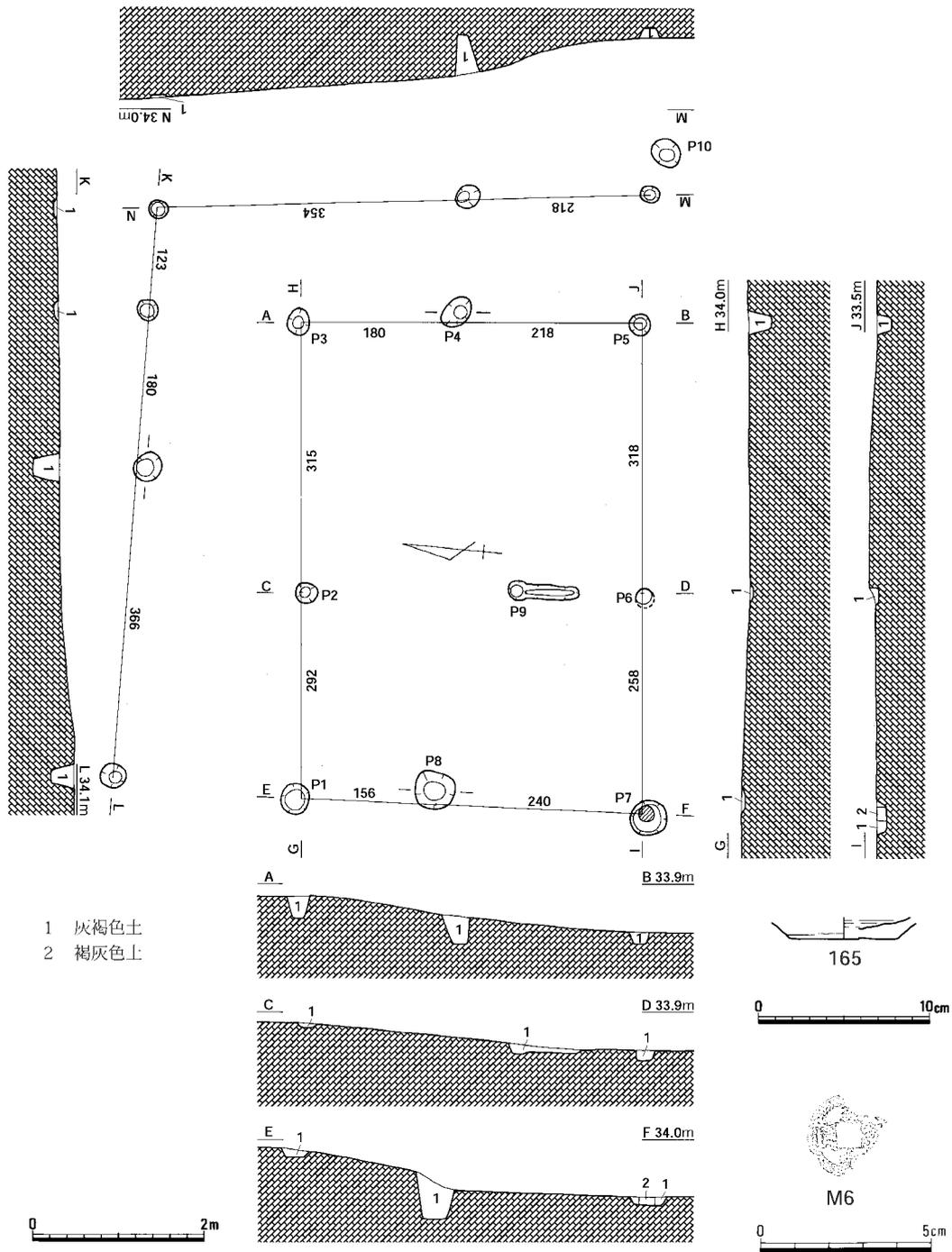
第83図 掘立柱建物11 (1/80)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物12（第77・84図、図版10）

下段東側に位置する。2×2間の東西棟で、北・東側に柱穴列5がある。柱穴掘り方は円形か楕円形で深さはまちまちである。P7で検出した柱痕跡から柱径は20cmである。遺物はP6から底部ヘラケズリの須恵器杯**164**と鍛冶滓が出土した。また、本建物と直接の関連性は不明だが、建物の南東に位置するP9から宋銭**M6**が出土した。時期は、須恵器から平安時代後期以降と推察される。

掘立柱建物13（第77・85図）

下段中央に位置し、掘立柱建物11に平行する。1×2間の東西棟で、北辺の柱2基は検出できてい



第84図 掘立柱建物12と柱穴列5（1/80）・出土遺物（1/2・1/4）

ない。柱穴掘り方は円形で、比較的深い。東辺に柱穴列6、北辺に柱穴列7がある。

時期のわかる出土遺物はないが、掘立柱建物11との関連から鎌倉時代後半頃と推察される。

掘立柱建物14（第77・86図、図版9）

下段東側に位置する小型の建物である。1×2間の南北棟で、柱穴掘り方は円形か楕円形を呈する。遺物はP4から瓦質土器の焙烙166が出土した。中空の取っ手部分で、上面に貫通孔がある。

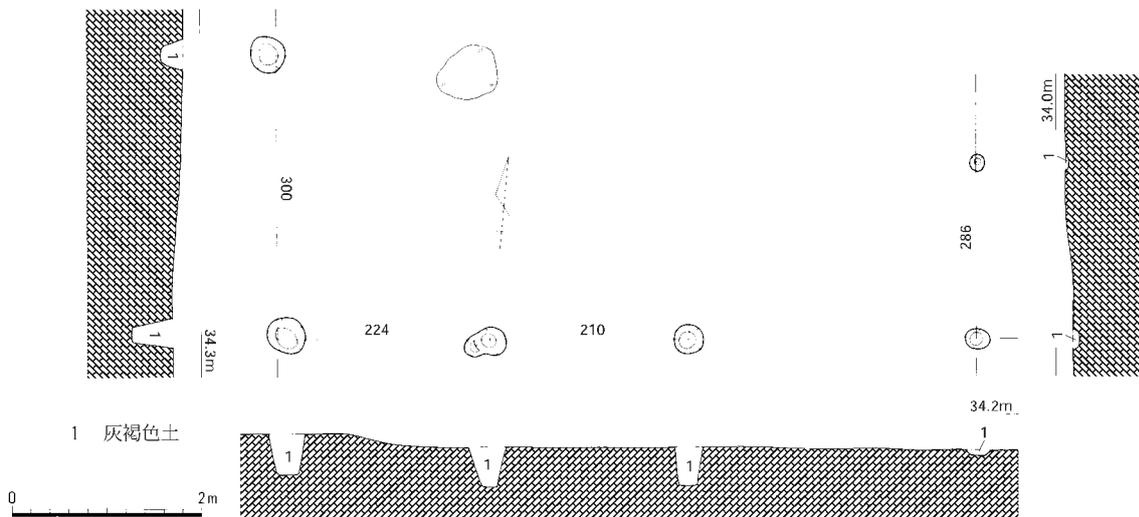
建物の時期は、瓦質土器の年代が不明確ながら室町時代後半以降と推察される。

掘立柱建物15（第77・87図）

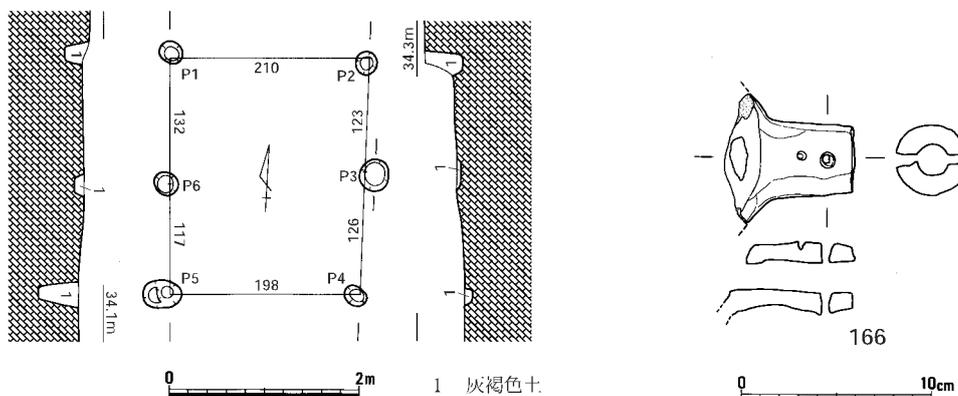
中段西側に位置する1×2間の東西棟である。柱穴掘り方は円形を呈し、比較的深い。出土遺物はないが、弥生時代の遺構柱穴に比べて深く、埋土の色調が弥生時代のものよりも薄いことから中世と判断した。詳細は明確でないが、周辺から出土する遺物から室町時代後半以降と推察される。

掘立柱建物16（第77・88図）

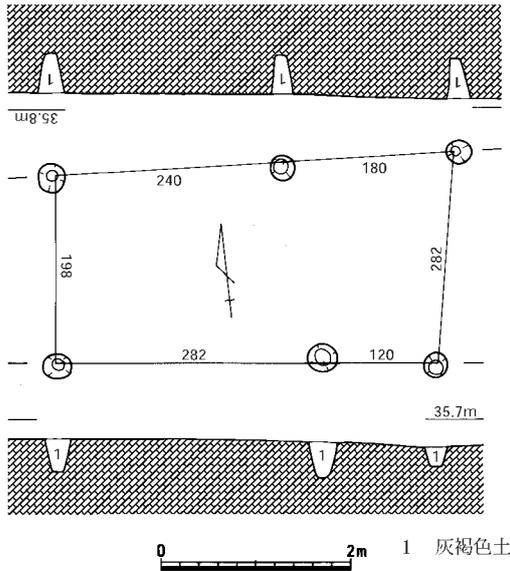
中段西側に位置する2×2間の南北棟である。柱穴掘り方は円形で深い。掘立柱建物15同様出土遺物はないが、周囲の状況から中世と判断した。時期は、掘立柱建物15に近い時期と推察される。



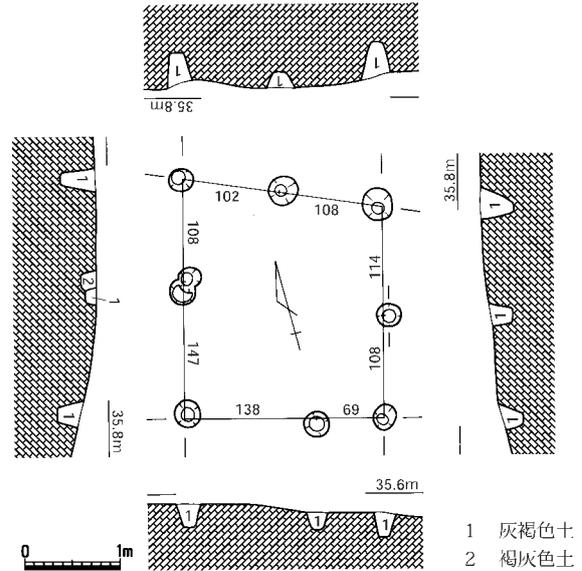
第85図 掘立柱建物13と柱穴列6（1/80）



第86図 掘立柱建物14（1/80）・出土遺物（1/4）



第87図 掘立柱建物15 (1/80)



第88図 掘立柱建物16 (1/80)

## 4 柱穴列

### 柱穴列4 (第77・79図)

下段西側で掘立柱建物7の北側に位置する。円形の掘り方を持つ柱穴は、比較的等間隔で深い。建物とは180~220cm程度離れており、塀のような機能が推察される。

時期のわかる出土遺物はないが、掘立柱建物7との関係から中世と判断される。

### 柱穴列5 (第77・84図)

下段東側で、掘立柱建物12の北・東辺に位置する。柱穴掘り方は、円形で、間隔・深さ共にまちまちである。建物とは150~220cm程度離れており、塀としての機能が考えられる。

時期は、掘立柱建物12との関係から平安時代後期以降と推察される。

### 柱穴列6 (第77・85図)

下段東側で、掘立柱建物13の東側に位置する。円形の掘り方を持つ柱穴は非常に浅く残存状況が悪い。柱穴は2基のみ検出したが、北に延長したときに柱穴列7と直交することから、本来は両者が一連の柱穴列である可能性がある。

時期は、掘立柱建物13との関係から鎌倉時代後半頃と推察される。

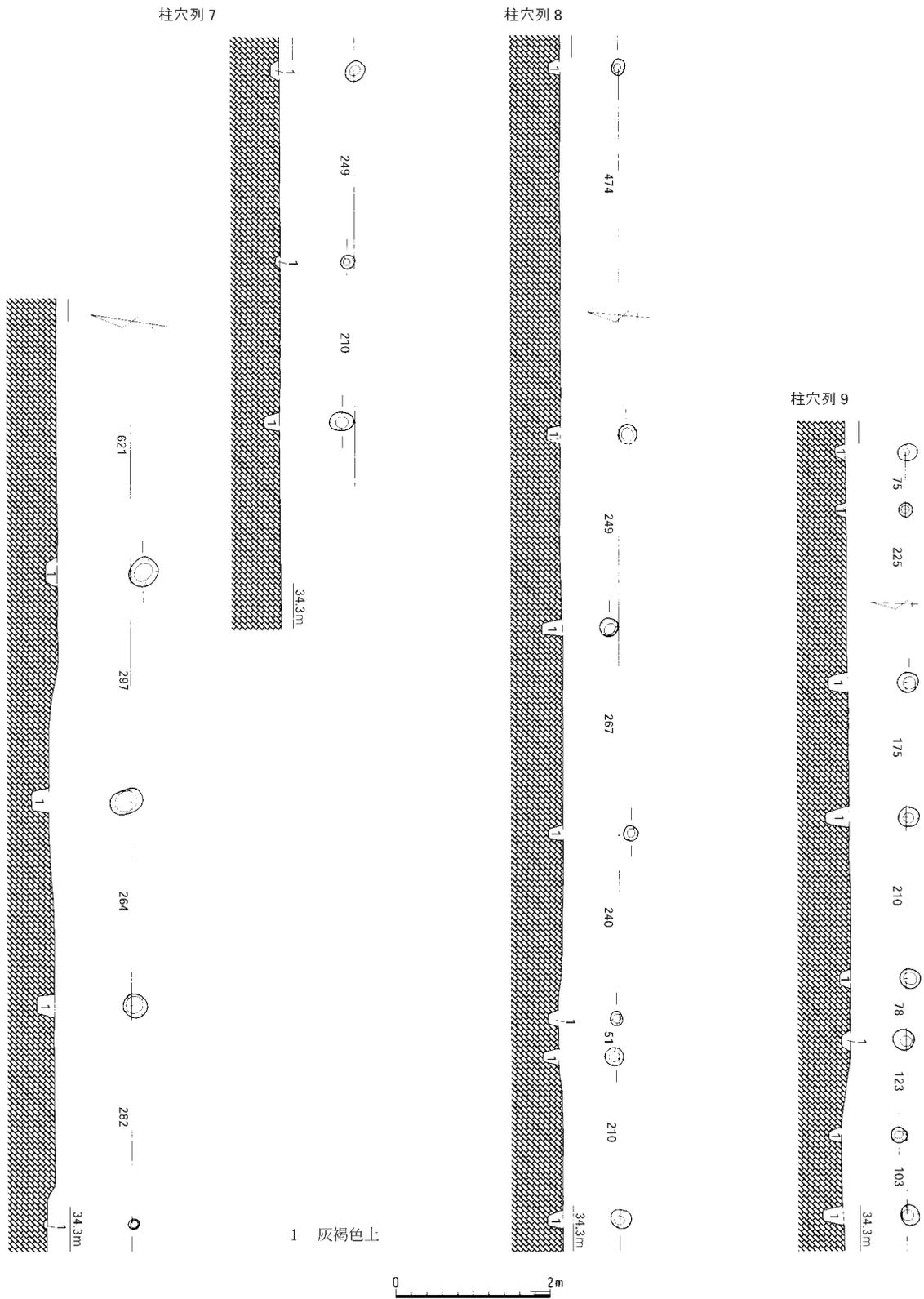
### 柱穴列7 (第77・89図、図版7)

下段北側に位置する。円形か楕円形の柱穴掘り方を持ち、深さはまちまちで、間隔もまちまちである。柱穴列6とともに掘立柱建物11・13を囲む塀としての機能が考えられる。

時期は、掘立柱建物との関係から鎌倉時代後半頃と推察される。

### 柱穴列8・9 (第77・89図、図版7)

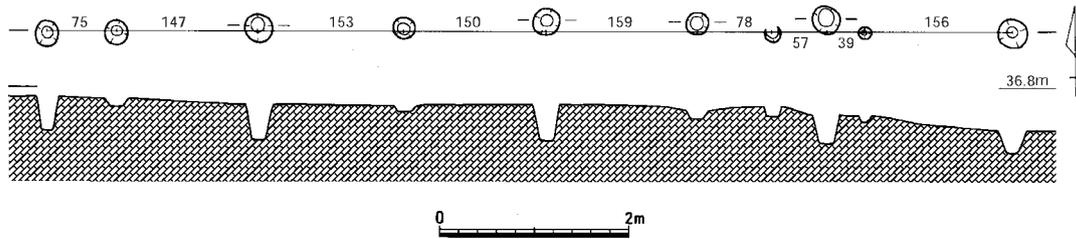
下段北の斜面裾に位置する。円形の掘り方を持ち、間隔はまちまちである。柱穴に切り合い関係のあるものがあることから二列に分かれると判断した。列8は竪穴1の北側にのみみられることから、竪穴1に伴う可能性がある。列9は掘立柱建物10と西端が重なり、両者には前後関係があると判断さ



第89図 柱穴列7～9 (1/80)

れる。

したがって、時期のわかる出土遺物はないが、周辺の状況から鎌倉時代頃と判断される。



第90図 柱穴列10 (1/80)

柱穴列10 (第77・90図)

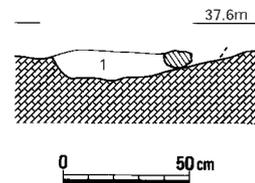
上段東側で、調査前の削平段裾に位置する。土師器小皿の小片が1点のみ出土したことから中世と判断される。しかし、この下位及び周辺には該期の遺構がなく、機能については明確でない。

5 溝

溝8 (第77・91図)

最上段西端に位置する。斜面に平行で、斜面上位から下位にかけて深さが増す。断面形状も一定でないことから自然流路と判断される。

出土遺物はないが、弥生時代の土壌とピットを切ることからそれ以降の時期と考えられる。



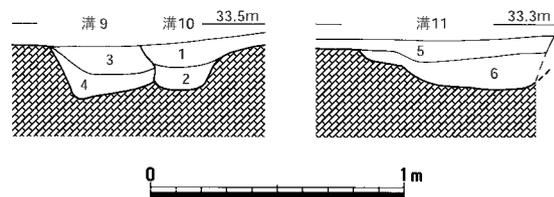
1 暗灰褐色土

第91図 溝8 (1/30)

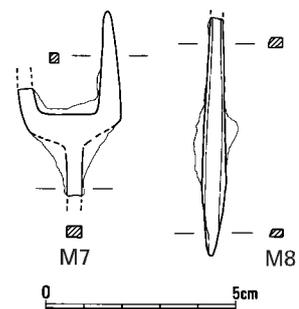
溝9～11 (第77・92図、図版10)

下段東端に位置し、溝9が埋没後に溝10が掘削されている。溝11は直接の繋がり不明だが、埋土の状況から溝10と同一流路である可能性が高い。図示した器種不明鉄器M7・M8は溝11から出土した。

出土遺物に土師器片があることから中世と判断される。



- 1 灰白色粘質土
- 2 暗灰色粘質土
- 3 褐灰色土
- 4 灰白色土
- 5 (流入土)
- 6 暗灰色粘質土

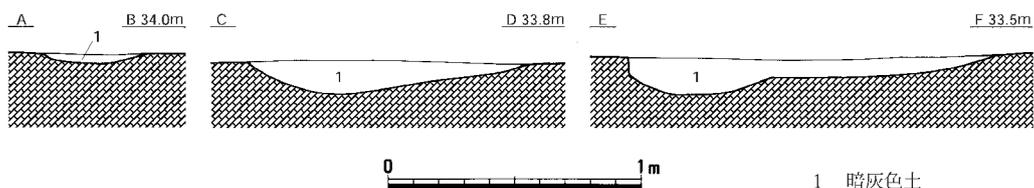


第92図 溝9～11 (1/30)・出土遺物 (1/2)

溝12 (第77・93図)

下段東側で、斜面に平行して検出した。断面形状からは、自然流路と判断される。しかし、これを東限にして柱穴等の遺構がみられなくなることから、もともとは人為的に掘削されていた溝であった可能性が高い。

出土遺物に赤橙色の備前焼片があることから、室町時代以降に機能したと推察される。



1 暗灰色土

第93図 溝12 (1/30)

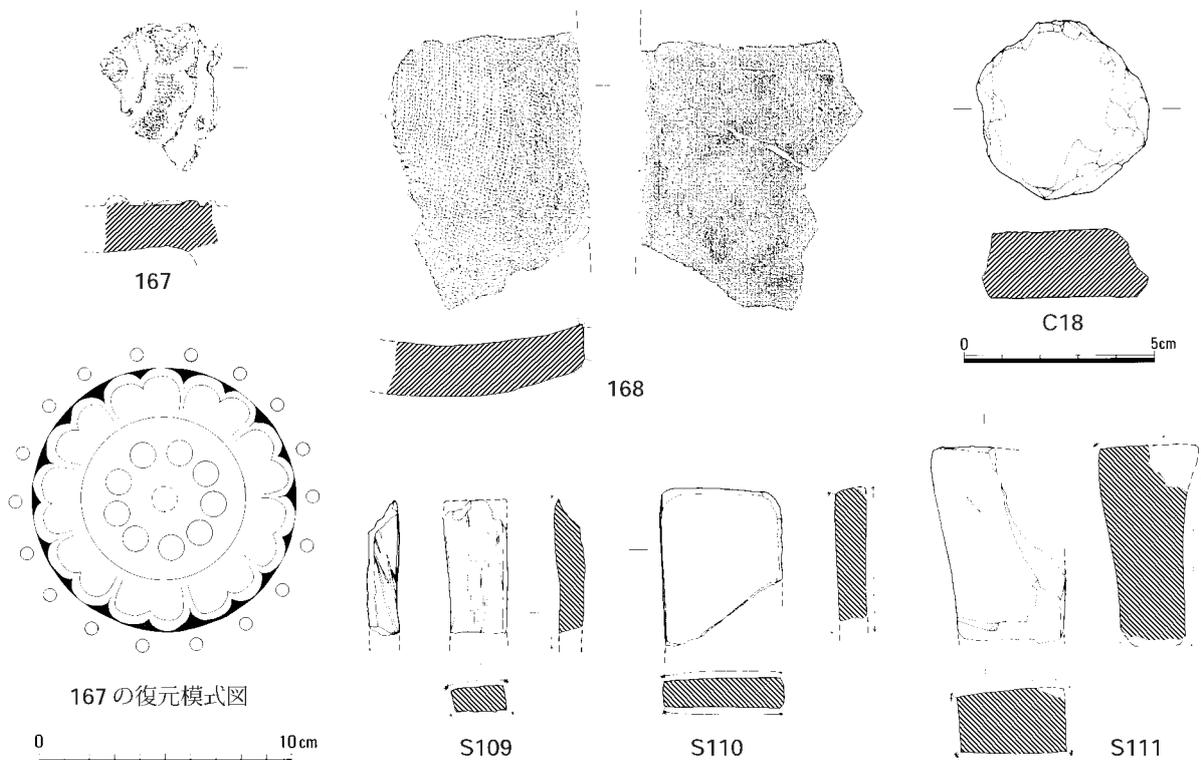
## 6 遺構に伴わない遺物 (第94~96図、図版9・10・15)

本遺跡では、上段より下位で弥生時代の遺構面上層に遺物包含層が形成されていた。特に下段と最下段では、東半部中央よりに集中する傾向がみられ、掘立柱建物との関連が推察される。最上段でも確認調査の際に遺物包含層が確認されているが、北側の山林が急傾斜であることから、最上段付近に遺構が存在していたとは考えにくい。したがって、遺物は、山林との境界を流れる用水に溜まった土砂を浚えた際に混入したと考えられる。

以下に、土器類は出土地点別に掲載し、種類別に紹介していく。

**167**は須恵質の軒丸瓦片で、瓦当部裏面には布目は看取されない。盛り上がりは2mmと低い複弁の周囲に退化した間弁がみられ、外区に径5mmの珠文が巡る。中房にも径11mmと大振りの蓮子がみられる。圏線を基に復元すると、1?+9の蓮子を持つ9弁複弁蓮華文で、珠文は18個と推定される。**168**は須恵質の平瓦で凸面は丁寧なナデを行い、凹面にはやや粗い布目が残る。**167・168**は出土地点は異なるが、両者とも平安時代後半頃と考えられる。**C18**は燻し瓦片の周囲を粗く打ち欠いて作られた円板形土製品である。瓦の焼成・胎土から近世以降のものであろう。**S109~S111**は流紋岩製の石製品で、**S109**と**S111**は砥石である。**S110**は表面に擦痕がみられるものの、短冊形に整形され、全面に煤が付着していることから、温石の可能性も考えられる。

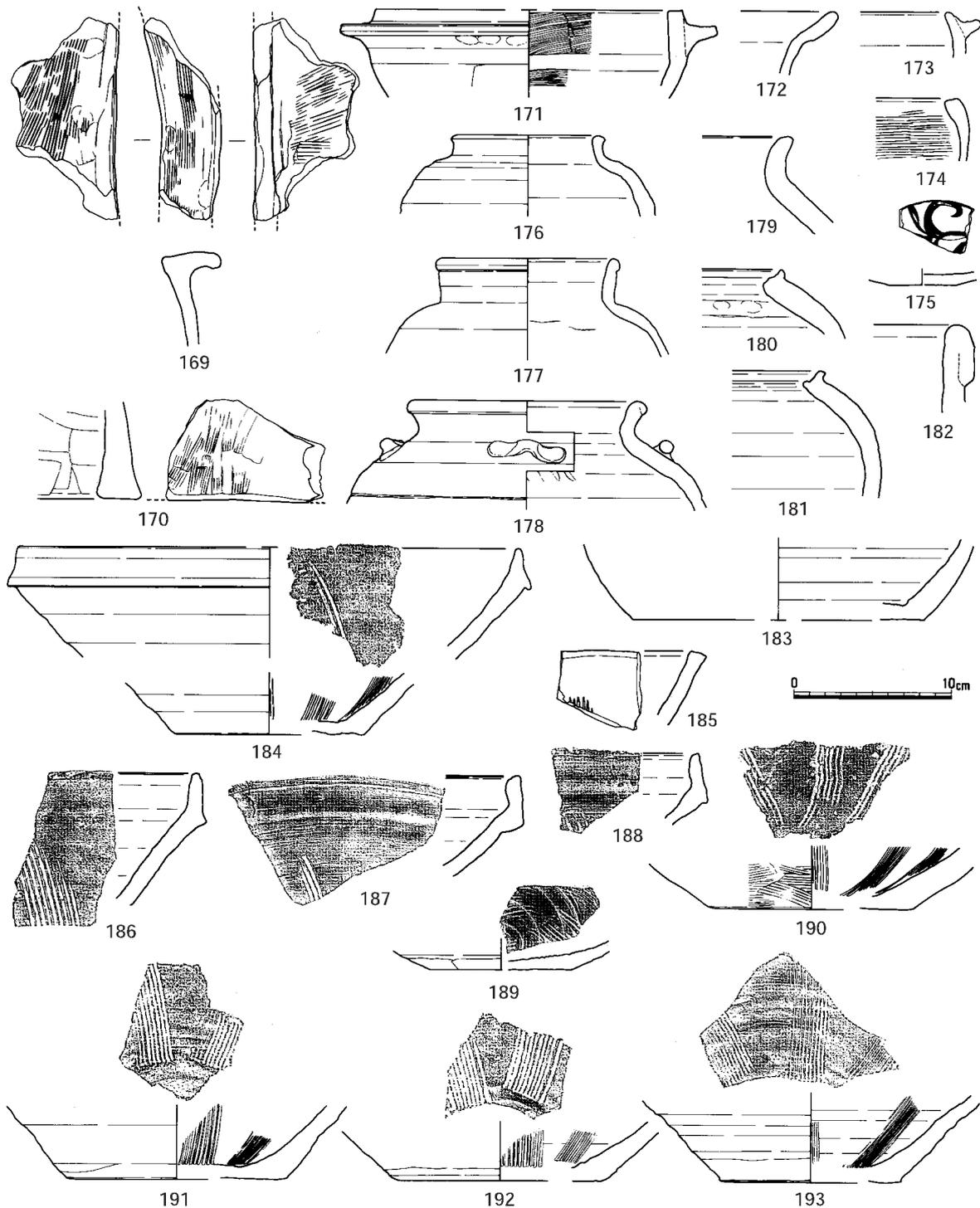
第95図に最下段出土土器類を図示した。遺物量は最も多く、備前焼が目につく。**169・170**は土師器のカマド片で、**169**が焚き口鏝の部分、**170**が脚部である。**171・172**は土師器の鍋、**173・174**は瓦質土器である。**173**は釜で、**174**は釜か鉢と考えられる。**175**は白磁皿の底部片で、見込みに草花文がみられる。**177~193**は備前焼である。**176~179**は壺で、**179**は須恵質で肥厚がみられない端部



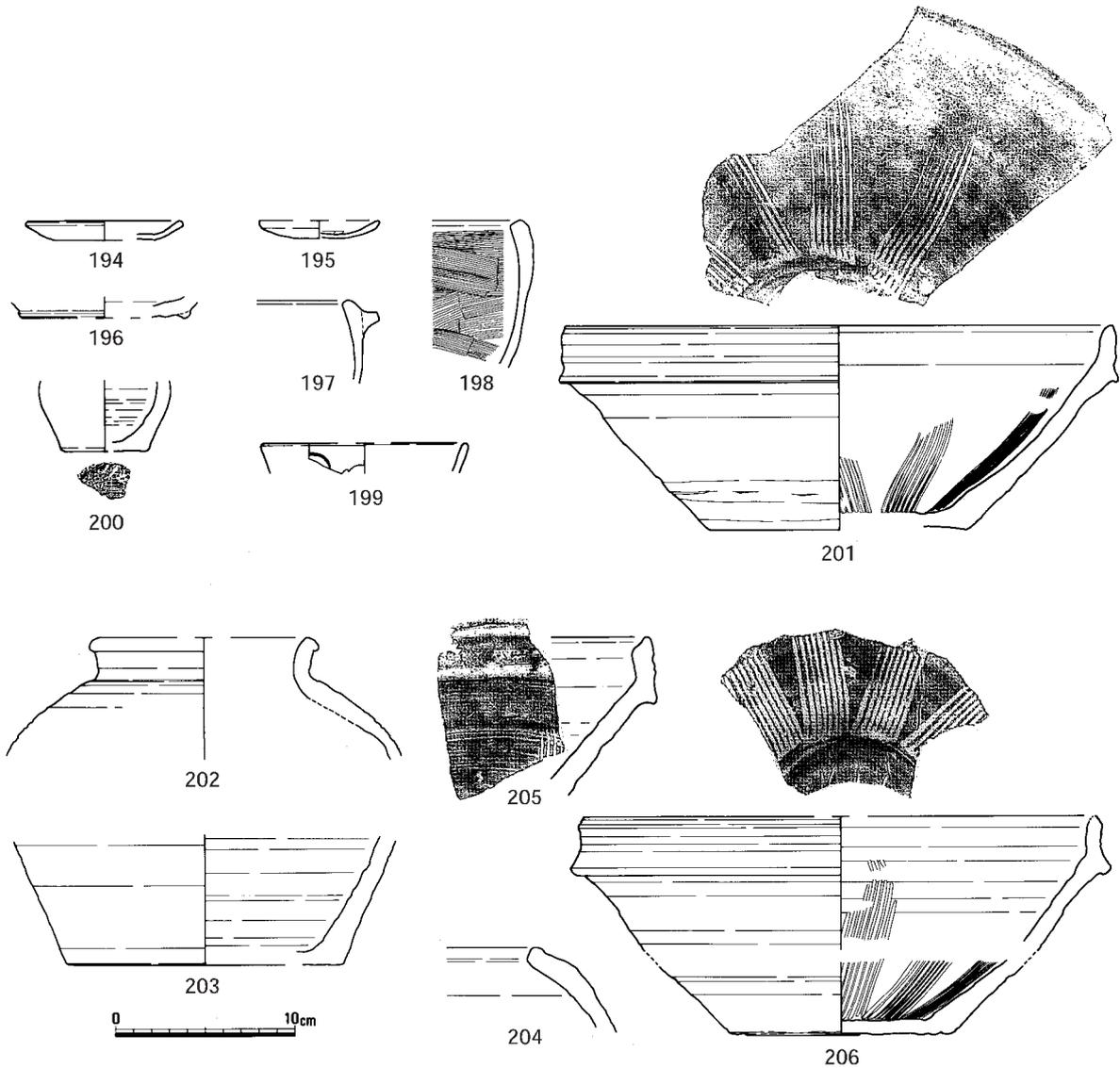
第94図 遺構に伴わない遺物① (1/2・1/3)

を持ち古い様相を示す。**180・181**はいわゆる水屋甕、**182・183**は大甕で口縁部**182**は小片のため傾きは不詳である。**184～193**の播り鉢は、**185**が須恵質で口縁端部の拡張がなく古い様相を示す。**187・189・193**は緻密な胎土で他は微細な礫を含む胎土である。

第96図**194～201**は、下段出土土器類である。**194・195**は土師器小皿で、**194**は白色系で外底部に糸切り痕が残る。**195**は橙色系で内底部に押圧痕が残り、外面全体はナデを行う。**196**は須恵器の高



第95図 遺構に伴わない遺物② ( 1/4 )



第96図 遺構に伴わない遺物③（1/4）

台付杯身、**197**は瓦質土器の釜、**198**も瓦質土器で、外面は粗い工具ナデにより凹凸が顕著である。**199**は龍泉窯系青磁小椀である。外面に沈線による蓮弁がみられる。**200**は柱穴出土で、外底部に糸切り痕の残る備前焼小壺、**201**は備前焼播り鉢である。

第96図**202**～**206**は、中段西側の掘立柱建物15・16横にある攪乱層から出土した備前焼である。**202**・**203**は壺で、胎土・色調・焼成から同一個体と思われる。肩部に棒状工具による粗い波状文が巡る。**204**はいわゆる水屋甕である。播り鉢**205**・**206**のうち**206**は、口縁部と底部で接点はないが、胎土や調整から同一個体と思われる。外底部には成形時の回転台の痕跡が残る。

図示した土器類は、瓦**167**・**168**と須恵器杯**196**、白磁**175**が平安時代である以外は、すべて中世以降のもので、**184**が鎌倉時代だが、備前焼は室町時代後期を主体とした時期が当てられる。古代以降の遺構出土の遺物は、平安時代から鎌倉時代が主体であった。これらの遺物が、遺跡外から後世に持ち込まれたとは考えにくいことから、本来遺構に伴っていたものであれば、掘立柱建物のうちの数棟は室町時代後期の遺構と判断できるだろう。

## 第4章 まとめ

### 1 遺構について

塩納成遺跡は、岡山県南東部の吉井川下流に位置する。平成3年度、瀬戸町教育委員会が行った隣接地の発掘調査で旧石器が出土したことから、旧石器時代から中世にわたる複合遺跡として周知されていた。しかし、今回の調査では弥生時代から室町時代の遺構・遺物が確認されるにとどまった。

遺跡が立地する緩斜面は調査区西側まで広がっており、南面する広い台地状を呈している。調査区はこの東端部分にあたるが、調査の結果、弥生時代には調査区内の東と西端に浅い谷が入っていることが明らかとなり、遺構も東西幅約45mの台地状の緩斜面中軸線を中心にして築かれ、この中でほぼ完結する状況である。

弥生時代の集落は、溝1～4の掘削状況から中期中葉から後期前葉まで継続して営まれている。緩斜面という立地のため遺構内遺物の流出が顕著であるのに加え、中世以降の地形改変により、検出した遺構のほとんどが遺物を持たないため、遺構の時期を明確にできない。

中期中葉は本遺跡の中心となる時期で、西端の溝1～3によって区画された東側の地区に遺構が営まれる。竪穴住居は最上段・上段の住居13～15の地点と下段の住居10～12の地点、最下段の住居1～3の地点と大きくは3地点で建て替えを行っている。そして下段には掘立柱建物や段状遺構を築き、これらも建物2・3と建物4～6の2地点で建て替えている。遺構の切り合い関係や立地地点の状況から、一時期には住居3軒と建物2棟を中心に集落が営まれたと考えられる。住居規模は、住居1・10が径6m前後とほぼ同規模であったものが、住居2・3と建て替えていく中で、径8mから径9mへと最下段の地点のみ大型化するのに対して、他地点の住居は逆に小型化する。このことから最下段の住居群が本集落の中心的存在であったと考えられる。

中期後葉から後期前葉になると、集落規模は極端に縮小し、台地中軸線上に住居4～8の順に逐次斜面上位に造り替えており、一時期には住居1軒と段状遺構が1基程度併設されるにすぎない。これは、集落の中心が台地西側に移動したか、もしくはまったく別の地点に移動したと推察されるが、近隣で確認されている弥生時代の遺跡の状況が不明なため、明らかにできない。

古墳時代から古代については、出土遺物は若干みられるものの、上段にある段状遺構12以外は明確な遺構は認められない。平安時代後期頃の瓦類は、小片で少量であることから、調査区外から持ち込まれた可能性が高い。しかし、掘立柱建物の柱穴には該期の須恵器や土師器が認められ、鎌倉時代初め頃の備前焼を持つ竪穴1があることから、平安時代後期頃から再び居住地として使われたとされる。と考えられる。

柱穴からの遺物が少なく建物の時期認定は難しいが、規格性や配置からある程度類推できる。

中世の遺構で最も古いものは、鎌倉時代前期の竪穴1である。この時期に下段は斜面部分を削平し、整地した後に、斜面裾におそらく柵としての機能が想定される柱穴列8が設置される。竪穴1とほぼ同時期には、建物9・10・12があり、それぞれ柱穴列9と5が伴う。竪穴には火処があるものの、床面からの出土遺物が少なく性格は明確ではないが、建物は竪穴を中心として配置されている。続いて鎌倉時代後期頃に、建物7・8と11・13が建てられる。建物7・8の間には切り合い関係があるが、

建物11・13は柱穴列6・7によって囲まれるように併置されている。この時期になって、建物の床面積は前代よりも大きくなり、遺物も増えることから、屋敷地として機能していたといえる。

室町時代になると、下段に建物14、中段に建物15・16といった小型の建物が建てられる。鎌倉時代の建物に対して、極端に床面積や柱間規模が小型化することから、小屋のようなものが想定される。この時期の遺物として、建物14の柱穴から瓦質土器の焙烙が出土しているのみで細かい時期は明らかではない。しかし、包含層中の備前焼の出土状況から、16世紀代の早い時期にはこれらの建物も廃絶し、遺跡周辺の山城が機能する頃には、居住域として使用されなくなった状況が窺われる。

## 2 弥生時代の石器について

弥生時代の遺物は、土器のほかに土製品や石器・鉄器があるが、ここでは300点以上と圧倒的多数を占める石器について簡単にまとめる。

まず器種について試みるが、明らかに古墳時代以降と判断されるものと器種不明なものは除外した。内訳は、鏃15（未・非製品を含む）、槍1、打製包丁5、磨製包丁2、錘1、鍬5、匙1、スク

磨き石5、RF・UF86、剥片・碎片74、残核3となる。石材別にみると、サヌカイト製116、ガラス質流紋岩製76、古銅輝石安山岩製39で、このほか泥質片岩・ホルンフェルス・花崗岩系となる。剥片石器は、サヌカイト・ガラス質流紋岩を主体とする。ガラス質流紋岩については、遺跡西側の山塊において、以前岩脈が確認されたという情報を得たが、現在では確認できない。また、古銅輝石安山岩についても古墳時代の石室などに用いられるような良質なものではなく、一見すると旧石器と見間違えるほど表面風化が進行している。この石材についても遠隔地からの搬入とみるかどうかは周辺環境をみて考えた方が良いかもしれない。いずれにしても、大半の石材を近隣で採取可能なものを用いていることがわかる。

器種の基本組成としては比較的まとまっているが、本集落の特徴としてハンマー、磨き石、残核、剥片・碎片といった石器製作にかかわる遺物が多い点があげられる。また、土掘り具としての鍬もこの時期としては多く、硬質な基盤を掘削するには木器だけでは不可能であったためと想像される。

さて、石器製作関連の石器のうち剥片石器の原材料となる石材について試みる。サヌカイト製のものは剥片・碎片38だけなのに対して、ガラス質流紋岩製のものは残核3、ハンマー5、剥片・碎片32となる。サヌカイト製品については、残核がみられないことと碎片が主体であることから集落内での修理や再加工が行われたと判断される。しかし、ガラス質流紋岩製品については、残核・剥片・碎片がそろっており、遺跡内で一連の石器製作を行っていたと考えられる。しかし、今回の調査で出土した定形的な石器としては楔2点（S58・S68）があるのみで、他の石器は剥片に簡単に加工した程度のもので、ハンマーについても残核を転用したものである。本材質の石器を周辺の主要な遺跡でみると、北側の峠を越えた熊山町谷の前遺跡の包含層中から剥片が2点、岡山市百間川今谷遺跡の土壌（弥生時代中期）からS75のような球体のハンマー1点（報告書未掲載）がある。この石材が硬質で、剥片の周縁が鋭利になる特性があることからすると、定形的な石器が確認されない。したがって、硬質な特徴が重視されてハンマーの石材として利用され、使用時もしくはハンマーに成形する段階に副次的に得られた剥片が、刃器類などに利用された可能性も否定できない。今後の資料増加に期待してこの石材産地共々検討したい。

## 付載1 塩納成遺跡出土石器石材について

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

### 1 はじめに

塩納成遺跡から出土している石器石材には、表面の肉眼観察でサヌカイト、安山岩、ガラス質流紋岩に分類されている。ここでは、これらの石材を理化学的手法（蛍光X線分析法・偏光顕微鏡観察法による岩石学的な調査）による分析を実施し、岩石種の同定を行った。また、サヌカイトに関しては、どの原産地原石が用いられているか調べた。

蛍光X線分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ製SEA2010L）を使用した。

### 2 分析試料・結果

分析した石材は、表1に示した15点の石材である。そのうち11～15は遺跡内および周辺でサンプリングした基盤層と考えられる岩石である。また、試料提供者の肉眼観察（石器表面の色調、質感）により1～3がサヌカイト、4～6が安山岩、7～10がガラス質流紋岩に分類されている。

#### 【偏光顕微鏡観察法】

偏光顕微鏡（以下、顕微鏡）観察により岩石の種類を検討した。なお、顕微鏡観察では観察用の薄片を作成するため石器石材試料は一部破壊しなければならない。

#### 試料1（写真1）

肉眼……表面は淡灰黒色で、新鮮面が黒色緻密である。硬度は6以上である<sup>(1)</sup>。

鏡下……無斑晶でガラス質を呈している。微斑晶鉱物として古銅輝石、斜長石を含んでいる。香川県五色台で産出するサヌカイトに類似している。

#### 試料2（写真2）

肉眼……表面は白灰色で、新鮮面が黒色緻密である。硬度は6以上である。

鏡下……石英の細かな粒（0.1mm以下）が観察され、褐色の変質物（有色鉱物）が見られる。

#### 試料3（写真3）

肉眼……表面は淡灰黒色で、新鮮面が黒色緻密である。硬度は6以上である。

鏡下……無斑晶でガラス質を呈している。微斑晶鉱物として古銅輝石、斜長石を含んでいる。

香川県五色台で産出するサヌカイトに類似している。

#### 試料4、5、6（写真4）

肉眼……表面は淡灰色で、新鮮面が黒色緻密である。硬度は6以上である。

鏡下……ごく微細な石英、黒雲母を多量に含んでいる。黒く見えるのは炭質物である。

試料7、8、9、10（写真5）

肉眼……表面は淡青灰色で、新鮮面が青灰色緻密である。硬度は6以上である。

鏡下……ガラス質で微小なクリスタライト（晶子）が観察される。

試料11、12、13、14、15（写真6）

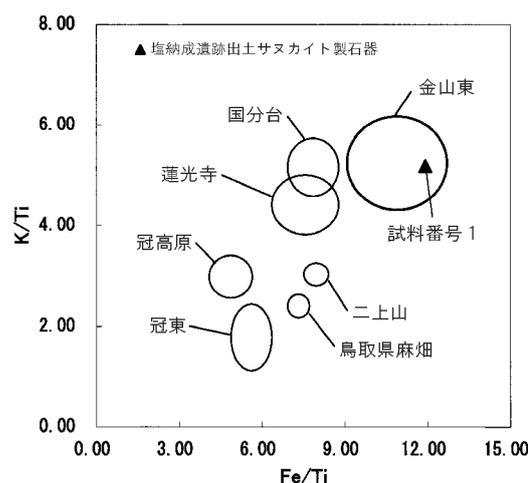
肉眼……表面は白灰色で、新鮮面が黒色緻密である。硬度は6以上である。

鏡下……石英の細かな粒（0.1mm以下）が観察され、褐色の変質物（有色鉱物）が見られる。

以上の顕微鏡観察結果から、試料1・3はサヌカイト、試料2・4～6・11～15はホルンフェルス<sup>(2)</sup>、試料7～10はガラス質流紋岩である。

### 【蛍光X線分析法による石材の産地推定および分類】

この分析では、現在までに判明しているサヌカイト原産地と本遺跡で出土したサヌカイト製石器を含有元素で比較し産地推定を実施した。その結果、第1図Fe/Ti-K/Ti散布図では、試料番号1が金山東の原産地分布域に分布した。なお、顕微鏡観察で3の石材はサヌカイトに同定されたが、試料が小破片のため、蛍光X線分析は実施できなかった。また、試料番号2は遺跡周辺の基盤層で産出するホルンフェルスと同じ化学組成を示していた。



第1図 塩納成遺跡出土サヌカイト製石器の原産地推定

## 3 まとめ

顕微鏡および蛍光X線分析法により塩納成遺跡から出土した石器石材の同定を実施した。

その結果、安山岩とされていた石材はホルンフェルスに同定できた。また、各石材の産出地では、試料番号1のサヌカイトが香川県坂出市金山東に推定され（3のサヌカイトは顕微鏡観察ではサヌカイトと同定できたが蛍光X線分析では測定できなかった）、試料番号2のホルンフェルスが遺跡基盤層のホルンフェルスにほぼ同定された。しかし、試料4～6のホルンフェルスと試料7～10のガラス質流紋岩に関しては、今回の分析で産地が明らかにならなかった。両者の岩石とも遺跡周辺の基盤層で産出する可能性が考えられるが、十分な原産地のサンプリングを実施することができなかった。今後の課題である。

石材の岩石学的検討では、倉敷芸術科学大学の妹尾護先生にご教示頂いた。また、分析の機会を与えて頂いた杉山一雄氏をはじめ、岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々にはいろいろとお世話になった。記して感謝いたします。

註)

(1) 岩石の硬度測定は、ナイフ（硬度5.5～6.0）の先端部を使用し測定した。

(2) ホルンフェルスとは、片状組織や縞状組織をもたない、無方向性の変成岩である。もっとも典型的なものは、泥質堆積岩が接触変成作用をうけてできたものである。

表1 塩納成遺跡出土石器石材の分析値(%)ただし、Rb・Sr・Zrはppm

試料番号	遺物番号	報告書掲載遺構名など	調査時出土遺構・土層名など	Si	Ti	Ai	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	岩石種
1	173	下段 竪穴住居8	II E区 上段・No.7 竪穴 (E)	64.51	0.45	17.08	5.36	0.12	1.94	4.08	3.64	2.33	0.12	201	339	329	サヌカイト
2	281	下段 西半包含層	II W区 e 下段検出中	68.32	0.54	15.13	4.90	0.08	1.85	2.19	3.82	2.81	0.09	193	306	283	ホルンブエルス
3	282	下段 西半包含層	II W区 e 包含層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	サヌカイト
4	17	最下段 竪穴住居3	I区 No.1住居	61.65	0.92	18.45	8.84	0.14	2.75	0.96	3.41	2.66	0.05	178	157	297	ホルンブエルス
5	18	最下段 竪穴住居3	I区 No.1住居	63.69	0.86	17.04	8.51	0.11	2.55	0.98	3.12	2.96	0.04	208	116	280	ホルンブエルス
6	19	最下段 竪穴住居3	I区 No.1住居	64.38	0.81	17.39	7.70	0.10	2.61	0.55	2.65	3.42	0.01	190	96	303	ホルンブエルス
7	224	最下段 中央包含層	I 拡張区 包含層	76.80	0.03	13.20	1.08	0.00	1.06	0.73	2.49	4.25	0.14	261	69	134	ガラス質流紋岩
8	231	下段 東半包含層	II E区 上段 ST4	76.21	0.01	13.12	1.32	0.02	1.13	0.82	2.66	4.36	0.14	257	68	150	ガラス質流紋岩
9	233	下段 東半包含層	II E区 上段 ab 包含層	75.46	0.05	13.25	1.38	0.00	1.11	0.83	3.54	4.07	0.19	247	81	160	ガラス質流紋岩
10	307	T10	T10 第4層褐色土上半	75.52	0.02	13.23	1.42	0.03	1.14	0.85	3.20	4.22	0.15	242	71	165	ガラス質流紋岩
11		基盤層	基盤層	68.93	0.63	15.55	4.34	0.07	1.76	2.35	3.25	2.87	0.07	188	319	437	ホルンブエルス
12		基盤層	基盤層	65.80	0.72	16.23	5.54	0.09	2.02	2.28	3.74	3.10	0.09	238	322	486	ホルンブエルス
13		基盤層	基盤層	69.01	0.72	15.56	4.45	0.07	1.73	1.96	3.26	2.88	0.11	214	319	460	ホルンブエルス
14		基盤層	基盤層	67.71	0.56	16.26	3.65	0.09	1.86	1.46	3.99	4.02	0.13	208	268	365	ホルンブエルス
15		基盤層	基盤層	67.95	0.64	16.12	4.20	0.07	1.77	2.83	3.12	2.81	0.15	185	375	445	ホルンブエルス

付載1 塩納成遺跡出土石器石材について

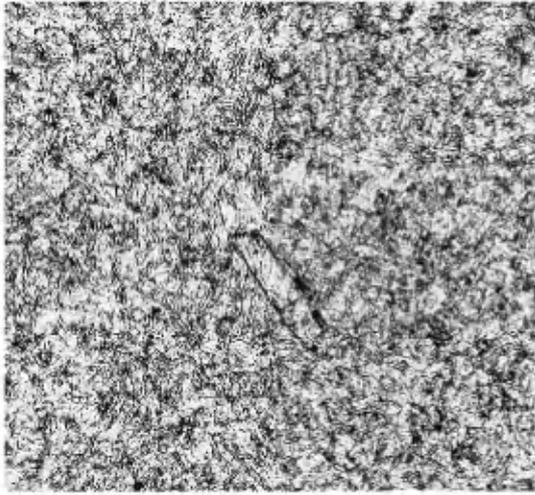


写真1. 試料1 サヌカイト

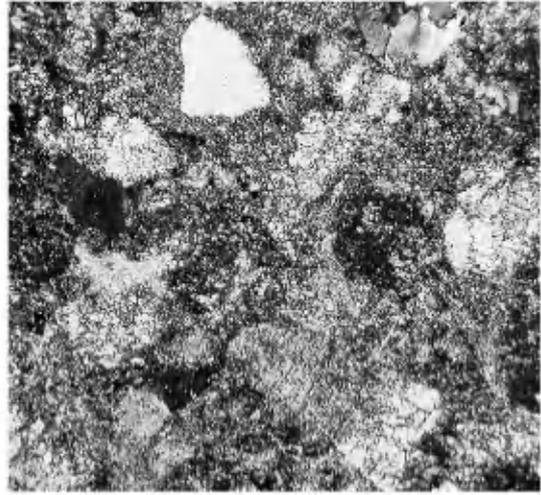


写真2. 試料2 ホルンフェルス

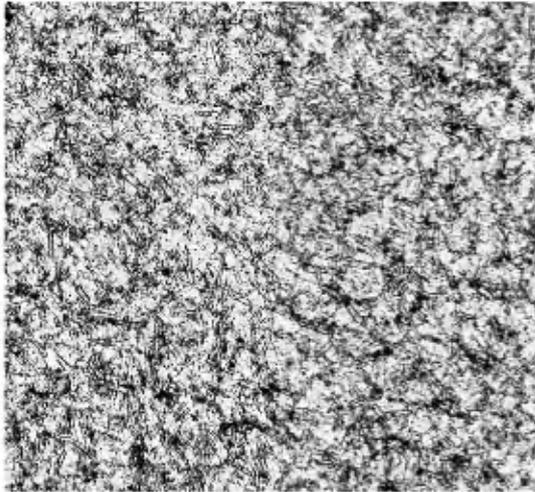


写真3. 試料3 サヌカイト

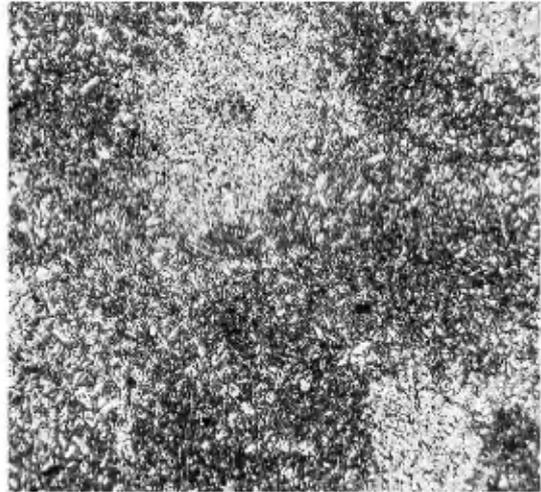


写真4. 試料4 ホルンフェルス

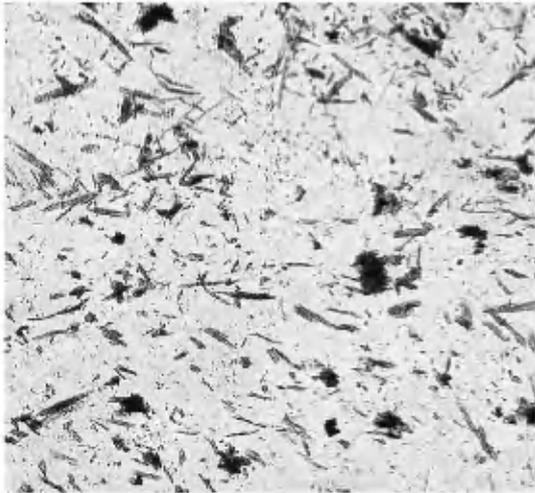


写真5. 試料7 ガラス質流紋岩

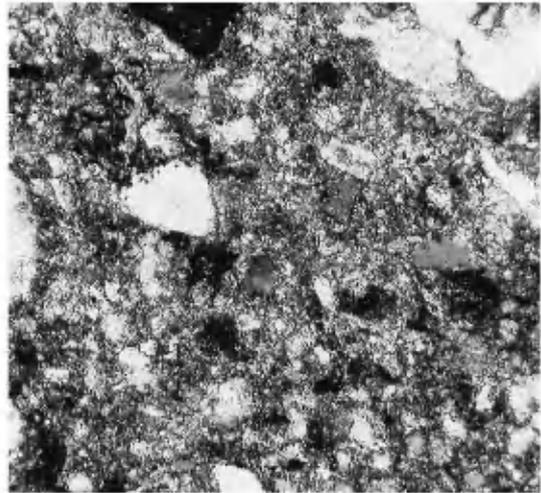


写真6. 試料11 ホルンフェルス(遺跡基盤層)



塩納成遺跡出土石器石材の偏光顕微鏡写真

## 付載 2 塩納成遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己

### 1 概要

しおのうなる

塩納成遺跡から出土した平安時代から室町時代へかけての鉄滓4点と、弥生時代中期末葉の板状鉄斧1点を調査した。鉄滓は塩基性砂鉄を原料とした製錬滓と、鉄器製作に際して排出された沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓である。また、板状鉄斧は鉍石系で低温還元直接製鋼法にもとづく塊錬鉄が素材だった。合せ鍛接鍛えの可能性をもち、金属鉄は皮金部分に残す。0.1%前後の極軟鋼の充当であって心金部分は錆化が激しく情報は採れなかった。朝鮮半島側の製品であろう。

### 2 いきさつ

塩納成遺跡は、岡山県赤磐郡瀬戸町塩納字東畑に所在する。旧石器時代から縄文時代の遺物が散布し、弥生時代中期後半～後期初頭、更に、鎌倉時代～室町時代後期までの集落が重なる複合遺跡である。

鉄滓の一部が弥生時代の竪穴住居埋土に混在したので、古代・中世の混入か否かの確認と、板状鉄斧の産地同定を目的とした調査を行った。

### 3 調査方法

#### 3-1. 供試材

Table.1に示す。塩納成遺跡出土の鉄滓4点と板状鉄斧1点の計5点である。

#### 3-2. 調査項目

##### (1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

##### (2) マクロ組織

顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の5、10、20倍のいずれかで撮影した。低倍率の観察は、組織の分布状態、形状、大きさなど顕微鏡検査(×50、100、400)によるよりも広範囲にわたっての情報が得られる利点がある。

##### (3) 顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3 $\mu$ と1 $\mu$ で仕上げで光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄の炭化物は、ピクラル(ピクリン酸飽和アルコール液)で、フェライト結晶粒は5%ナイトル(硝酸アルコール液)で、腐食(Etching)している。

##### (4) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

#### （5）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

#### （6）化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO<sub>2</sub>）、酸化アルミニウム（Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K<sub>2</sub>O）、酸化ナトリウム（Na<sub>2</sub>O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）、酸化クロム（Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）、五酸化燐（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）、バナジウム（V）、銅（Cu）、：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

## 4 調査結果

### （1）SNN-1 鉄滓

平面が不整形形状で、43gと小型の炉内滓破片である。表面は風化が進み、肌の観察が難しいが全面破面であろう。緻密質で2mm弱の気泡が発生し、顕著な鉄錆はみられない。

顕微鏡組織をPhoto.1の①に示す。鉱物組成は白色多角形結晶のウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO・TiO<sub>2</sub>）と淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO<sub>2</sub>）が暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。なお、白色多角形結晶の硬度測定を行っている。圧痕写真は紙面の都合で割愛したが708Hvであった。ウルボスピネルとヘーシナイト（Hercynite：FeO・Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）の混合組成の値である。<sup>(1)</sup>

Table.2に化学組成を示す。全鉄分（Total Fe）は42.40%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.10%、酸化第一鉄（FeO）46.93%、酸化第二鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）8.32%の割合である。ガラス質成分（SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O）は左程多くなく25.48%で、このうちに塩基性成分（CaO+MgO）5.21%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）は高めの15.72%、バナジウム（V）0.29%で塩基性砂鉄を原料とした製錬滓に分類される。また、酸化マンガン（MnO）は、こちらも多くて1.13%であるが、他の随伴微量元素は低めで、酸化クロム（Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）0.05%、銅（Cu）<0.01%、鉄に有害な硫黄（S）0.03%、五酸化燐（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）0.43%に留まった。

該品は弥生時代中期末の層位からの出土となっているが、鉄滓類の出土は基本的には室町時代の土器を含む層からの出土となっており、新しい時期からの混入とみるべきであろう。

### （2）SNN-2 鉄滓

不定形に破碎した炉内滓の13gを量る微小破片である。該品も緻密質で風化を受けた破面には5mm

前後の気泡が見える。こちらでも鉄錆の発生はみられない。

顕微鏡組織を Photo.1 の②に示す。鉱物組成はウルボスピネルとファイヤライトの晶出で、前述 SNN-1 に準じたものである。硬度値は 661Hv であったが圧痕写真は割愛した。塩基性砂鉄を原料とした砂鉄製錬滓である。

### (3) SNN-3 鉄滓

平面が不整五角形状で、流動状肌をもつ炉内滓破片である。46g を量る。表面には幅 13mm、長さ 7～20mm の木炭痕を数点残す。側面 2面と下面の大半は破面で中小の気泡を発するが緻密質である。

Photo.1 の③に顕微鏡組織を示す。鉱物組成はこちらでもウルボスピネルとファイヤライトの組合せである。ウルボスピネルの硬度値が 697Hv が得られている。化学組成を Table.2 に示す。前述した SNN-1 鉄滓よりも鉄分やチタン分などが低下してガラス分の多い成分系となる。全鉄分 (Total Fe) 36.13%、ガラス質成分 38.57%、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) 8.19%、バナジウム (V) 0.16%、酸化マンガン ( $\text{MnO}$ ) 0.95% など鉱物組成のウルボスピネルと合せて砂鉄製錬滓の成分系である。二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) が前述 SNN-1 鉄滓の約 1/2 に低減するのは製鉄原料の相違なのか、操業時期の違い、はたまた、単なるバラツキなのか、この調査点数からの発言は無理である。

### (4) SNN-4 椀形鍛冶滓

現状平面は不整台形状を呈するが、本来は楕円形状の可能性をもつ鍛冶炉炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓の破片である。98g を量る。上面は平坦面を有し、局部的に赤錆を発す。裏面側は 10mm 以下の木炭痕を刻むが滑らか肌である。側面端部は錆化による亀裂が走り、金属鉄の遺存が予測される。

Photo.1 の④～⑥に顕微鏡組織を示す。鉱物組成は⑥にみられる白色粒状結晶のウスタイト (Wüstite:  $\text{FeO}$ ) とファイヤライト、及び錆化鉄のゲーサイト (Goethite:  $\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$ )、右側不定形淡灰白色部で構成される。鉄素材の高温折り返し曲げ鍛接の鍛錬鍛冶滓の晶癖である。なお、⑤は滓中に落下した鉄素材の極軟鋼のフェライト (Ferrite: 純鉄もしくは  $\alpha$  鉄) を示す。炭素を殆んど含まずに軟質である。⑥はフェライトの硬度測定の際の圧痕で、値は 75Hv が得られた。

前述 SNN-3 鉄滓の砂鉄製錬滓と組合せて該品は製錬→鍛冶を想定しても無理のない鉱物相であった。

### (5) SNN-5 板状鉄斧

平面が長梯形でも長方形に近い偏平な片刃付きの小型板状鉄斧である。現存長さ 6.6cm、基部幅 2.8cm、刃幅 3.2cm、最大厚み 0.55cm を測る。背面に緊縛痕を残す。錆化がかなり進むが刃先側にも一部に金属鉄を遺存する。供試材は刃先側に V ノッチを入れて採取した。

Photo.2 の①にマクロ組織を示す。心金は錆化して組織の痕跡を止めず、左片側の皮金部分の一部に金属鉄が留まる。素材は極軟鋼の充当で、繰返し折り曲げの鍛接線が認められた。

顕微鏡組織は Photo.2 の②～⑧に示した。②は鉄中の非金属介在物である。鍛打を受けた非金属介在物は展伸した明暗 2 相の鉱物相で形成される。鉱物組成は Photo.3 に掲載した EPMA 調査を行っている。反射電子像 (COMP) に 8 の番号をつけた暗色部の定量分析値は 27.2%CaO-14.0%FeO-36.0%SiO<sub>2</sub> 組成が得られた。ざくろ石類 (garnet group) のアンドラダイト (andradite:  $3\text{CaO}\cdot\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot 3\text{SiO}_2$ ) 系であろう。これには 9.0%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-9.0%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> を固溶する。

一方、明色部の 9 の番号個所は 51.3%FeO-29.7%SiO<sub>2</sub> で鉄かんらん石 (Fayalite:  $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ )

系である。ここでも燐（P）が6.3% $P_2O_5$ で検出されて、これと共に1.8% $Al_2O_3$ —7.2% $CaO$ —6.4% $MgO$ —1.6% $MnO$ などを固溶する。

当板状鉄斧の鉄素材は、非金属介在物に鉄かんらん石を主体とした共晶夾雑物を内蔵するところから、その製造履歴は低温還元直接製鋼法にもとづく塊煉鉄由来に分類される。

ここでまた、顕微鏡組織にもどす。Photo.2の③④は皮金部分の金属鉄をナイトル腐食（etching）を施した組織である。白い基底はフェライト、黒く細い線はフェライト結晶粒界を示す。組織内の黒または層状はパーライト（Pearlite）である。このパーライトの占める面積比は鉄中の炭素含有量を表して0.4%前後で約半分、全面パーライトは0.77%となる。該品をこの面積率から炭素含有量を推定すると0.1%程度となる。なお、当結晶粒の歪んだ形態は、低温加工で成型されて700℃前後で鍛打作業が完了したと想定される。⑤⑥は硬度測定の際の圧痕である。⑤はパーライト析出のないフェライト単一相で硬度値は171Hv、⑥は0.1%炭素含有域で191Hvが得られた。両者は極軟鋼なのに異常に硬い値を示している。本来の硬度値であれば約半分以下の70～100Hv程度が妥当なところである。埋蔵鉄の硬度値は時折り、この様な常軌から逸脱した数値となる。燐（P）の固溶などもありうるが、他に、風化や時効硬化の影響が大きかろう。更に結晶粒に加工歪が残留しているのも硬化の原因となる。

⑦⑧は刃先寄りの皮金部分のパーライト痕跡を提示した。こちらも③④の炭素含有量に準じたものであった。当板状鉄斧には炭素量の高低配分採用の配慮は不明瞭であった。

## 5 まとめ

① 調査結果の個々のまとめをTable.3に示す。弥生時代中期後葉に属する竪穴住居11埋土出土の2点の鉄滓と、平安時代から室町時代の鉄滓は、共に鉱物組成にウルボスピネル（Ulvöspinel： $2FeO \cdot TiO_2$ ）を晶出し、二酸化チタン（ $TiO_2$ ）15.72～8.19%含有から塩基性砂鉄を製鉄原料とした製錬滓に分類される。

弥生時代中期末の段階では、列島内での製鉄開始はなされてなく<sup>(2)</sup><sup>(3)</sup>、竪穴住居11埋土出土鉄滓は後世の混入品とみてよかろう。

また、中世包含層出土鉄滓の鉱物組成は、ウスタイト（Wüstite： $FeO$ ）主体の晶癖で、鉄器製作時の沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に分類される。以上4点の鉄滓は塩納成遺跡周辺に古代・中世にかけての製錬から鍛冶工程の操業を間接的に証明する。

② 弥生時代中期末葉の板状鉄斧がある。鉄中の非金属介在物がウスタイトやファイヤライトの共晶夾雑物で構成されるので、その製造履歴は低温還元直接製鋼法にもとづく塊煉鉄である。<sup>(4)</sup> 金属鉄は皮金部分に遺存して極軟鋼（<0.1%C）の折り返し鍛接線が顕著に表われた。心金部分は半硬鋼（0.3～0.5%C）の使用が想定できるが、既に錆化鉄となり組織痕跡も消滅して確たる発言は出来ない。

島根県国竹中山遺跡から当該期の板状鉄斧が出土している。こちらは皮金側が半硬鋼（0.5%C）素材に対して心金は極軟鋼（0.15%C前後）の使用である。2種の素材の貼鋼技術による合せ鍛えである。<sup>(5)</sup>

また、弥生時代後期前半になると鉄器は東漸し、静岡県長崎遺跡からも板状鉄斧が出土する。こちらは両刃造りの合せ鍛えで皮金は軟鋼～半硬鋼（0.2～0.3%C）、心金が極軟鋼（<0.01%C）充当で、<sup>(6)</sup> 技法的には国竹中山遺跡出土鉄斧に近似する。以上2者は塩納成遺跡出土鉄斧の皮金の極軟鋼充当

とは異なる。朝鮮半島側の製作が想定される板状鉄斧も、その産地は複数以上あって、当然技術の違いが製品に反映されるのであろう。詳細な産地同定は今後の課題として残る。

注)

- (1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』 1968  
磁鉄鉱（鉱石）は530～600Hv、ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルの硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ（Al）が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。
- (2) 大澤正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会編 1983
- (3) 大澤正己「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」『季刊考古学』第8号 雄山閣 1984.8
- (4) 韓汝瑋「中国における早期鉄器の冶金学的特徴」『東アジアの古代鉄文化～その起源と伝播～』（1993年 たたら研究会国際シンポジウム予稿集）たたら研究会 1993.11
- (5) 大澤正己「島根県岡竹遺跡出土板状鉄斧の金属学的調査」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会 2000
- (6) ①大澤正己「長崎遺跡出土鉄斧の金属学的調査」『長崎遺跡IV（遺物・考察編）』（静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第59集、昭和62年度～平成元年・4年度静岡バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査報告書）静岡県教育委員会 1995  
②大澤正己「日本の初期鉄器時代（弥生時代）の鉄器・鉄滓の冶金学的解析」『東アジアの古代鉄文化～その起源と伝播～』（1993年 たたら研究会国際シンポジウム予稿集）たたら研究会 1993.11

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		磁 着 度	メ タ ル 度	調 査 項 目							備 考	切出しサイズ		
				大きさ (mm)	重量 (g)			マ ク ロ 組 織	顕 微 鏡 組 織	ビ ツ カ ー ス 断 面 硬 度	X 線 回 析	E P M A	化 学 分 析	耐 火 度		カ ロ リ	大 き さ (mm)	重 量 (g)
SNN-1	住居11埋土	鉄滓	弥生中期後葉?	34×33×31	42.98		なし	○	○			○					—	—
SNN-2	住居11埋土	鉄滓	弥生中期後葉?	32×21×20	13.42		なし	○	○								—	—
SNN-3	ピット	鉄滓	平安以降	48×32×27	45.66		なし	○	○			○						
SNN-4	包含層	椀形滓?	中世 (室町)	71×47×27	97.73		(H)		○	○							—	—
SNN-5	住居7床直	板状鉄斧	弥生中期末葉	66×32×5.5	53.62		(L)	○	○	○		○				刃	6×10×4	0.32

Table. 2 供試材の組成

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	* * 酸化珪素 (SiO <sub>2</sub> )		* * 酸化アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	
								SNN-1	住居11埋土	鉄滓	弥生中期後葉?
SNN-3	ピット	鉄滓	平安以降	36.13	0.18	32.59	15.18	24.01	5.58		

* 酸化カルシウム (CaO)	* 酸化マグネシウム (MgO)	* 酸化カリウム (K <sub>2</sub> O)	* 酸化ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	五酸化リン (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )
3.36	1.85	0.79	0.34	1.13	15.72	0.05	0.03	0.43
5.58	1.67	1.23	0.50	0.95	8.19	0.02	0.03	0.90

Σ *						
炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	耐火度	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO <sub>2</sub> Total Fe
0.06	0.29	<0.01		25.48	0.601	0.371
0.13	0.16	<0.01		38.57	1.068	0.227

Table. 3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化 学 組 成 (%)								所 見
					Total Fe	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	塩基性成分	TiO <sub>2</sub>	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
SNN-1	住居11埋土	鉄滓	平安以降	ウルボスピネル+ファイヤライト	42.40	8.32	5.21	15.72	0.29	1.13	25.48	<0.01	砂鉄製錬滓
SNN-2	住居11埋土	鉄滓	平安以降	ウルボスピネル+ファイヤライト	—	—	—	—	—	—	—	—	砂鉄製錬滓
SNN-3	ピット	鉄滓	平安以降	ウルボスピネル+ファイヤライト	36.13	15.18	7.25	8.19	0.16	0.95	38.57	<0.01	砂鉄製錬滓
SNN-4	包含層	椀形滓?	中世 (室町)	ウスタイト+ファイヤライト、フェライト、錆化鉄									沸し鍛接・鍛練鍛冶滓
SNN-5	住居7床直	板状鉄斧	弥生中期末葉	介在物：ファイヤライト、フェライト・パーライト、<0.15% C	—	—	—	—	—	—	—	—	低温還元直接製鋼法、鉍石系、縦鍛接合せ鍛え

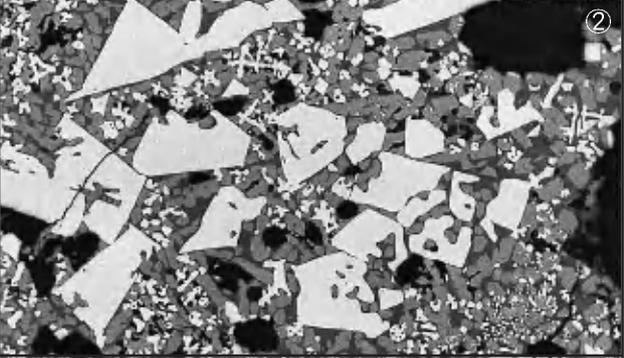
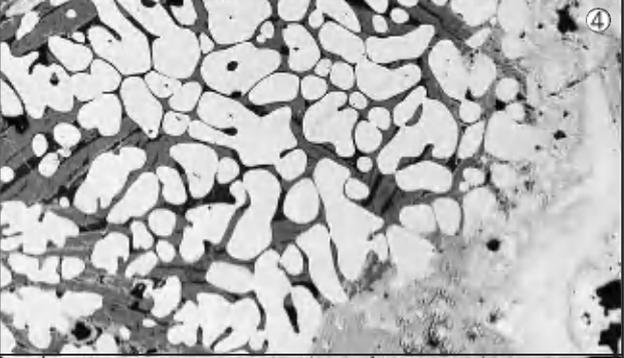
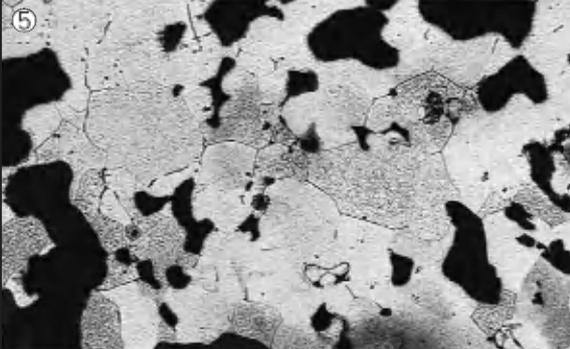
<p><b>SNN-1</b></p> <p>鉄滓 (炉内滓) ①×100 ウルボスピネル+ ファイヤライト</p> <p>硬度圧痕写真割愛 708Hv</p>	 <p>SNN-1</p>	 <p>①</p>
<p><b>SNN-2</b></p> <p>鉄滓 (炉内滓) ②×100 ウルボスピネル+ ファイヤライト</p> <p>硬度圧痕写真割愛 661Hv</p>	 <p>SNN-2</p>	 <p>②</p>
<p><b>SNN-3</b></p> <p>鉄滓 (炉内滓) ③×100 ウルボスピネル+ ファイヤライト</p> <p>硬度圧痕写真割愛 697Hv</p>	 <p>SNN-3</p>	 <p>③</p>
<p><b>SNN-4</b></p> <p>椀形鍛冶滓 ④×100 ウスタイト+ ファイヤライト</p> <p>硬度圧痕写真割愛 457Hv</p> <p>⑤×100 ナイタルetch フェライト結晶粒</p> <p>⑥×200 硬度圧痕 75Hv フェライト</p>	 <p>SNN-4</p>	 <p>④</p>
 <p>⑤</p>	 <p>⑥</p>	

Photo.1 鉄滓の顕微鏡組成

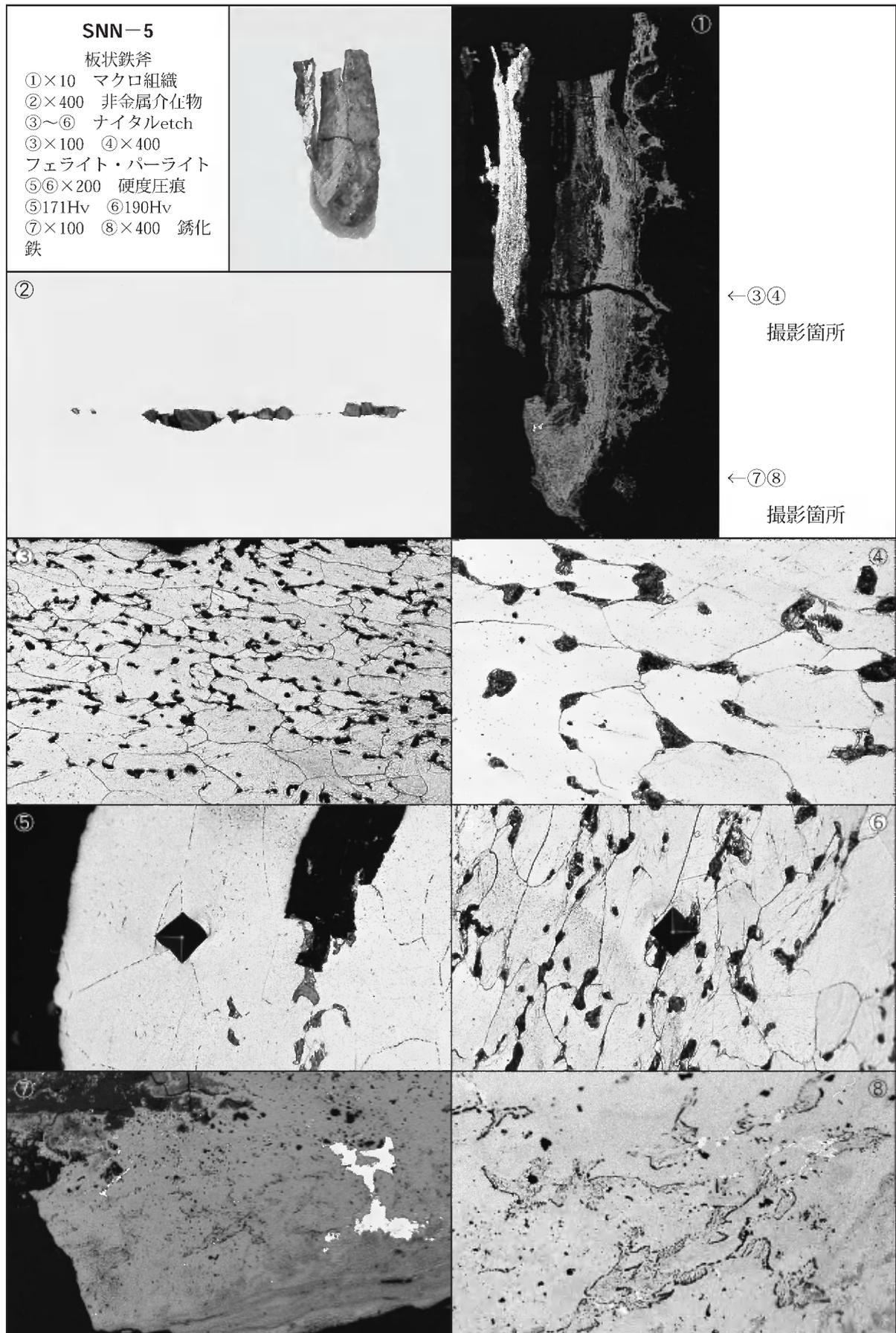
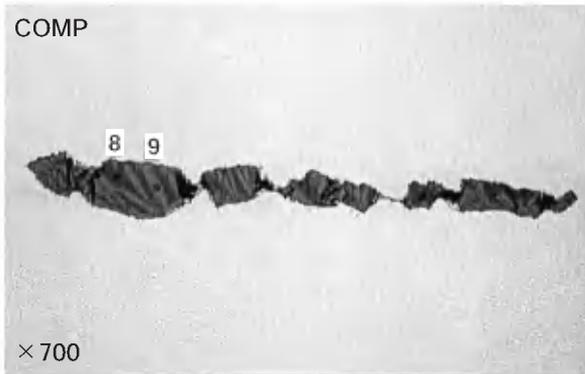


Photo.2 塩納成遺跡出土板状鉄斧のマクロ・顕微鏡組織

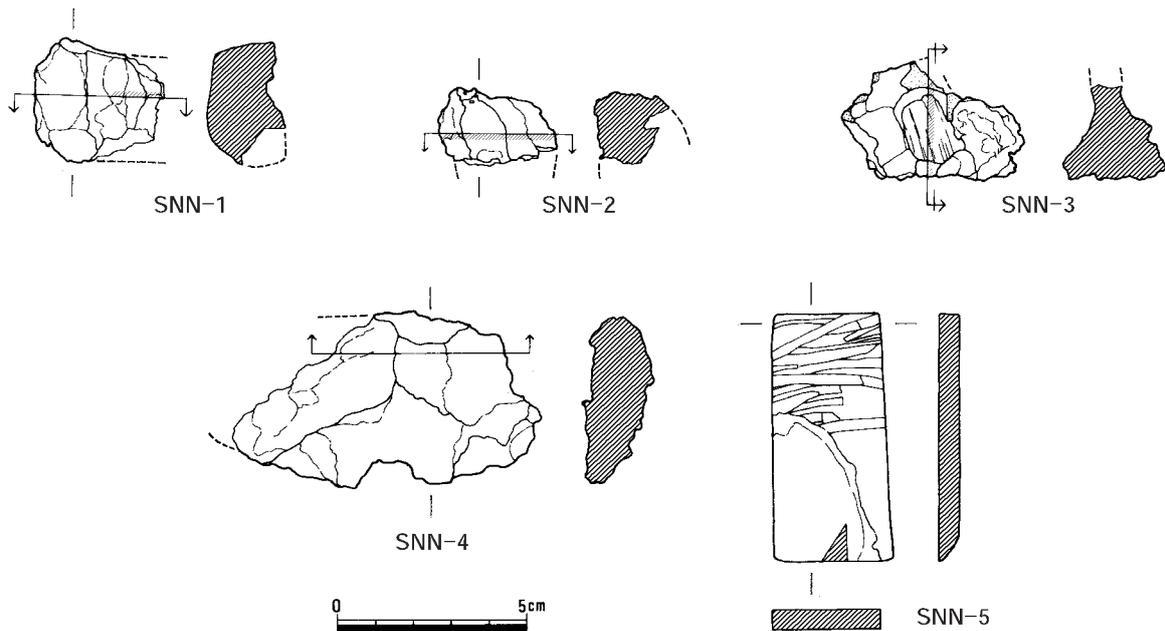


Element	8	9
F	—	—
Na <sub>2</sub> O	0.174	0.036
MgO	0.578	6.420
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	9.717	1.764
SiO <sub>2</sub>	36.044	29.713
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	9.652	6.299
S	0.118	0.013
K <sub>2</sub> O	0.846	0.138
CaO	27.153	7.243
TiO <sub>2</sub>	0.668	0.087
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	—	0.038
MnO	0.280	1.629
FeO	14.016	51.301
CuO	0.106	0.046
V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.068	—
As <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.010	0.046
Total	99.430	104.773



Photo.4 塩納成遺跡出土鉄斧（1/1）

Photo.3 出土鉄斧（SNN-5）の非金属介在物のEPMA調査結果



供試材実測図及び観察位置（1/2）

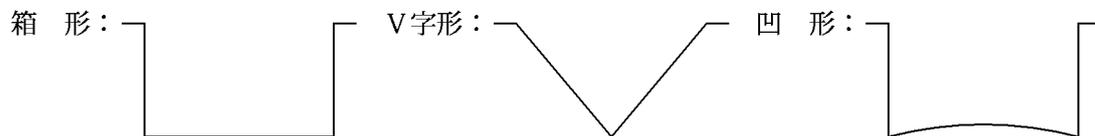


# 遺構・遺物一覧

## 凡 例

### 遺構一覧

- 1 竪穴住居・竪穴・段状遺構一覧の「規模」は、検出時の掘り方上面での計測値を記している。
- 2 竪穴住居一覧の「柱穴」は、分母に確認した本数を、分子に推定される支柱穴の本数を記している。支柱穴の本数が不明な場合は分母に記入していない。
- 3 竪穴住居一覧の「焼土面」「壁体溝」には、存在した場合に○、存在しない場合に×を記している。焼土面の数が限定できる場合のみ実数値を記入している。
- 4 竪穴住居・竪穴一覧の床面積は、掘り方の下場か壁体溝の下場で計測している。
- 5 掘立柱建物一覧の「棟方向」は、桁の中軸線と座標北の軸線との差を記している。
- 6 段状遺構一覧の「柱穴」「壁体溝」には、存在した場合に○、存在しない場合は×を記している。
- 7 柱穴列一覧の「軸方向」は、主軸線と座標北との差を記している。
- 8 土壙一覧の「断面形」は、以下のとおりである。



### 遺物一覧

- 1 「計測値」の空欄は、計測不能なことを示す。
- 2 土器一覧の「外面色調」は、破片全体の中の主たる色調を記している。
- 3 石器一覧の「計測値」は、剥離方向に関係なく計測している。このため特に剥片石器・剥片類については、縦長剥片・横長剥片の区別を示していない。
- 4 土器以外の一覧には掲載した遺物のほかに、出土した遺物すべてを記している。

遺構一覽

竪穴住居一覽

遺構名	位置	平面形	規模 (cm)	底面海拔高 (m)	柱 穴 (本)	中央穴 (cm)			礎土面	壁溝	時 期	備 考	調査時遺構名
						形状	長×短	深さ					
竪穴住居1	最下段	円		31.54	2/4	楕円	73×38	12	×	○	弥生中期中葉		No.2
竪穴住居2	最下段	円	推定径800	31.40	5/				×	○	弥生中期後葉		No.3
竪穴住居3	最下段	円	推定径900	31.47	6/				×	○	弥生中期後葉		No.1
竪穴住居4	下段	隅丸方	470×		4/				×	○	弥生中期中葉		No.16
竪穴住居5	下段	不整	590×	32.66					×	×	弥生中期中葉		No.16
竪穴住居6	下段	隅丸方	推定460×		4/4	楕円	60×44	28	○	○	弥生中期末葉		No.11
竪穴住居7	下段	隅丸方	660×	33.24	4/4	楕円	70×54	24	2	○	弥生中期末葉		No.11
竪穴住居8	下段	円	推定径700	33.70	6/6				×	×	弥生中期末~後期頭		No.8
竪穴住居9	下段	不明			4/4				×	×	弥生中期後半		
竪穴住居10	下段	不明			4/				×	○	弥生中期中葉		No.30
竪穴住居11	下段	円	425×430	32.80	0				×	×	弥生中期中葉	床面積12.1㎡	No.23
竪穴住居12	下段	円		32.88	2/4?				×	○	弥生中期中葉		No.19
竪穴住居13	上段	円?							×	○	弥生中期中葉		No.41
竪穴住居14	上段	円?		36.26					×	○	弥生中期中葉		No.41
竪穴住居15	最上段	不明							×	×	弥生中期中葉		

竪穴一覽

遺構名	位置	平面形	規模 (cm)	底面海拔高 (m)	柱穴	柱間距離 (cm)	被熱面の位置	時期	備 考	調査時遺構名
竪穴1	下段	不整長方	610×150~244	33.6	6	291~141	南東隅	鎌倉	床面積約10㎡。北壁は岩脈を掘削	No.7

掘立柱建物一覽

遺構名	位置	規 模	柱 穴 距 離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟 方 向	時期	備 考	調査時遺構名
			桁	梁							
掘立柱建物1	下段	1×	300		300			N 69° E	弥生中期		No.62
掘立柱建物2	下段	5×	140~325			1257		N-88°-E	弥生中期後半	床面海拔高32.05m、北側に加工段と溝。	No.60
掘立柱建物3	下段	1×2	200~280	136・151	505	151	7.1	N-89°-W	弥生中期中葉	床面海拔高33.64m	No.59
掘立柱建物4	下段	2×3	150~230	106・140	610	246	15.1	N-83°-E	弥生中期後葉	北側に溝	No.21
掘立柱建物5	下段	5×	120~250			858		N-84°-E	弥生中期中葉	床面海拔高33.24m、北側に加工段と溝。	No.22
掘立柱建物6	下段	4×	150~310		848			N-77°-E	弥生中期中葉	床面海拔高32.07m、北側に加工段と溝。	No.25
掘立柱建物7	下段	2×3	270~438	180~291	1026	471	45.7	N-75°-E	中世		
掘立柱建物8	下段	1×2	247~350	282・303	615	303	28.4	N-76°-E	鎌倉後半以降		
掘立柱建物9	下段	2×2	183~294	204・198	477	414	17.4	N-05°-W	鎌倉		
掘立柱建物10	下段	2×2	219~225	198~204	444	412	18.1	N-07°-E	鎌倉		No.49
掘立柱建物11	下段	2×4	180~255	150・195	939	405	34.8	N-83°-E	鎌倉後半		
掘立柱建物12	下段	2×2	258~318	156~240	607	398	22.7	N-84°-E	平安後期以降		
掘立柱建物13	下段	1×2	210・224	300	434	300	13.1	N-85°-E	鎌倉後半		
掘立柱建物14	下段	1×2	117~132	198・210	249	210	5.1	N-02°-W	室町後半以降		
掘立柱建物15	中段	1×2	120~282	198・225	420	225	8.7	N-86°-W	室町後半以降		
掘立柱建物16	中段	2×2	108~147	69~138	255	207	5.1	N-15°-E	室町後半以降		

## 段状遺構一覽

遺構名	位置	規模 (cm)	底面海拔高 (m)	柱穴	壁溝	時期	備考	調査時遺構名
段状遺構 1	上段		36.70	×	○	弥生中期後半		No.37・38
段状遺構 2	上段	382	36.73	×	○	弥生中期後半		No.39
段状遺構 3	中段	285	32.07	○	○	弥生中期後半		No.40
段状遺構 4	下段	676	33.80	×	○	弥生中期中葉		No.57
段状遺構 5	下段		33.82	×	○	弥生中期後半		No.54
段状遺構 6	下段	327	33.78	×	○	弥生中期後半		No.53
段状遺構 7	下段	334	33.76	○	○	弥生中期後半		No.61
段状遺構 8	下段		33.50	×	○	弥生中期後半		No.63
段状遺構 9	下段		33.66	×	×	弥生中期末葉		No.12
段状遺構 10	下段		33.70	×	○	弥生中期後半		No.35
段状遺構 11	下段	600	32.80	○	×	弥生中期中葉		No.29
段状遺構 12	上段	488	35.94	×	×	古墳後期		No.43

## 柱穴列一覽

遺構名	位置	規模 (m)	柱穴距離 (m)	軸方向	時期	備考	調査時遺構名
柱穴列 1	最上段	7.08	104~223	N-80°-W	弥生中期後半		
柱穴列 2	中段	5.8	168~202	N 89° E	弥生中期後半		
柱穴列 3	最下段	5.8	240・340	N-77°-E	弥生中期中葉		No. 4
柱穴列 4	下段	9.76	210~280	N-69°-E	中世		
柱穴列 5	下段	12.41	123~366	N-88°-E	平安後期以降	北・東側にある。	
柱穴列 6	下段	2.86	286	N-16°-W	鎌倉後半		No.48
柱穴列 7	下段	27.1	210~621	N-81°-E	鎌倉後半	北・東側にある。	No.13
柱穴列 8	下段	14.91	51~474	N-85°-E	鎌倉		No.47
柱穴列 9	下段	9.89	75~225	N-88°-E	鎌倉		
柱穴列 10	上段	10.18	74~156	N-89°-W	中世		

## 土壇一覽

遺構名	位置	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	時期	備考	調査時遺構名
土壇 1	最上段	不整楕円	箱	103	72	22	37.20	弥生中期後半		No.45
土壇 2	下段	不整長方	箱	153	60	32	33.04	弥生中期中葉		No.50
土壇 3	下段	不整長方	箱	144	84	41	32.93	弥生中期後半		No.51
土壇 4	下段	不整方	箱	113	91	10	33.25	弥生中期中葉		No.58
土壇 5	下段	方	箱	134	80+	21	33.53	弥生中期中葉		No.56
土壇 6	下段	不整方	箱	93	73	15	33.10	弥生後期前葉		No.10
土壇 7	下段	溝	V字	355	78	42	32.30	弥生中期後葉		No.52
土壇 8	下段	方	箱	103	75	10	32.82	弥生中期中葉		No.20
土壇 9	下段	方	凹	75	35+	34	32.83	弥生中期後葉		No.33

## 溝一覽

遺構名	位置	時期	調査時遺構名
溝 1	下段~最下段	弥生中期中葉	No.67
溝 2	下段~最下段	弥生中期中葉	No.65
溝 3	下段~最下段	弥生中期中葉	No.66
溝 4	下段~最下段	弥生中期後葉	No.64
溝 5	下段	弥生中期	No.18
溝 6	下段	弥生中期中葉	No.24

遺構名	位置	時期	調査時遺構名
溝 7	下段	弥生中期中葉	No.26
溝 8	上段	弥生以降	No.36
溝 9	下段	中世	No. 6
溝 10	下段	中世	No. 5
溝 11	下段	中世	No. 5 下流
溝 12	下段	室町以降	No. 9

土器・瓦一覽

掲載番号	実測番号	出土地区	出土遺構名	種別	器種	計口	直径	底径(脚・台)	径	高	外面色調	調整	特徴	な	ビ
1	2	最上段	T1	弥生土器	甕			6.8			にぶい黄緑	外：ハケメ→ヘラミガキ、内：工具ナデ			
2	3	上段	T2	弥生土器	甕			6.2			にぶい黄緑	外：ナデ？、内：工具ナデ			
3	4	上段	T2	弥生土器	高杯			1.2			緑	内・外：調整不明			
4	8	最上段	T4	土師器	カマド						にぶい黄緑	内・外：ハケメ			
5	5	最上段	T5	弥生土器	甕			6			にぶい黄緑	外：ヘラミガキ、内：指ナデ			
6	6	下段	T6	弥生土器	甕			7.3			明灰濁	外：ヘラミガキ、内：工具ナデ			
7	7	下段	T6	土師器	皿			8.2			にぶい黄緑	内・外：ヨコナデ			
8	10	下段	T6	土師器	鉢						灰	外：口縁部ヨコナデ、内：ナデ			
9	9	下段	T6	瓦質土器	鉢						灰	外：ナデ？			
10	12	下段	T6	瓦質土器	罎						にぶい黄緑				
11	13	最上段	T8	弥生土器	罎						灰黄緑				
12	14	最上段	T8	弥生土器	罎			3.05			灰黄緑				
13	11	最上段	T8	弥生土器	罎						灰黄緑				
14	1	下段	T10	弥生土器	甕						明灰濁	外：ハケメ、内：ヘラミガキ			
15	17	最上段	T5 晒裏	瓦	平瓦				厚：2		外：晒裏「V」字状の工具で彫刻				
16	127	最上段	略穴住居1 押上	弥生土器	甕		17.2				緑	外：ハケメ→指頭押上、内：ナデ？			
17	126	最下段	略穴住居1 埋土	弥生土器	甕		19.4				黄灰	内：ナデ			
18	128	最下段	略穴住居1 埋土	弥生土器	鉢						にぶい黄緑	外：ハケメ、内：ナデ			
19	125	最下段	略穴住居1 埋土	弥生土器	甕		6.8				にぶい黄緑	外：ハケメ→ミガキ、内：ハケメ→同部のみミガキ			
20	124	最下段	略穴住居3 埋土	弥生土器	甕		14.4				にぶい黄緑	外：ハケメ→ミガキ、内：指頭押上→ナデ			
21	130	最下段	略穴住居2 溝内	弥生土器	甕		20.3				にぶい黄緑	外：ミガキ、内：指頭押上→ナデ			
22	181	最下段	略穴住居3 北外ピット	弥生土器	甕		6.2				にぶい黄緑	外：ハケメ→ミガキ、内：指頭押上→ナデ			
23	121	最下段	略穴住居3 床面	弥生土器	甕		7				にぶい黄緑	外：ハケメ			
24	122	最下段	略穴住居3 埋土	弥生土器	高杯		11.5				明灰濁	外：口縁部凹線3条→刻み			
25	137	下段	略穴住居5 埋土	弥生土器	甕		17.4				にぶい黄緑	外：口縁部凹線3条→ナデ			
26	136	下段	略穴住居5 埋土	弥生土器	甕			5.8			にぶい黄緑	外：口縁部凹線3条→ナデ			
27	135	下段	略穴住居5 埋土	弥生土器	甕			10.9			にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ナデ			
28	72	下段	略穴住居7 床面	弥生土器	甕		20.4			推41.0	にぶい黄緑	外：口縁部凹線3条、内：ハケメ			
29	95	下段	略穴住居7 床面	弥生土器	甕		11				にぶい黄緑	外：口縁部凹線3条、内：ハケメ→同部のみミガキ			
30	74	下段	略穴住居7 床面	弥生土器	甕		14			推定約30.0	にぶい黄緑	外：口縁部凹線3条、内：ハケメ→同部のみミガキ			
31	71	下段	略穴住居7 床面	弥生土器	甕			12			緑	外：ミガキ、肩部に飯状工具による刺突、内：指頭押上→ハケメ→ト半にケズリ			
32	94	下段	略穴住居7 床面	弥生土器	甕						にぶい黄緑	外：口縁部凹線3条、内：ハケメ→同部のみミガキ			
33	73	下段	略穴住居7 床面	弥生土器	甕			6.6			明灰濁	外：口縁部凹線3条、内：ハケメ			
34	80	下段	略穴住居7 床面	弥生土器	甕		15.2				にぶい黄緑	外：口縁部凹線6条→捺付浮文、内：ナデ			
35	76	下段	略穴住居7 床面	弥生土器	甕			8.7			にぶい黄緑	外：ナデ→ミガキ、内：ケズリ			
36	77	下段	略穴住居7 床面	弥生土器	甕			9			にぶい黄緑	外：ミガキ、内：板ナデ？			
37	78	下段	略穴住居7 床面	弥生土器	甕			5.2			にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ケズリ			
38	79	下段	略穴住居7 床面	弥生土器	甕		推定約7.5			5	にぶい黄緑	外：口縁部凹線6条、内：指頭押上→ナデ			
39	93	下段	略穴住居7 床面	弥生土器	高杯			9.6		12.2	灰黄緑	三角形透かし7個？			
40	89	下段	略穴住居7 埋土	弥生土器	甕		11.6				にぶい黄緑	外：口縁部凹線2条			
41	84	下段	略穴住居7 埋土	弥生土器	甕			6.6			灰黄緑	外：ミガキ、内：指ナデ→板ナデ			
42	75	下段	略穴住居7 埋土	弥生土器	甕			7.2			緑	外：ミガキ、内：ケズリ			
43	81	下段	略穴住居7 埋土	弥生土器	甕						灰黄緑	外：口縁部凹線4？条→捺付浮文、内：ナデ			
44	92	下段	略穴住居7 埋土	弥生土器	甕		29.6				灰黄緑	外：口縁部凹線4？条→捺付浮文、内：ナデ			
45	88	下段	略穴住居7 埋土	弥生土器	皿口甕						にぶい赤褐	外：指頭押上→ナデ			
46	91	下段	略穴住居7 埋土	弥生土器	甕			6.6			灰黄緑	外：口縁部凹線3条、内：ケズリ			
47	87	下段	略穴住居7 埋土	弥生土器	高杯						緑	外：口縁部凹線4条、内：ミガキ？			
48	85	下段	略穴住居7 埋土	弥生土器	高杯						緑	外：口縁部凹線5条、内：ミガキ？			
49	86	下段	略穴住居7 埋土	弥生土器	高杯						にぶい赤褐	外：口縁部凹線3条、内：ナデ			
50	90	下段	略穴住居7 埋土	弥生土器	高杯？			14			にぶい赤褐	内：ケズリ、透かし孔推定6個			
51	82	下段	略穴住居7 埋土	弥生土器	高杯			9.4		脚高11	にぶい黄緑	外：ミガキ、内：工具ナデ			
52	131	下段	略穴住居8 埋土	弥生土器	甕			7.6			緑	外：ミガキ、内：工具ナデ			

掲載番号	共測番号	出土地区	出土遺構名	種別	器種	計測値 (cm)		外面色調	調整	特徴	備考
						口径	底径(脚・台)				
53	132	下段	竈穴住居8坪上	弥生土器	甕			にぶい黄緑			
54	160	下段	竈穴住居10坪上	弥生土器	甕			にぶい黄緑			
55	157	下段	竈穴住居10坪上	弥生土器	高杯			にぶい黄緑	内：ナデ		
56	158	下段	竈穴住居10坪上	弥生土器	甕	7		にぶい黄緑	内：指頭押圧→ナデ		
57	159	下段	竈穴住居10坪上	弥生土器	器台	7.9		にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ナデ?		
58	150	下段	竈穴住居11坪上	弥生土器	甕	26.4		にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ナデ?		
59	153	下段	竈穴住居11坪上	弥生土器	器台		11	にぶい黄緑	外：ミガキ、内：指頭押圧→上貝ナデ		
60	144	下段	竈穴住居12坪上	弥生土器	甕			にぶい黄緑	外：ハケメ→刺突文・口縁端部凹線3条、内：ナデ		
61	141	下段	竈穴住居12坪上	弥生土器	器台			にぶい黄緑	外：口縁部凹線2条液存・口縁端部凹線4条→梅状浮文		
62	138	下段	竈穴住居12坪上	弥生土器	甕	25.6		にぶい黄緑	口縁端部凹線4条→梅状浮文・竹舌文		
63	143	下段	竈穴住居12坪上	弥生土器	高杯	37.8		灰白	外：ハケメ・口縁端部凹線2条		
64	139	下段	竈穴住居12坪上	弥生土器	甕		6	にぶい黄緑	外：工貝ナデ→ミガキ、内：ケズリ		
65	140	下段	竈穴住居12坪上	弥生土器	甕			褐灰	外：ナデ、内：工貝液残存		
66	142	下段	竈穴住居12坪上	弥生土器	鉢?		8.8	橙	外：ナデ→透かし孔、内：ケズリ		
67	172	上段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕	24.5		にぶい黄緑	外：ハケメ、内：指頭押圧→ナデ		
68	171	上段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕			にぶい黄緑			
69	169	上段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕	15.2		にぶい黄緑			
70	166	上段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕		6	にぶい黄緑			
71	168	上段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕	5.2	2.6	にぶい黄緑	外：工貝ナデ→ミガキ?、内：指頭押圧→工貝ナデ		
72	165	上段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕	5.8		にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ケズリ		
73	170	上段	竈穴住居14坪上	弥生土器	小形鉢	5	2.25	にぶい黄緑	外：工貝ナデ、内：ナデ		
74	167	上段	竈穴住居14坪上	弥生土器	高杯	10.2		にぶい黄緑	外：ハケメ→透かし孔、内：ケズリ		
75	186	下段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕	15.6		橙	外：口縁端部凹線1条、内：ナデ		
76	148	下段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕			にぶい黄緑	外：ハケメ→横書き波状文→縦書き直線文、内：指頭押圧→ナデ		
77	135	下段	竈穴住居14坪上	弥生土器	高杯			橙			
78	149	下段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕	7		橙	内：工貝ナデ		
79	145	下段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕			橙	外：ナデ→ミガキ、内：ナデ		
80	146	下段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕	6		にぶい黄緑	外：ミガキ、内：工貝ナデ		
81	154	下段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕	5.8		にぶい黄緑	外：ミガキ、内：指頭押圧→ナデ		
82	147	下段	竈穴住居14坪上	弥生土器	甕			灰黄褐	内：ナデ		
83	152	下段	竈穴住居14坪上	弥生土器	鉢	10.2		にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ナデ		
84	151	下段	竈穴住居14坪上	弥生土器	鉢?	5.7		にぶい黄緑	内：ケズリ		
85	183	下段	段状遺構4坪上	弥生土器	甕	20		にぶい黄緑	口縁端部刻み口		
86	184	下段	段状遺構4坪上	弥生土器	甕			橙	口縁端部沈線4条→刻み口、内：口縁部積り文		
87	185	下段	段状遺構4坪上	弥生土器	器台	20.2		橙	口縁端部凹線2条→刻み口		
88	134	下段	段状遺構9坪上	弥生土器	高杯	20.4		にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ミガキ?		
89	182	中段	柱穴列2P1	弥生土器	甕	17.2		橙	口縁端部凹線2条→刻み口		
90	180	中段	柱穴列2P4	弥生土器	甕	11.4	5.9	にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ナデ→工貝ナデ		
91	178	最下段	柱穴列3P2	弥生土器	甕			橙			
92	179	最下段	柱穴列3P2	弥生土器	甕	11.4		にぶい黄緑	外：ミガキ、内：指頭押圧→ナデ		
93	174	下段	土壇2	弥生土器	甕	23		灰黄褐	外：ハケメ、内：ナデ		
94	175	下段	土壇2	弥生土器	甕	19.4		にぶい黄緑	外：ハケメ・口縁端部刻み、内：ミガキ		
95	176	下段	土壇2	弥生土器	甕		9.6	にぶい黄	外：ミガキ?、内：ケズリ		
96	173	下段	土壇6	弥生土器	鉢		6	明灰褐	外：ミガキ、内：体部ミガキ・台部ナデ、凹線充填		
97	133	下段	土壇6	弥生土器	高杯	22.5		にぶい黄	外：指頭ナデ→ミガキ→ヨロミミガキ・口縁端部凹線5条・指頭沈線、内：指部シボリ痕、凹線充填		
98	177	下段	土壇7	弥生土器	甕			にぶい黄	口縁端部凹線4条		
99	191	下段	溝1	弥生土器	高杯	16.6		にぶい黄褐	外：ミガキ・口縁端部刻み口、内：ミガキ		
100	190	下段	溝1	弥生土器	高杯	24.6		にぶい黄緑	外：ミガキ・口縁端部刻み口、内：ハケメ		
101	189	下段	溝1	弥生土器	甕	18		にぶい黄緑	外：ハケメ→貼付凸部、内：ナデ		
102	193	下段	溝1	弥生土器	高杯			にぶい黄緑	外：ハケメ→透かし孔、内：指部ナデ?、被合部シボリ痕		
103	192	下段	溝2	弥生土器	鉢	14.2	1.3	橙	外：ナデ→二か七孔、内：指部ナデ?、被合部シボリ痕		
104	116	下段	溝2	弥生土器	甕	14.2		にぶい黄緑	外：ハケメ→貼付凸部→工貝による刻み痕文・内：ナデ		
105	119	下段	溝2	弥生土器	高杯	34.4		にぶい黄	外：ミガキ、内：ハケメ→ミガキ		
106	117	下段	溝2	弥生土器	高杯			にぶい黄			
107	118	下段	溝2	弥生土器	甕	8		灰黄褐	外：工貝ナデ、内：ミガキ		

掲載番号	実測番号	出土地区	出土遺構名	種別	器種	計測値 (cm)	外面色調	調整	特徴	な	と
108	120	下段	溝 2	弥生土器	高杯		粉	外：ミガキ→穿孔(径8mm)、内：ナデ			
109	188	下段	溝 3	弥生土器	甕	9.6	粉	口縁部凹線2条→刻み目			
110	187	下段	溝 3	弥生土器	甕	6.1	にぶい黄緑	外：ミガキ、内：折頭押圧→ナデ			
111	99	下段	溝 4	弥生土器	甕	18	にぶい黄緑	外：胴部ハケメ→ミガキ・口縁部凹線1条、内：胴部ハケメ→指頭押圧			
112	104	下段	溝 4	弥生土器	甕	16.4	明赤褐色	外：胴部ハケメ、内：ナデ			
113	98	下段	溝 4	弥生土器	甕	17.2	にぶい黄緑	内：指頭押圧→ナデ			
114	100	下段	溝 4	弥生土器	甕	14.4	にぶい黄緑	外：胴部ハケメ・口縁部凹線1条、内：ナデ			
115	102	下段	溝 4	弥生土器	甕	13.7	にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
116	101	下段	溝 4	弥生土器	甕	14	にぶい黄緑	外：胴部ハケメ・口縁部凹線1条、内：ナデ			
117	106	下段	溝 4	弥生土器	甕	11.1	にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
118	108	下段	溝 4	弥生土器	甕	10.4	にぶい黄緑	外：胴部ハケメ・口縁部凹線1条、内：ナデ			
119	96	下段	溝 4	弥生土器	甕	6.8	明赤褐色	外：ミガキ、内：ナデ			
120	111	下段	溝 4	弥生土器	甕	4.8	にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
121	110	下段	溝 4	弥生土器	甕	5	にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ナデ			
122	97	下段	溝 4	弥生土器	甕	6.2	灰黄褐色	外：ミガキ、内：ナデ			
123	112	下段	溝 4	弥生土器	甕	7.3	にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
124	109	下段	溝 4	弥生土器	甕	9.6	にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
125	105	下段	溝 4	弥生土器	高杯	18.8	黄灰	外：ミガキ・内：ナデ			
126	113	下段	溝 4	弥生土器	高杯	20	にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ナデ			
127	115	下段	溝 4	弥生土器	高杯	23.1	にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
128	114	下段	溝 4	弥生土器	高杯		にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
129	107	下段	溝 4	弥生土器	高杯		灰黄褐色	外：ハケメ→腹付凸帯、内：ナデ			
130	103	下段	溝 4	弥生土器	器台?		にぶい黄緑	内：ナデ			
131	163	下段	くぼみ	弥生土器	甕	10	粉	外：ミガキ・内：ナデ			
132	162	下段	くぼみ	弥生土器	甕	8.5	にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ナデ			
133	164	下段	くぼみ	弥生土器	甕?		にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
134	161	下段	くぼみ	弥生土器	甕	10	にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
135	137	上段	糸面堆積	弥生土器	鉢	15.6	にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
136	198・199	上段	糸面堆積	弥生土器	甕	17.4	にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
137	196	上段	糸面堆積	弥生土器	甕	24.4	にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
138	203	上段	糸面堆積	弥生土器	甕	7	にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ナデ			
139	195	上段	糸面堆積	弥生土器	高杯	34.8	にぶい黄緑	外：ミガキ・口縁部凹線2条、内：ミガキ			
140	204	上段	糸面堆積	弥生土器	甕	5.8	灰黄褐色	外：ミガキ			
141	201	上段	糸面堆積	弥生土器	甕	6.2	にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ナデ			
142	200	上段	糸面堆積	弥生土器	甕	6.1	にぶい黄緑	外：ミガキ、内：折頭押圧→ナデ			
143	202	上段	糸面堆積	弥生土器	甕	18.8	明赤褐色	外：ミガキ、内：折頭押圧→ナデ			
144	205	上段	糸面堆積	弥生土器	器台	21.8	にぶい黄緑	外：ハケメ→捺状浮文?			
145	207	上段	糸面堆積	弥生土器	甕	28.4	にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
146	215	下段	西半包含層	弥生土器	甕	19.3	にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
147	210	下段	東半包含層	弥生土器	鉢	10.9	灰褐色	外：指頭押圧→ナデ			
148	212	下段	西半包含層	弥生土器	甕		にぶい黄緑	外：指頭押圧→ナデ			
149	211	下段	東半包含層	弥生土器	高杯	9.6	灰黄褐色	外：指頭押圧→ナデ			
150	206	下段	東半包含層	弥生土器	高杯	20	粉	外：指頭押圧→ナデ			
151	208	下段	西半包含層	弥生土器	高杯	19.8	にぶい黄緑	外：ミガキ、内：ミガキ			
152	213	下段	西半包含層	弥生土器	鉢	5.2	粉	外：指頭押圧			
153	209	下段	西半包含層	弥生土器	鉢		粉	外：ハケメ→ヘラ描き沈線文、内：指頭押圧			
154	214	下段	西半包含層	弥生土器	器台		にぶい黄緑	外：指頭押圧			
155	20	下段	段状遺構12埋土	須臾器	甕		灰白				
156	23	下段	竅穴1埋土	上脚器	杯		にぶい黄	内・外：ヨコナデ、外底部：ヘラ切り?			
157	24	下段	竅穴1埋土	上脚器	小皿	7.8	にぶい黄	内・外：ヨコナデ、外底部：ヘラ切り?			
158	25	下段	竅穴1埋土	上脚器	皿	8.2	にぶい黄	内・外：ヨコナデ、外底部：ヘラ切り→ナデ			
159	22	下段	竅穴1外処	備前焼	甕		灰	外：板ナデ、内：ナデ			
160	34	下段	孤立柱建物8P3	青磁	甕		淡黄色	外：片彫り連弁、内：片彫り葉花文			
161	32	下段	孤立柱建物9P7	土師器	皿		淡黄	内・外：ヨコナデ、内底部：ハケメ			
162	216	下段	孤立柱建物10P5	土師器	鉢	19.6	にぶい黄緑	内・外：ヨコナデ			

番号	実測番号	出土地区	出土遺構名	種別	器種	計測値 (cm)		外面色調	調整	特徴	名称
						口徑	底(脚・台)径				
163	29	下段	孤立柱建物1P2	土師器	碗		4.4	外：ナズ、内：ナズ			ビ
164	30	下段	孤立柱建物1P2	土師器	碗			灰口			
165	28	下段	孤立柱建物2P6	須置器	杯		6.2	灰口			
166	27	下段	孤立柱建物4P5	須置器	ホウロク			灰			
167	18	最下段	中央包舎層	土師器	軒丸瓦			灰			
168	19	最下段	中央包舎層	土師器	平瓦		厚：2	灰			
169	47	最下段	東半包舎層	土師器	カマド			灰			
170	46	最下段	東半包舎層	土師器	カマド			灰			
171	42	最下段	中央包舎層	土師器	釜	19.4		灰			
172	41	最下段	中央包舎層	土師器	網			灰			
173	43	最下段	東半包舎層	土師器	釜			灰			
174	45	最下段	中央包舎層	土師器	鉢			灰			
175	33	最下段	中央包舎層	土師器	小皿	9	3.8	灰			
176	38	最下段	中央包舎層	土師器	皿			灰			
177	60	最下段	東半包舎層	土師器	壺	11		灰			
178	39	最下段	中央包舎層	土師器	四口?壺	14		灰			
179	48	最下段	東半包舎層	土師器	甕			灰			
180	49	最下段	東半包舎層	土師器	甕			灰			
181	16	最下段	西半包舎層	土師器	甕			灰			
182	59	最下段	東半包舎層	土師器	甕			灰			
183	57	最下段	東半包舎層	土師器	甕		18.6	灰			
184	40	最下段	東半包舎層	土師器	甕	31.6	1.2	灰			
185	37	最下段	東半包舎層	土師器	甕			灰			
186	53	最下段	東半包舎層	土師器	甕			灰			
187	55	最下段	東半包舎層	土師器	甕			灰			
188	50	最下段	東半包舎層	土師器	甕			灰			
189	58	最下段	東半包舎層	土師器	甕		9	灰			
190	36	最下段	中央包舎層	土師器	甕		13.2	灰			
191	54	最下段	東半包舎層	土師器	甕		14	灰			
192	52	最下段	東半包舎層	土師器	甕		13	灰			
193	51	最下段	東半包舎層	土師器	甕		11.6	灰			
194	61	下段	東半包舎層	土師器	小皿	8.4	5.6	灰			
195	62	下段	東半包舎層	土師器	小皿	6.6	1	灰			
196	21	下段	西半包舎層	須置器	杯		9.1	灰			
197	63	下段	東半包舎層	須置器	鉢			灰			
198	65	下段	西半包舎層	須置器	鉢			灰			
199	35	下段	東半包舎層	青磁	小碗	11.4		灰			
200	26	下段	東半包舎層	土師器	小壺		4.6	灰			
201	64	下段	東半包舎層	土師器	甕	30.5	14.2	灰			
202	68	中段	東半包舎層	土師器	甕	11.6		灰			
203	69	中段	東半包舎層	土師器	甕		15.4	灰			
204	67	中段	東半包舎層	土師器	甕			灰			
205	66	中段	東半包舎層	土師器	甕			灰			
206	70	中段	東半包舎層	土師器	甕	28.6	12.6	灰			

遺物一覧

石器一覧

掲載番号	整理番号	出土地区	出土遺構・土層	器種	計測値 (mm)			現存重量 (g)	石	材	備考
					最大長	最大幅	最大厚				
	296		T1	円鏝	51.5	32.0	25.8	54.78			流紋岩
S1	298		T3	砥石片	39.5	22.6	10.1	9.28			流紋岩
	297		T3	二次加工のある剥片	25.0	19.5	4.0	1.84			サヌカイト
S2	299		T4	磨製斧	86.0	63.6	53.5	383.05			珩岩
	300		T4	刃器?	117.6	62.2	13.1	1.84			流紋岩
	301		T5	刃器	47.4	50.5	9.0	23.50			
S3	304		T10	柱状片刃斧	73.0	33.1	33.5	88.17			緑色片岩
	314		T10	剥片	41.5	51.5	9.3	18.56			ガラス質流紋岩
	315		T10	使用痕のある剥片	42.7	23.0	5.5	7.35			サヌカイト
S4	22	最下段	竪穴住居 3 埋土	叩き石	88.5	49.0	32.9	181.60			
S5	23	最下段	竪穴住居 3 埋土	叩き石片	29.5	28.0	5.5	24.73			珩岩?
S4+S5	22+23	最下段	竪穴住居 3 埋土	叩き石	11.0	49.0	32.9	186.33			
S6	1	最下段	竪穴住居 3 埋土	鐵未製品?	30.2	27.0	16.4	5.45			サヌカイト
S7	2	最下段	竪穴住居 3 埋土	楔	30.5	22.1	8.1	4.70			サヌカイト
S8	6	最下段	竪穴住居 3 埋土	楔?	28.2	24.0	6.4	4.22			サヌカイト
S9	4	最下段	竪穴住居 3 埋土	使用痕のある剥片	28.3	25.8	5.2	3.99			サヌカイト
S10	3	最下段	竪穴住居 3 埋土	使用痕のある剥片	26.0	27.5	2.6	1.37			サヌカイト
S11	9	最下段	竪穴住居 3 埋土	楔	28.0	16.5	6.3	3.91			貞岩
S12	10	最下段	竪穴住居 3 埋土	鏃	75.5	36.2	13.4	42.82			古銅輝石安山岩
S13	11	最下段	竪穴住居 3 埋土	スクレイパー	56.4	31.3	7.0	14.19			古銅輝石安山岩
S14	16	最下段	竪穴住居 3 埋土	不明	33.5	31.5	7.7	8.98			古銅輝石安山岩
S15	13	最下段	竪穴住居 3 埋土	スクレイパー	29.3	41.4	8.5	10.04			古銅輝石安山岩
S16	185	最下段	竪穴住居 3P6	刃器	46.0	54.0	12.0	29.16			ガラス質流紋岩
S17	26	最下段	竪穴住居 3 埋土	剥片	75.0	36.0	36.5	86.45			ガラス質流紋岩
S18	41	最下段	竪穴住居 3 埋土	スクレイパー	75.5	38.5	21.0	44.35			ガラス質流紋岩
S19	186	最下段	竪穴住居 3P6	スクレイパー	64.0	38.0	19.0	31.04			ガラス質流紋岩
S20	27	最下段	竪穴住居 3 床面	スクレイパー	58.5	41.0	15.0	29.14			ガラス質流紋岩
S21	40	最下段	竪穴住居 3 埋土	使用痕のある剥片	66.0	34.0	19.0	6.80			ガラス質流紋岩
S22	35	最下段	竪穴住居 3 埋土	使用痕のある剥片	33.0	28.0	7.5	5.10			ガラス質流紋岩
S23		最下段	竪穴住居 3 埋土	二次加工のある剥片	35.5	24.0	9.0	5.65			
S24	28	最下段	竪穴住居 3 埋土	使用痕のある剥片	67.0	42.0	22.0	48.60			ガラス質流紋岩
S23+S24		最下段	竪穴住居 3 埋土	使用痕のある剥片	72.0	42.0	22.0	54.25			
S25	25	最下段	竪穴住居 3 床面	残核→ハンマー	94.0	73.0	4.0	253.61			ガラス質流紋岩
S26	24	最下段	竪穴住居 3 床面	残核→ハンマー	77.0	59.0	31.0	164.95			ガラス質流紋岩
S27	29	最下段	竪穴住居 3 埋土	二次加工のある剥片	27.0	32.0	9.0	6.27			ガラス質流紋岩
S28	37	最下段	竪穴住居 3 埋土	二次加工のある剥片	24.0	26.0	8.0	4.00			ガラス質流紋岩
S29	43	最下段	竪穴住居 3 埋土	剥片	46.5	33.0	9.0	13.30			ガラス質流紋岩
S30	36	最下段	竪穴住居 3 埋土	二次加工のある剥片	45.0	57.0	7.5	13.36			ガラス質流紋岩
	5	最下段	竪穴住居 3 埋土	破片	23.0	13.0	2.2	0.87			サヌカイト
	7	最下段	竪穴住居 3 埋土	二次加工のある剥片	18.0	28.0	4.5	2.16			サヌカイト
	8	最下段	竪穴住居 3 埋土	剥片	26.3	29.5	7.4	6.67			サヌカイト
	12	最下段	竪穴住居 3 埋土	刃器片	14.5	23.8	3.9	1.13			古銅輝石安山岩
	14	最下段	竪穴住居 3 埋土	二次加工のある剥片	33.8	37.8	5.4	5.68			古銅輝石安山岩
	15	最下段	竪穴住居 3 埋土	二次加工のある剥片	14.2	22.1	4.5	1.72			古銅輝石安山岩
	17	最下段	竪穴住居 3 埋土	破片	12.7	26.9	4.1	0.93			古銅輝石安山岩
	18	最下段	竪穴住居 3 埋土	二次加工のある剥片	19.3	18.0	3.5	1.74			古銅輝石安山岩
	19	最下段	竪穴住居 3 埋土	二次加工のある剥片	17.6	29.2	5.1	2.09			古銅輝石安山岩
	20	最下段	竪穴住居 3 埋土	破片	17.2	34.9	4.3	1.89			古銅輝石安山岩
	21	最下段	竪穴住居 3 埋土	石器?	133.0	92.0	41.0	478.23			古銅輝石安山岩(ホルンフェルス)
	30	最下段	竪穴住居 3 埋土	剥片	16.8	29.6	5.2	1.95			ガラス質流紋岩
	31	最下段	竪穴住居 3 埋土	剥片	22.0	45.2	9.3	7.09			ガラス質流紋岩
	32	最下段	竪穴住居 3 埋土	剥片	30.4	21.7	4.4	2.30			ガラス質流紋岩
	33	最下段	竪穴住居 3 埋土	剥片	24.3	14.9	5.5	1.65			ガラス質流紋岩
	34	最下段	竪穴住居 3 埋土	剥片	33.2	19.1	4.8	2.91			ガラス質流紋岩
	38	最下段	竪穴住居 3 埋土	二次加工のある剥片	19.0	24.0	5.3	3.57			ガラス質流紋岩
	39	最下段	竪穴住居 3 埋土	剥片	20.3	31.0	4.4	2.42			ガラス質流紋岩
	42	最下段	竪穴住居 3 埋土	破片	21.8	250.0	26.4	3.13			ガラス質流紋岩
S31	44	最下段	竪穴住居 2 壁帯溝	剥片	37.0	46.0	10.0	21.64			ガラス質流紋岩
	187	最下段	竪穴住居 2P4	破片	29.4	51.0	6.3	13.52			ガラス質流紋岩
	188	最下段	竪穴住居 2P4	破片	14.6	24.4	7.5	2.36			ガラス質流紋岩
	189	最下段	竪穴住居 2・3P12	叩き石片?	89.7	64.7	49.0	438.20			珩岩
S32	113	下段	竪穴住居 5 埋土	鏃	27.1	19.2	5.0	2.28			サヌカイト
S33	114	下段	竪穴住居 5 埋土	刃器片	33.6	20.5	4.0	3.06			サヌカイト
S34	115	下段	竪穴住居 5 埋土	不明	28.7	26.6	7.3	4.33			サヌカイト
S35	126	下段	竪穴住居 5 埋土	スクレイパー	88.5	42.5	27.0	113.86			ガラス質流紋岩
S36	119	下段	竪穴住居 5 埋土	鏃	103.0	43.5	14.3	70.23			古銅輝石安山岩
S37	129	下段	竪穴住居 5 埋土	鏃	93.2	62.7	16.8	126.64			流紋岩
	116	下段	竪穴住居 5 埋土	使用痕のある剥片	16.0	17.5	2.0	0.62			サヌカイト
	117	下段	竪穴住居 5 壁帯溝	二次加工のある剥片	22.0	18.5	2.2	1.04			サヌカイト
	118	下段	竪穴住居 5 埋土	二次加工のある剥片	52.0	16.0	8.0	7.13			サヌカイト
	120	下段	竪穴住居 5 埋土	二次加工のある剥片	30.8	41.6	10.0	11.27			古銅輝石安山岩
	121	下段	竪穴住居 5 埋土	二次加工のある剥片	25.3	44.5	7.8	7.94			古銅輝石安山岩
	122	下段	竪穴住居 5 埋土	二次加工のある剥片	25.2	25.0	4.5	2.86			古銅輝石安山岩

遺物一覽

掲載番号	整理番号	出土地区	出土遺構・土層	器種	計測値 (mm)			現存重量 (g)	石 材	備 考
					最大長	最大幅	最大厚			
	123	下段	竪穴住居 5 埋土	使用痕のある剥片	40.0	28.4	6.4	6.31	古銅輝石安山岩	
	124	下段	竪穴住居 5 埋土	二次加工のある剥片	33.6	27.3	5.8	4.77	古銅輝石安山岩	
	125	下段	竪穴住居 5 埋土	二次加工のある剥片	40.0	6508.0	12.8	30.55	古銅輝石安山岩	
	127	下段	竪穴住居 5 埋土	剥片	41.2	36.8	18.3	28.34	ガラス質流紋岩	
	128	下段	竪穴住居 5 埋土	破片	16.0	28.9	8.4	2.72	ガラス質流紋岩	
	131	下段	竪穴住居 5 埋土	磨製石器片	18.9	15.1	3.5	0.97		
	132	下段	竪穴住居 5 埋土	磨り石片	71.8	57.0	1.9	44.87	砂岩 (細粒)	
	133	下段	竪穴住居 5 埋土	焼け石	21.0	21.3	12.0	5.20		
	134	下段	竪穴住居 5 埋土	焼け石	19.3	26.0	9.7	6.04	流紋岩	
	135	下段	竪穴住居 5 埋土	焼け石	21.5	25.5	19.4	10.45	流紋岩	
	199	下段	竪穴住居 4・5P3	二次加工のある剥片	11.3	6.7	1.3	0.08	サヌカイト	
	200	下段	竪穴住居 4・5P3	二次加工のある剥片	23.0	14.0	3.0	0.79	サヌカイト	
	201	下段	竪穴住居 4・5P3	破片	22.7	11.5		0.75	サヌカイト	
S38	96	下段	竪穴住居 7 埋土	二次加工のある剥片	14.9	17.0	2.4	0.67	ガラス質流紋岩	
S39	130	下段	竪穴住居 7P3	始刃斧	165.5	72.0	40.5	745.63	砂岩	
S40	53	下段	竪穴住居 7 埋土	鐵	19.0	13.8	2.9	0.83	サヌカイト	
S41	305	下段	竪穴住居 7 床面	鐵	23.7	14.3	3.9	0.98	サヌカイト	
S42	51	下段	竪穴住居 7 埋土	鐵	28.7	15.6	3.9	1.75	サヌカイト	
S43	52	下段	竪穴住居 7 床面	鐵	23.5	15.4	3.5	1.26	サヌカイト	
S44	50	下段	竪穴住居 7 埋土	鐵	27.4	15.0	4.0	1.34	サヌカイト	
S45	68	下段	竪穴住居 7 埋土	鐵非製品	12.4	9.6	2.0	0.28	サヌカイト	
S46	55	下段	竪穴住居 7 床面	匙	102.0	49.3	11.0	43.21	サヌカイト	
S47	54	下段	竪穴住居 7 床面	打製包丁?	124.5	48.4	11.6	76.44	サヌカイト	
S48	67	下段	竪穴住居 7 埋土	打製包丁片	40.0	36.5	3.6	12.26	サヌカイト	
S49	97	下段	竪穴住居 7 埋土	刃器	60.5	42.5	14.0	42.01	ガラス質流紋岩	
S50	69	下段	竪穴住居 7 埋土	刃器	34.9	257.0	5.3	4.85	サヌカイト	
	70	下段	竪穴住居 7 埋土	二次加工のある剥片	35.5	32.8	5.8	4.52	サヌカイト	
	74	下段	竪穴住居 7 埋土	—	—	—	—	—	サヌカイト	
	88	下段	竪穴住居 7 埋土	—	—	—	—	—	サヌカイト	
S51	56	下段	竪穴住居 7 床面	スクレイパー	70.1	30.6	9.5	23.30	サヌカイト	
S52	57	下段	竪穴住居 7 床面	刃器	51.3	31.2	10.6	11.11	サヌカイト	
S53	308	下段	竪穴住居 7 床面	刃器	48.2	35.9	4.5	6.91	サヌカイト	
S54	58	下段	竪穴住居 7 床面	二次加工のある剥片	50.6	50.2	6.2	12.70	サヌカイト	
	73	下段	竪穴住居 7 埋土	二次加工のある剥片	—	—	—	—	サヌカイト	
S55	112	下段	竪穴住居 7 床面	台石	385.0	276.0	140.0	205000.00	花崗ハン岩	赤化顕著
S56	111	下段	竪穴住居 7 床面	台石	282.0	514.0	81.4	17000.00	花崗ハン岩	赤化顕著
	59	下段	竪穴住居 7 床面	二次加工のある剥片	20.0	14.5	4.0	1.25	サヌカイト	
	60	下段	竪穴住居 7 床面	破片	16.6	18.5	2.0	0.66	サヌカイト	
	61	下段	竪穴住居 7 床面	破片	15.0	20.8	2.6	0.79	サヌカイト	
	62	下段	竪穴住居 7 床面	破片	12.9	12.8	2.1	0.26	サヌカイト	
	63	下段	竪穴住居 7 床面	二次加工のある剥片	11.1	20.9	2.8	0.56	サヌカイト	
	64	下段	竪穴住居 7 床面	破片	16.6	6.1	3.1	0.92	サヌカイト	
	65	下段	竪穴住居 7 床面	破片	9.9	5.5	1.3	0.10	サヌカイト	
	66	下段	竪穴住居 7 床面	破片	14.7	19.2	1.9	0.38	サヌカイト	
	71	下段	竪穴住居 7 埋土	剥片	23.0	42.7	6.1	3.81	サヌカイト	
	72	下段	竪穴住居 7 埋土	二次加工のある剥片	18.1	28.3	3.3	1.17	サヌカイト	
	75	下段	竪穴住居 7 埋土	剥片	18.2	17.1	3.3	0.77	サヌカイト	87と接合
	76	下段	竪穴住居 7 埋土	二次加工のある剥片	17.0	13.4	5.4	1.63	サヌカイト	
	77	下段	竪穴住居 7 埋土	剥片	26.2	14.3	1.9	0.65	サヌカイト	
	78	下段	竪穴住居 7 埋土	破片	7.7	16.0	2.0	0.20	サヌカイト	
	79	下段	竪穴住居 7 埋土	二次加工のある剥片	—	—	—	—	サヌカイト	83と接合
	80	下段	竪穴住居 7 埋土	二次加工のある剥片	12.2	17.0	3.3	0.58	サヌカイト	
	81	下段	竪穴住居 7 埋土	破片	10.3	14.2	1.5	0.17	サヌカイト	
	82	下段	竪穴住居 7 埋土	剥片	25.5	26.1	4.4	2.34	サヌカイト	
	83	下段	竪穴住居 7 埋土	剥片	24.5	24.0	5.0	1.71	サヌカイト	79と接合
	84	下段	竪穴住居 7 埋土	破片	—	—	—	—	サヌカイト	
	85	下段	竪穴住居 7 埋土	破片	13.3	20.4	1.9	0.39	サヌカイト	
	86	下段	竪穴住居 7 埋土	破片	16.9	12.5	2.5	0.46	サヌカイト	
	87	下段	竪穴住居 7 埋土	破片	—	—	—	—	サヌカイト	75と接合
	89	下段	竪穴住居 7P10	破片	7.8	12.5	14.0	0.10	サヌカイト	
	90	下段	竪穴住居 7P10	破片	4.3	6.4	1.4	0.05	サヌカイト	
	91	下段	竪穴住居 7P10	破片	2.7	4.2	1.2	0.01	サヌカイト	
	92	下段	竪穴住居 7P10	破片	2.7	2.1	1.2	0.01以下	サヌカイト	
	93	下段	竪穴住居 7 床面	破片	20.8	25.8	3.0	1.76	古銅輝石安山岩	
	94	下段	竪穴住居 7 埋土	二次加工のある剥片	21.9	36.9	9.6	7.07	ガラス質流紋岩	
	95	下段	竪穴住居 7 埋土	剥片	14.7	28.1	3.5	1.52	ガラス質流紋岩	
	98	下段	竪穴住居 7 埋土	二次加工のある剥片	35.0	20.0	3.5	1.76	ガラス質流紋岩	
	99	下段	竪穴住居 7 埋土	剥片	22.6	17.9	5.8	1.75	ガラス質流紋岩	
	100	下段	竪穴住居 7 埋土	剥片	8.5	13.2	3.4	0.36	ガラス質流紋岩	
	101	下段	竪穴住居 7 埋土	二次加工のある剥片	23.6	214.0	5.2	2.24	ガラス質流紋岩	
	102	下段	竪穴住居 7 埋土	破片	8.9	8.2	2.7	0.16	ガラス質流紋岩	
	103	下段	竪穴住居 7 埋土	破片	51.0	2.3	0.8	0.01以下	ガラス質流紋岩	
	104	下段	竪穴住居 7 埋土	破片	14.4	8.8	2.4	0.37	ガラス質流紋岩	

遺物一覧

掲載番号	整理番号	出土地区	出土遺構・土層	器種	計測値 (mm)			現存重量 (g)	石材	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
	105	下段	竪穴住居7埋土	碎片	18.5	17.0	2.0	0.66	サヌカイト	
	106	下段	竪穴住居7床面	磨製石器片	28.6	13.5	4.8	2.19		斧か?
	107	下段	竪穴住居7埋土	円礫	82.0	45.0	40.0	241.05	花崗岩	
	108	下段	竪穴住居7床面	焼石	19.0	11.0	6.0	0.99	流紋岩	赤化顕著
	109	下段	竪穴住居7床面	焼石	32.0	12.0	6.5	2.37	流紋岩	赤化顕著
	110	下段	竪穴住居7床面	焼石	41.0	33.0	9.5	17.56	流紋岩	赤化顕著
	294	下段	竪穴住居7P10	碎片	7.1	6.3	2.1	0.06	ガラス質流紋岩	
	295	下段	竪穴住居7P10	碎片	5.5	3.2	1.8	0.02	ガラス質流紋岩	
	306	下段	竪穴住居7埋土	刃器	51.6	39.8	8.8	16.55	古銅輝石安山岩	
	307	下段	竪穴住居7埋土	碎片	22.5	15.2	5.5	1.56	ガラス質流紋岩	
	309	下段	竪穴住居7床面	二次加工のある剥片	22.0	16.3	2.3	0.89	サヌカイト	
	310	下段	竪穴住居7床面	碎片	13.5	9.3	2.0	0.23	サヌカイト	
	311	下段	竪穴住居7床面	剥片	33.1	26.3	11.5	8.43		
	312	下段	竪穴住居7床面	碎片	13.2	16.9	5.3	0.69	ガラス質流紋岩	
	313	下段	竪穴住居7床面	碎片	9.7	11.4	1.5	0.21	ガラス質流紋岩	
S57	45	下段	竪穴住居8埋土	槍	44.8	33.2	11.6	18.40	サヌカイト	
	46	下段	竪穴住居8埋土	使用痕のある剥片	23.8	23.7	3.0	1.74	サヌカイト	
	47	下段	竪穴住居8埋土	碎片	11.6	8.0	2.2	0.29	サヌカイト	
	48	下段	竪穴住居8埋土	碎片	14.1	15.6	3.2	0.61	サヌカイト	
	193	下段	竪穴住居9P2	磨き石	46.0	30.8	12.5	22.63	流紋岩	被熱
S58	159	下段	竪穴住居10埋土	楔	21.0	19.5	6.0	2.22	ガラス質流紋岩	
S59	155	下段	竪穴住居10埋土	使用痕のある剥片	24.3	17.0	4.6	1.55	サヌカイト	
S60	154	下段	竪穴住居10埋土	使用痕のある剥片	40.5	19.0	5.2	4.05	サヌカイト	
S61	158	下段	竪穴住居10埋土	使用痕のある剥片	87.0	38.0	38.5	101.81	ガラス質流紋岩	
S62	160	下段	竪穴住居10埋土	刃器	56.0	48.0	21.0	48.97	ガラス質流紋岩	
	156	下段	竪穴住居10埋土	二次加工のある剥片	32.5	16.0	3.8	208.00	サヌカイト	
	157	下段	竪穴住居10埋土	二次加工のある剥片	14.0	10.0	2.0	0.25	サヌカイト	
	161	下段	竪穴住居10埋土	碎片	21.4	25.7	3.2	1.41	ガラス質流紋岩	
	152	下段	竪穴住居10埋土	刃器	46.0	59.1	10.6	13.49	古銅輝石安山岩	
	153	下段	竪穴住居10埋土	二次加工のある剥片	13.5	11.0	2.0	0.35	サヌカイト	
S63	144	下段	竪穴住居11床面	ハンマー	92.5	71.5	37.0	318.58	ガラス質流紋岩	
	145	下段	竪穴住居11埋土	二次加工のある剥片	29.0	43.4	15.0	20.82	ガラス質流紋岩	
	137	下段	竪穴住居12埋土	焼円礫	37.9	32.1	11.6	18.50	流紋岩	
S64	166	上段	竪穴住居14埋土	鎌	65.5	47.6	16.1	43.68	古銅輝石安山岩	
S65	165	上段	竪穴住居14埋土	楔	24.0	18.2	7.4	2.95	サヌカイト	
S66	164	上段	竪穴住居14埋土	磨製包丁片	48.3	29.6	5.0	9.15	センマイ岩	
S67	170	上段	竪穴住居14埋土	叩き石	120.7	84.1	53.5	750.17	珉岩	
	167	上段	竪穴住居14埋土	二次加工のある剥片	34.2	40.3	7.5	8.49	古銅輝石安山岩	
	168	上段	竪穴住居14埋土	二次加工のある剥片	20.3	16.1	7.8	2.58	古銅輝石安山岩	
	169	上段	竪穴住居14埋土	磨製石器片	33.2	33.0	7.2	7.38	粘板岩?	
	172	上段	竪穴住居14埋土	円礫	47.8	23.9	21.3	31.99	ホルンフェルス	被熱?
	208	最上段	竪穴住居15P3	二次加工のある剥片	14.0	11.0	2.0	0.21	サヌカイト	
S68	179	下段	掘立柱建物1溝内	楔	39.0	21.0	5.0	4.84	ガラス質流紋岩	
	180	下段	掘立柱建物1溝内	刃器?	41.6	37.7	4.9	9.78	古銅輝石安山岩	
	181	下段	掘立柱建物1溝内	焼円礫	57.3	35.8	22.8	48.58	砂岩	
S69	136	下段	掘立柱建物2溝内	ハンマー+磨き石	62.8	10.6	10.3	12.61	頁岩	
	178	下段	掘立柱建物2埋土		46.0	21.0	4.0	3.19	サヌカイト	
S70	139	下段	掘立柱建物5埋土	鎌	25.6	16.1	4.1	1.65	サヌカイト	
S71	143	下段	掘立柱建物5溝内	使用痕のある剥片	37.9	35.3	6.0	8.38	古銅輝石安山岩	
S72	151	下段	掘立柱建物5溝内	刃器	72.9	42.5	10.4	36.98	古銅輝石安山岩	
S73	141	下段	掘立柱建物5埋土	使用痕のある剥片	59.0	50.0	20.0	38.66	ガラス質流紋岩	
	140	下段	掘立柱建物5埋土	使用痕のある剥片	19.0	16.5	2.5	0.86	サヌカイト	
	142	下段	掘立柱建物5埋土	碎片	15.0	9.5	2.0	0.31	サヌカイト	
S74	149	下段	掘立柱建物6埋土	刃器	48.5	39.5	10.0	16.78	古銅輝石安山岩	
S75	147	下段	掘立柱建物6埋土	ハンマー	86.0	78.0	63.0	623.73	ガラス質流紋岩	
S76	150	下段	掘立柱建物6P1	船刃斧	100.7	67.6	47.2	454.80	砂岩(細粒)	
	146	下段	掘立柱建物6埋土	二次加工のある剥片	23.5	28.4	8.5	4.33	ガラス質流紋岩	
	148	下段	掘立柱建物6埋土	碎片	17.7	14.4	2.5	0.50	サヌカイト	
	177	下段	段状遺構4溝内	碎片	15.5	6.0	1.5	0.14	サヌカイト	
	175	下段	段状遺構5溝内	二次加工のある剥片	14.5	11.0	2.0	0.29	サヌカイト	
	49	下段	段状遺構9埋土	二次加工のある剥片	11.7	12.1	2.3	0.42	サヌカイト	
S77	194	下段	段状遺構10溝内	磨製包丁片	25.8	21.0	5.7	5.15	混雑片岩	
S78	206	最上段	柱穴列1P8	鉄未成品	17.0	12.7	3.8	0.76	サヌカイト	
S79	207	最上段	柱穴列1P9	小型方形状片刃斧	51.6	14.1	12.0	17.93		
	205	最上段	柱穴列1P1	台石	210.0	150.0	54.0	3000.0	花崗ハン岩	
	184	最下段	柱穴列3P2	円礫	41.0	39.5	18.1	29.19	珉岩	
	176	下段	土層5	角礫	168.0	104.0	59.0	1378.62	ホルンフェルス	
	138	下段	土層9	磨き石?	37.1	31.8	18.9	21.62	砂岩	
S80	303	下段	溝4	使用痕のある剥片	48.6	27.7	4.3	5.14	サヌカイト	
S81	183	下段	溝4	扁平斧	48.4	36.8	9.6	23.86	ホルンフェルス	
	182	下段	溝4	焼円礫	24.5	20.0	11.1	7.10	珉岩	
	302	下段	溝4	碎片	22.0	17.3	1.7	0.63	サヌカイト	
S82	163	下段	くぼみ	鎌	85.0	62.5	7.5	66.35	流紋岩	

掲載番号	整理番号	出土地区	出土遺構・土層	器種	計測値(㎜)			現存重量(g)	石材	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
S83	162	下段	くぼみ	二次加工のある剥片	22.1	18.6	5.9	2.72	サヌカイト	
	317	下段	くぼみ	二次加工のある剥片	21.0	18.3	3.7	1.23	古銅輝石安山岩	
S84	286	上段	斜面休積	叩き石	111.3	71.1	28.0	369.79	珪岩	
	316	上段	斜面休積	磨き石	31.9	23.1	10.3	10.08	流紋岩	
S85	285	上段	斜面堆積	刃器	46.0	44.5	10.5	22.66	古銅輝石安山岩	
	287	上段	斜面堆積	叩き石片	63.8	61.0	29.0	158.81	珪岩	
	288	上段	斜面堆積	焼石	67.8	41.4	23.0	78.15	花崗ハン岩	
	251	下段	東半包含層	楔	24.7	24.0	6.5	2.46	サヌカイト	
S86	252	下段	東半包含層	楔	15.0	22.5	5.5	1.97	サヌカイト	
S88	248	下段	東半包含層	鐵	20.9	14.2	4.6	1.24	サヌカイト	
S89	249	下段	東半包含層	鐵	26.5	12.5	3.9	1.25	サヌカイト	
S90	195	下段	中央包含層	鐵	30.4	14.4	4.6	1.77	サヌカイト	
S91	203	下段	中央包含層	鐵	31.1	20.1	4.2	2.12	サヌカイト	
S92	221	最下段	中央包含層	鐵未成品	26.5	21.3	4.7	2.90	サヌカイト	
S93	226	下段	中央包含層	鐵	18.8	17.6	3.0	0.87	サヌカイト	
S94	250	下段	中央包含層	鐵非成品	20.5	14.0	3.2	0.81	サヌカイト	
S95	230	下段	中央包含層	打製包丁片	48.0	46.0	12.1	18.69	サヌカイト	
S96	264	下段	中央包含層	刃器?	56.4	33.0	6.9	10.96	サヌカイト	
S97	277	下段	東半包含層	スクレイパー	71.5	51.0	27.0	90.83	ガラス質流紋岩	
S98	261	下段	中央包含層	鐵	68.0	44.2	11.9	41.03	古銅輝石安山岩	
S99	210	最下段	東半包含層	鐵	107.0	67.0	27.0	238.95	ホルンフェルス	
S100	273	下段	東半包含層	蛤刃斧	140.5	66.5	43.5	650.39	珪岩	
S101	236	下段	東半包含層	磨製斧→ハンマー	84.5	56.7	29.0	200.40	珪岩	
S102	217	最下段	中央包含層	方形状片刃斧	56.9	22.4	36.0	72.48	センマイ岩	
S103	218	最下段	東半包含層	斧	128.5	62.2	33.0	387.12	ホルンフェルス(流紋岩)	
S104	283	最下段	西半包含層	叩き石	223.0	335.0	53.0	5500.00	珪岩	被熱
S105	192	下段	中央包含層	ハンマー片	81.0	35.5	44.0	128.84	ガラス質流紋岩	被熱
S106	237	下段	東半包含層	叩き石	66.8	60.0	49.0	285.68	流紋岩	被熱
S107	247	下段	東半包含層	砥石	63.5	60.2	28.5	105.84		
S108	234	下段	東半包含層	砥石	161.0	81.0	38.8	824.20	ホルンフェルス	
S109	216	最下段	東半包含層	砥石	53.0	25.6	11.3	25.76	流紋岩	
S110	209	最下段	東半包含層	砥石?温石?	53.4	48.4	12.7	55.85	流紋岩	
S111	215	最下段	東半包含層	砥石	79.0	53.7	33.8	148.58	流紋岩	
	173	下段	竪穴1	使用痕のある剥片	11.6	12.0	2.6	0.41	サヌカイト	
	174	下段	竪穴1	ハンマー	34.3	25.2	13.7	17.76	珪岩	
	190	下段	東半ビット	二次加工のある剥片	19.0	11.0	6.5	1.03	サヌカイト	
	191	下段	東半ビット	破片	12.5	10.0	2.0	0.24	サヌカイト	
	196	下段	東半ビット	叩き石	79.6	75.1	57.3	472.15	珪岩	被熱
	197	下段	東半ビット	打製包丁片	45.5	35.5	10.5	13.90	サヌカイト	
	198	下段	東半ビット	破片	23.0	7.5	3.5	0.64	サヌカイト	
	202	下段	東半ビット	台石	221.0	223.0	77.0	5100.00	石英斑岩	被熱
	204	下段	東半ビット	台石	17.0	12.7	3.5	0.76	花崗ハン岩	被熱
	211	最下段	東半包含層	二次加工のある剥片	46.0	40.0	10.0	27.47	サヌカイト	
	212	最下段	東半包含層	二次加工のある剥片	75.0	48.0	11.5	33.81	古銅輝石安山岩	
	213	最下段	東半包含層	剥片	88.5	48.5	16.8	81.83	ガラス質流紋岩	
	214	最下段	東半包含層	剥片	49.0	75.0	29.4	74.78	ガラス質流紋岩	
	219	最下段	東半包含層	叩き石?	83.3	70.5	63.5	538.03	花崗ハン岩	被熱
	220	最下段	東半包含層	刃器	70.0	29.5	6.0	22.06	古銅輝石安山岩	
	222	最下段	東半包含層	残核	41.2	41.5	21.5	40.29	ガラス質流紋岩	
	223	最下段	東半包含層	使用痕のある剥片	21.3	31.0	5.3	3.51	ガラス質流紋岩	
	224	最下段	東半包含層	二次加工のある剥片	33.1	43.2	7.6	11.44	ガラス質流紋岩	
	225	最下段	東半包含層	焼石	119.2	125.1	34.5	530.35	花崗ハン岩	
	227	下段	東半包含層	破片	18.0	16.5	5.3	1.71	サヌカイト	
	228	下段	東半包含層	刃器	61.5	56.6	13.1	38.52	古銅輝石安山岩	
	229	下段	東半包含層	焼石	38.8	33.1	12.5	15.51	花崗ハン岩	
	231	下段	東半包含層	使用痕のある剥片	29.3	26.0	4.1	2.98	ガラス質流紋岩	
	232	下段	東半包含層	二次加工のある剥片	42.5	54.5	15.8	29.78	ガラス質流紋岩	
	233	下段	東半包含層	破片	29.2	19.1	6.7	3.21	ガラス質流紋岩	
	235	下段	東半包含層	剥片	57.8	45.0	1.3	37.63		
	238	下段	東半包含層	叩き石	121.0	37.0	36.0	284.94	花崗岩	
	239	下段	東半包含層	二次加工のある剥片	21.5	18.5	3.5	1.49	サヌカイト	
	240	下段	東半包含層	使用痕のある剥片	22.0	18.0	3.0	1.52	サヌカイト	
	241	下段	東半包含層	二次加工のある剥片	15.0	13.5	2.7	0.53	サヌカイト	
	242	下段	東半包含層	刃器	41.0	48.5	13.5	28.96	古銅輝石安山岩	
	243	下段	東半包含層	使用痕のある剥片	32.0	29.0	4.7	3.47	サヌカイト	
	244	下段	東半包含層	刃器片	21.8	24.0	5.0	1.88	ガラス質流紋岩	
	245	下段	東半包含層	二次加工のある剥片	30.0	20.8	3.5	2.37	サヌカイト	
	246	下段	東半包含層	使用痕のある剥片	23.9	4.2	5.5	6.50	ガラス質流紋岩	
	253	下段	東半包含層	楔片	24.5	16.0	3.0	1.16	サヌカイト	
	254	下段	東半包含層	二次加工のある剥片	14.5	12.0	2.8	0.56	サヌカイト	
	255	下段	東半包含層	二次加工のある剥片	15.0	13.2	2.8	0.46	サヌカイト	
	256	下段	東半包含層	破片	13.3	11.0	3.0	0.54	サヌカイト	
	257	下段	東半包含層	破片	16.5	11.0	1.5	0.25	サヌカイト	

遺物一覽

掲載番号	整理番号	出土地区	出土遺構・土層	器種	計測値 (mm)			現存重量 (g)	石	材	備考
					最大長	最大幅	最大厚				
	258	下段	東半包含層	刃器	52.0	57.5	13.0	49.20	古銅輝石安山岩		
	259	下段	東半包含層	刃器	54.4	47.5	6.8	14.60	古銅輝石安山岩		
	260	下段	東半包含層	刃器片	19.5	34.6	5.4	4.34	古銅輝石安山岩		
	262	下段	東半包含層	刃器	44.3	62.4	8.0	21.54	古銅輝石安山岩		
	263	下段	東半包含層	使用痕のある剥片	22.3	20.5	3.0	1.75	サヌカイト		
	265	下段	東半包含層	剥片	43.8	54.4	21.7	44.26	ガラス質流紋岩		
	266	下段	東半包含層	二次加工のある剥片	24.9	34.2	6.5	4.78	ガラス質流紋岩		
	267	下段	東半包含層	刃器	90.0	71.0	16.0	108.37	古銅輝石安山岩		
	268	下段	東半包含層	刃器	33.5	53.5	10.0	15.87	古銅輝石安山岩		
	269	下段	東半包含層	刃器	32.0	34.4	7.1	7.57	古銅輝石安山岩		
	270	下段	東半包含層	刃器	34.5	32.5	5.8	5.89	古銅輝石安山岩		
	271	下段	東半包含層	二次加工のある剥片	25.4	22.2	3.7	2.68	古銅輝石安山岩		
	272	下段	東半包含層	破片	40.8	18.4	5.9	6.11	古銅輝石安山岩		
	274	下段	東半包含層	叩き石	53.8	100.2	61.2	469.29	珪岩		
	275	下段	東半包含層	二次加工のある剥片	68.8	57.3	20.8	71.88	ガラス質流紋岩		
	276	下段	東半包含層	使用痕のある剥片	35.0	50.6	13.5	11.89	ガラス質流紋岩		
	278	下段	東半包含層	剥片	61.2	75.1	12.7	50.66	ガラス質流紋岩		
	279	下段	西半包含層	凹礫	48.2	47.5	19.8	66.37	礫岩		
	280	下段	西半包含層	楔	29.8	26.3	6.5	6.20	サヌカイト		
	281	下段	西半包含層	破片	15.5	15.6	3.4	0.88	サヌカイト		
	282	下段	西半包含層	二次加工のある剥片	6.7	11.2	1.4	0.15	サヌカイト		
	284	最下段	西半包含層	台石					石英斑岩		
	289	上段	東半包含層	焼け石	262.0	76.0	73.0	1770.32	花崗斑岩		
	290	上段	東半包含層	破片	41.5	46.7	6.2	9.52	ガラス質流紋岩		
	291	上段	東半包含層	叩き石	122.0	85.5	41.5	637.07	花崗岩		
	292	上段	西半包含層	刃器	50.0	50.0	7.0	19.56	サヌカイト		
	293	下段	東半包含層	破片	12.7	16.0	2.8	0.57	ガラス質流紋岩		

土製品一覽

掲載番号	整理番号	出土地区	出土遺構・土層	器種	計測値 (mm)			現存重量 (g)	状態	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
C1	8	最下段	竪穴住居1埋土	円板	49	47.5	7	17.73	ほぼ完形	弥生土器裏片転用、打欠き成形
C2	7	最下段	竪穴住居3埋土	紡錘車	推定径66		8	12.93	1/4残存	弥生土器裏片転用、打欠き成形、孔径6mm
C3	16	下段	竪穴住居5埋土	円板	39	30.5	5.5	6.64	完形	弥生土器裏片転用、打欠き成形
C4	15	下段	竪穴住居5埋土	円板	41		6	7.26	1/2残存	弥生土器裏片転用、打欠き成形
C5	17	下段	竪穴住居5埋土	円板	43		4.5	6.27	3/5残存	弥生土器裏片転用、打欠き成形
C6	14	下段	竪穴住居5埋土	円板	36		10	9.64	3/5残存	弥生土器壺か鉢片転用、打欠き成形
C7	3	下段	竪穴住居7埋土	円板	47		8.5	15.59	1/2残存	弥生土器裏片転用、打欠き成形
C8	10	下段	竪穴住居8埋土	円板	62	62	7.2	30.27	5/6残存	弥生土器裏片転用、打欠き成形
C9	11	下段	竪穴住居14埋土	円板	58.5		7	14.92	1/2残存	弥生土器鉢片転用、打欠き成形
C10	12	下段	掘立柱建物3	円板	35		4.5	5.67	3/5残存	弥生土器裏片転用、打欠き成形
C11	9	最下段	柱列3P3	円板	推定径47		5.5	7.18	1/2残存	弥生土器裏片転用、打欠き成形
C12	13	下段	溝4埋土	円板	46		6	11.65	4/5残存	弥生土器裏片転用、打欠き成形
C13	4	上段	斜面堆積	円板	41.5		6.5	9.65	2/3残存	弥生土器裏片転用、打欠き成形
C14	1	最下段	中央包含層	紡錘車	43	42	5.5	10.37	完形	弥生土器裏片転用、打欠き成形、孔径2.5×3mm
C15	5	下段	中央包含層	円板	40	35.5	5.5	8.1	4/5残存	弥生土器裏片転用、打欠き成形
C16	18	最下段	西半包含層	円板	推定径61		5.5	8.75	1/4残存	弥生土器裏片転用、打欠き成形
C17	6	下段	中央包含層	円板	推定径76		7.5	45.22	4/5残存	弥生土器壺片転用、打欠き成形
C18	2	最下段	中央包含層	円板	47	44	18	39.75	完形	極し平皿片転用、打欠き成形

鉄器・銅製品一覽

掲載番号	整理番号	出土地区	出土遺構・土層	器種	材質	計測値 (mm)			現存重量 (g)	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
M1	19	下段	T10包含層	鑿	鉄	100	18	18	148.01	
M2	1	下段	竪穴住居7床面	板状鉄銚	鉄	70	35	4	53.62	片面と側面にのみ緊縛痕あり
M3	4	下段	竪穴住居7床面	釘?	鉄	38	6	5	3.05	
M4	9	上段	段階遺構12埋土	不明	鉄	40	11	6.5	13.15	箱形銅釜
M5	3	下段	掘立柱建物9P6	銭	銅	径25		1	2.56	照寧元寶
M6	2	下段	掘立柱建物12付近P9	銭	銅	径25		1	1.36	至和通寶
M7	5	下段	溝11	不明	鉄	49	27	3	6.13	
M8	6	下段	溝11	不明	鉄	63	6.5	3	4.54	
	7	下段	竪穴住居10埋土	ヤリガンナ片?	鉄	8	15	3	0.92	
	8	下段	竪穴住居7床面	ヤリガンナ片?	鉄	14	11	2	53.62	
	10	下段	中央ビット	鉄滓		45	24	30	45.66	磁性なし
	11	下段	竪穴住居11埋土混入	鉄滓		32	30	30	43.02	磁性極微弱
	12	下段	竪穴住居11埋土混入	鉄滓					48.12	口の同一個体の破片
	13	最下段	中央包含層	椀形滓?		80	46	26	97.73	磁性微弱
	14	最下段	中央包含層	ガラス質滓		90	45	48		羽根部
	15	下段	中央包含層	ガラス質滓		47	30	20		
	16	下段	中央包含層	ガラス質滓		33	30	21		
	17	下段	土壇9上面	鉄滓		17	14	13	3.58	磁性なし
	18	下段	土壇9上面	鉄滓						磁性なし、小片



1 調査区遠景  
(南上空から)



2 遺構全景  
(上が北)

図版 2



1 下段西半遺構全景  
(東から)



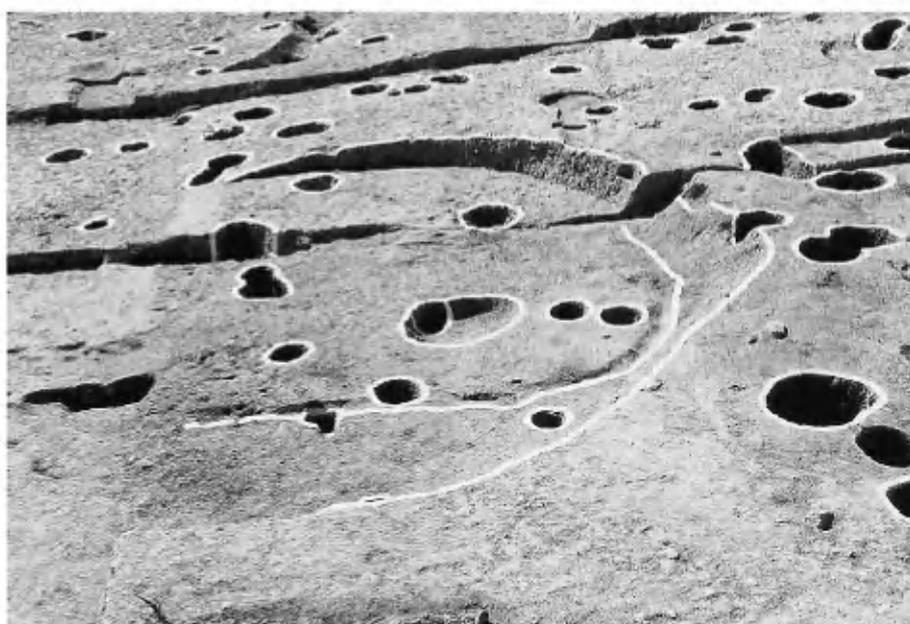
2 下段東半遺構全景  
(北東から)



3 最下段遺構全景  
(東から)



1 竪穴住居1~3  
(北西から)



2 竪穴住居4・5  
(東から)



3 竪穴住居10  
(南から)

図版 4



1 竪穴住居 6～8  
(東から)



2 竪穴住居 7 床面  
遺物出土状況  
(南から)

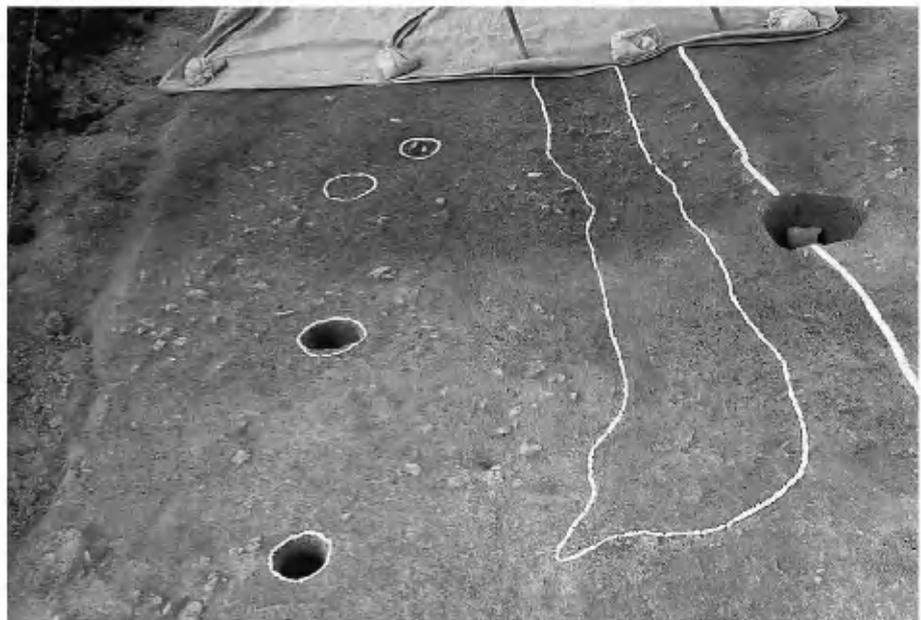


3 竪穴住居 7 床面  
石包丁出土状況  
(東から)

1 掘立柱建物 6  
〈西半〉  
（南から）



2 掘立柱建物 6  
〈東半〉  
（東から）



3 段状遺構 1・2  
（北西から）



図版 6



1 土壙 2  
(南から)



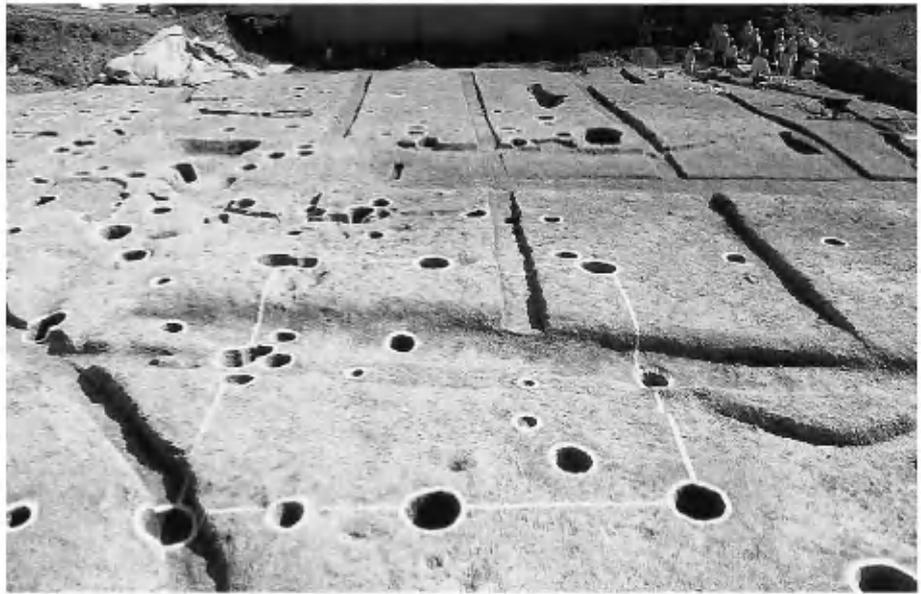
2 土壙 6  
(北から)



3 土壙 7  
(南から)



1 竪穴 1  
(東から)



2 掘立柱建物10  
(北から)

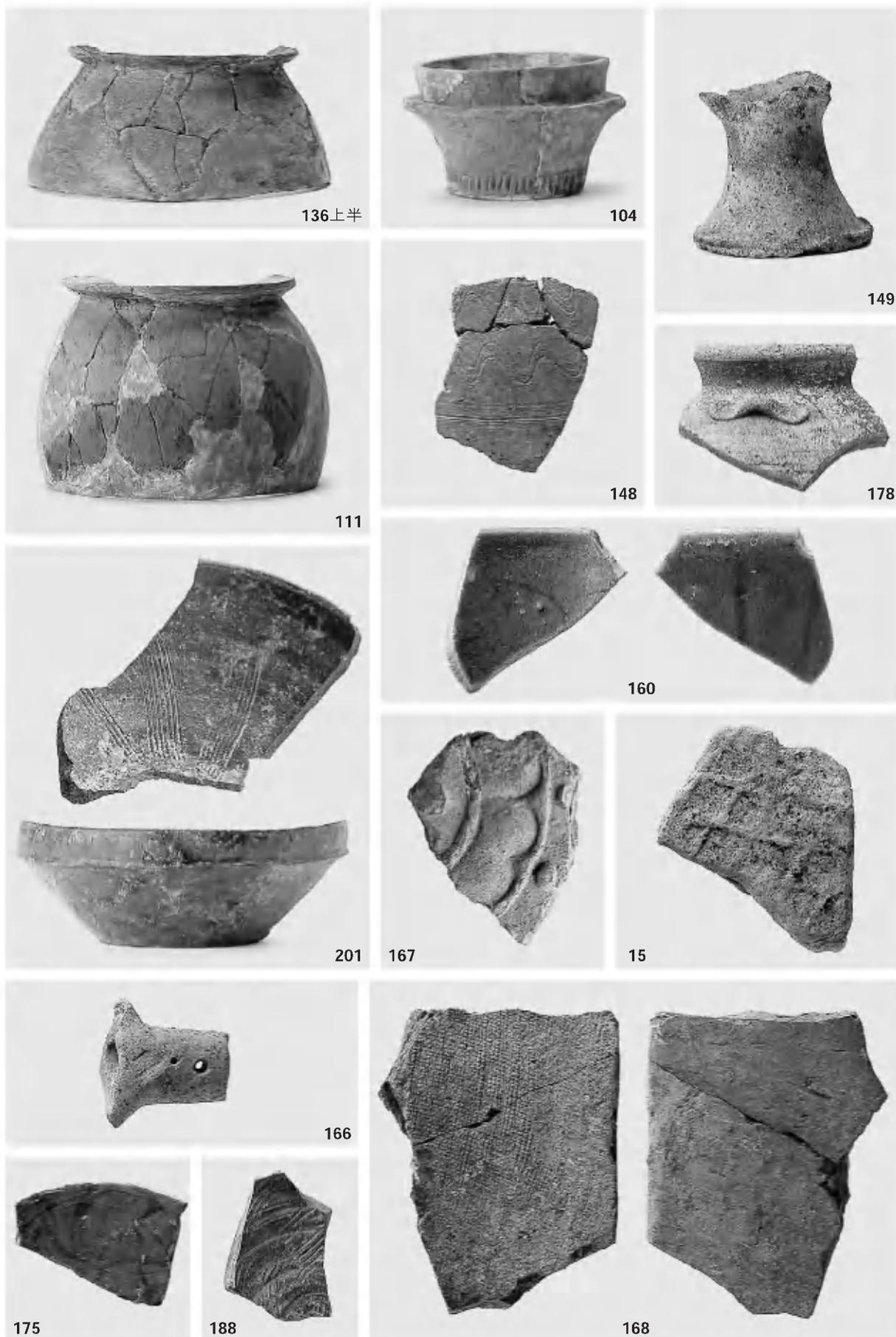


3 柱穴列 7・8  
(西半)  
(南から)

图版 8

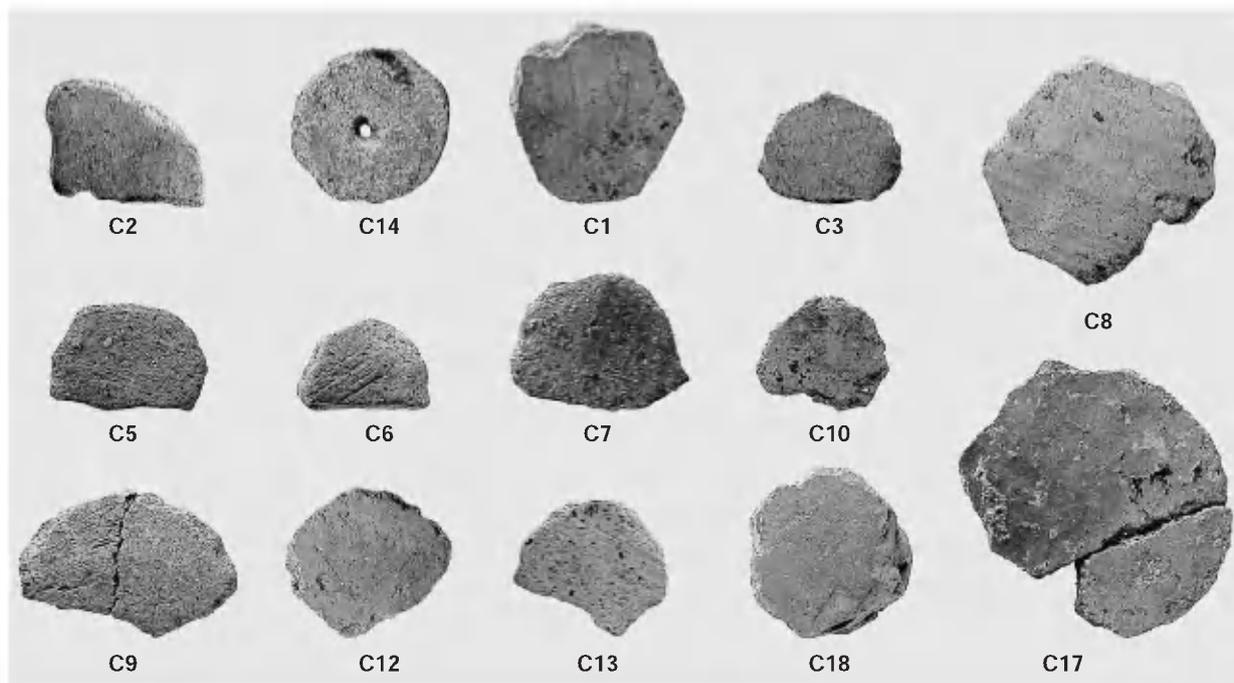


T10、竖穴住居 1・3・7、土壙 6 出土土器

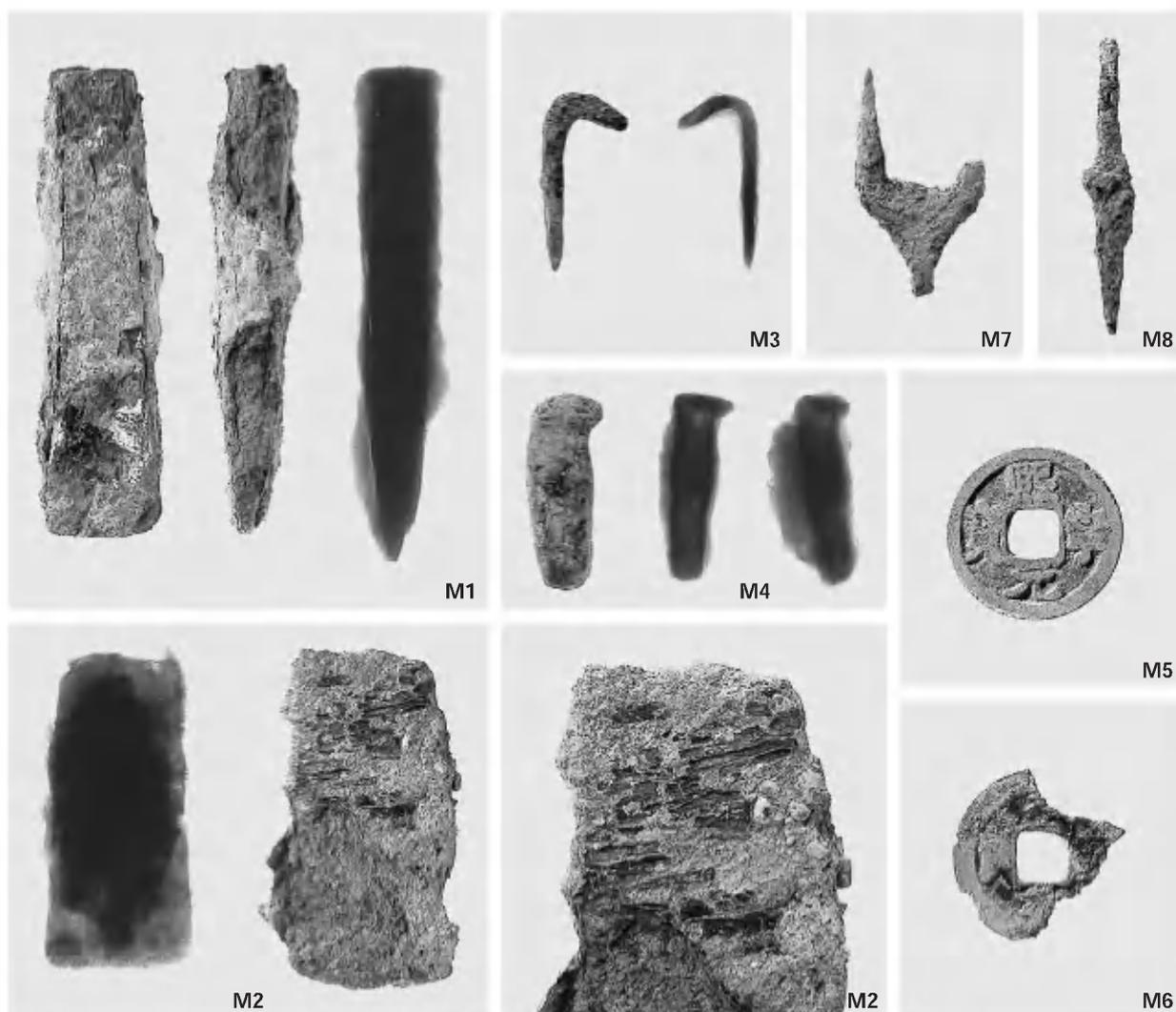


溝 2·4、斜面堆積、掘立柱建物 8·14、包含層出土土器・瓦

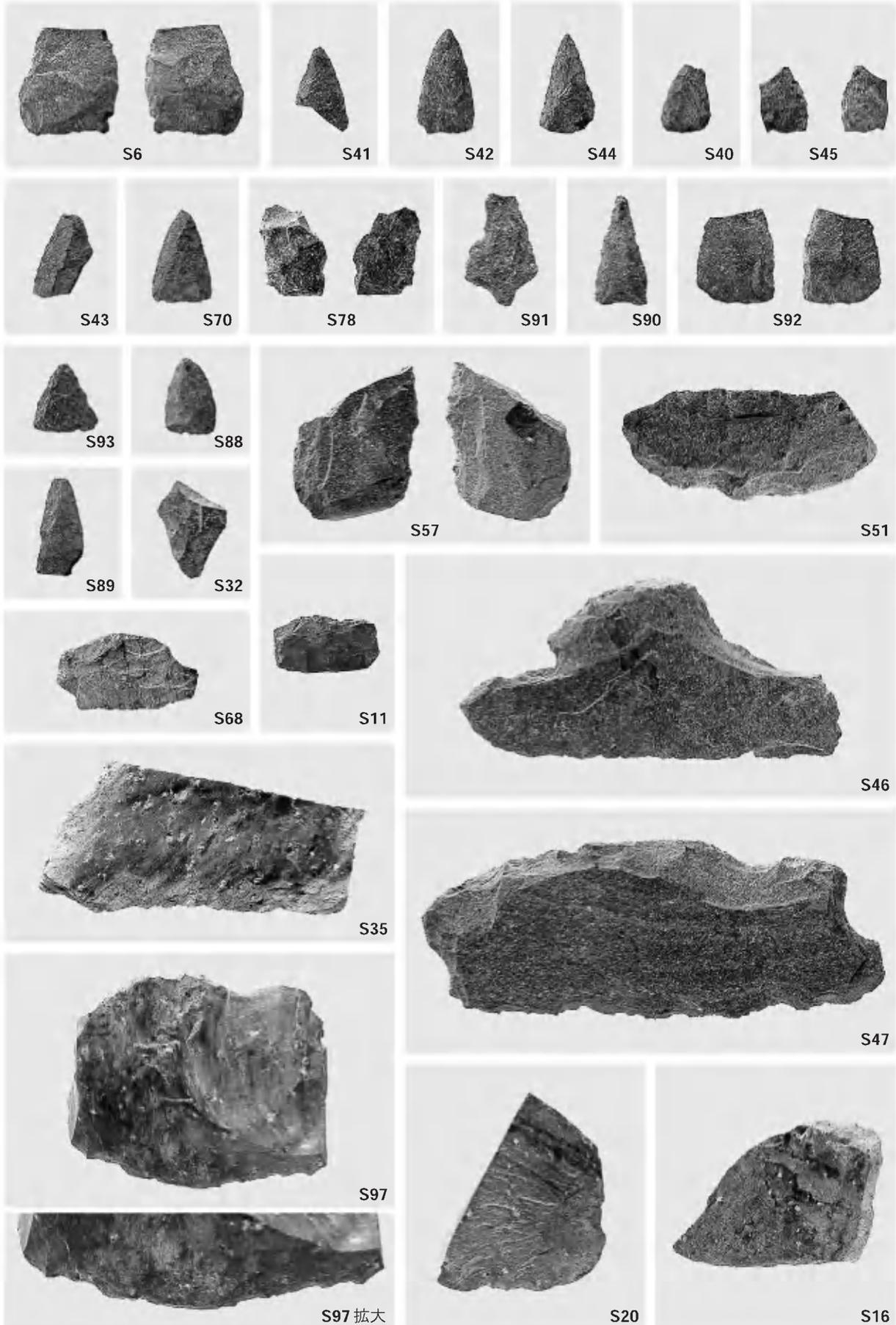
図版10



1 出土土製品 (1/2)

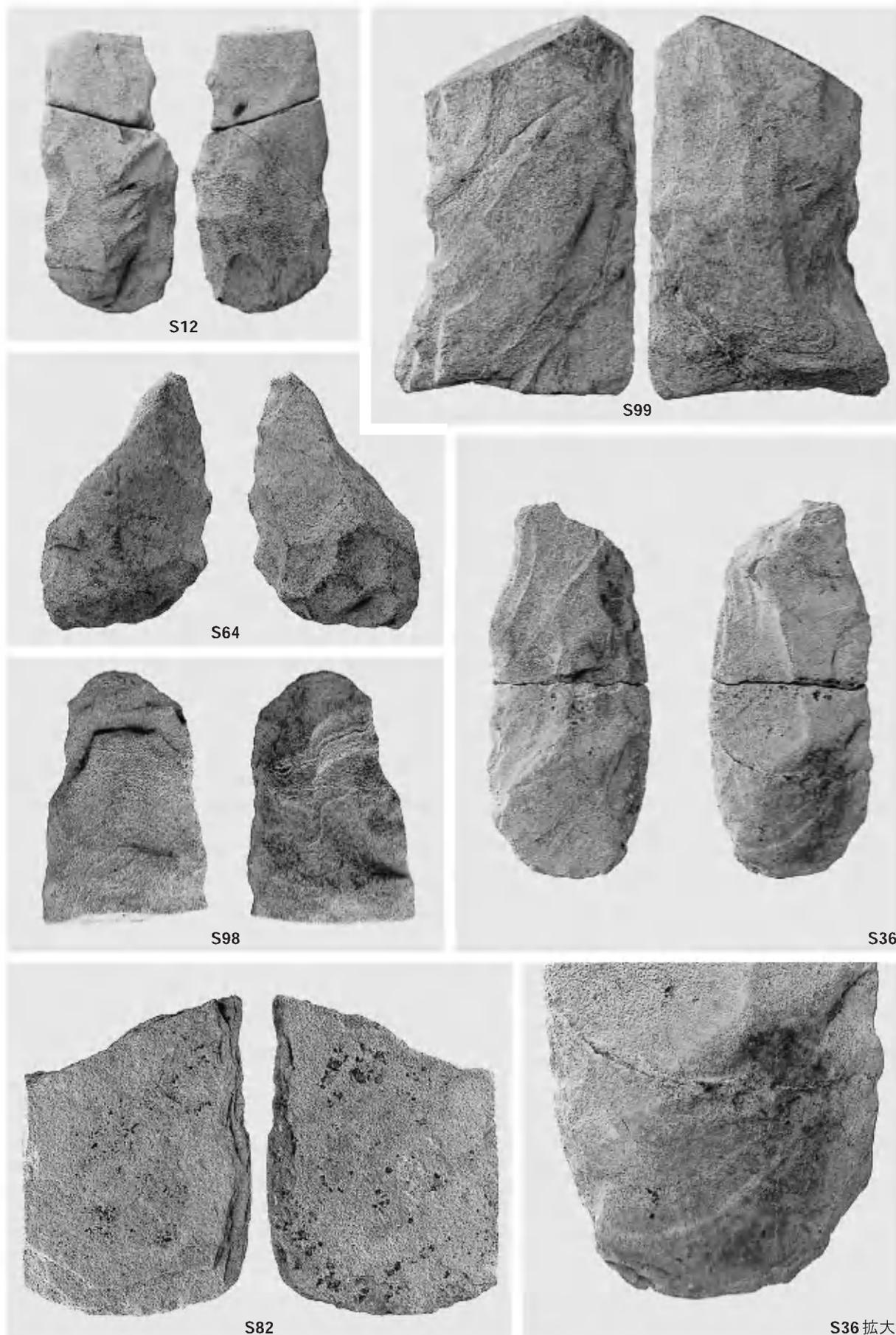


2 出土鉄器 (2/3、M2拡大は任意)・銅製品 (1/1)

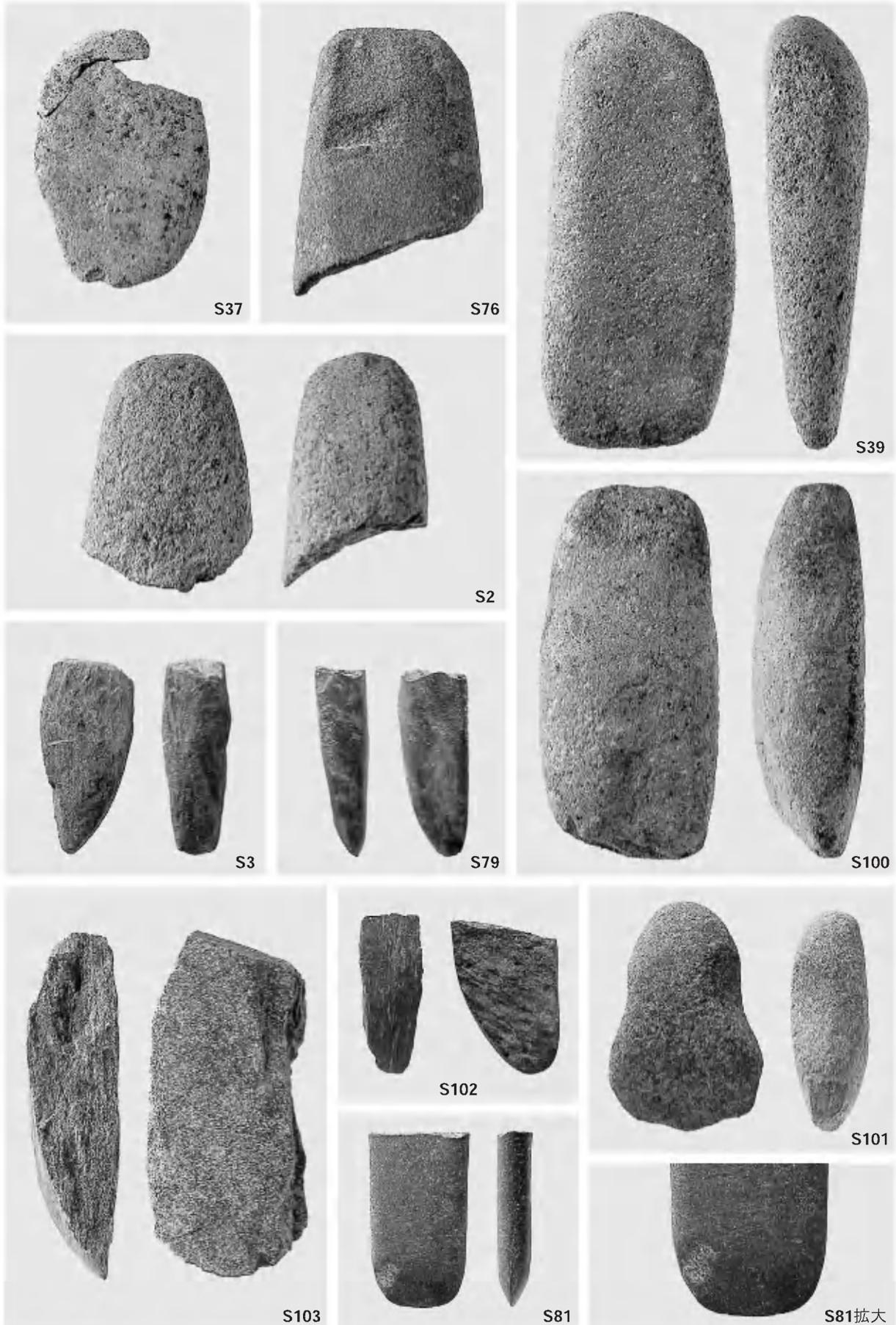


出土石器① (2/3、S45・S78は1/1、S97刃部拡大は任意)

図版12

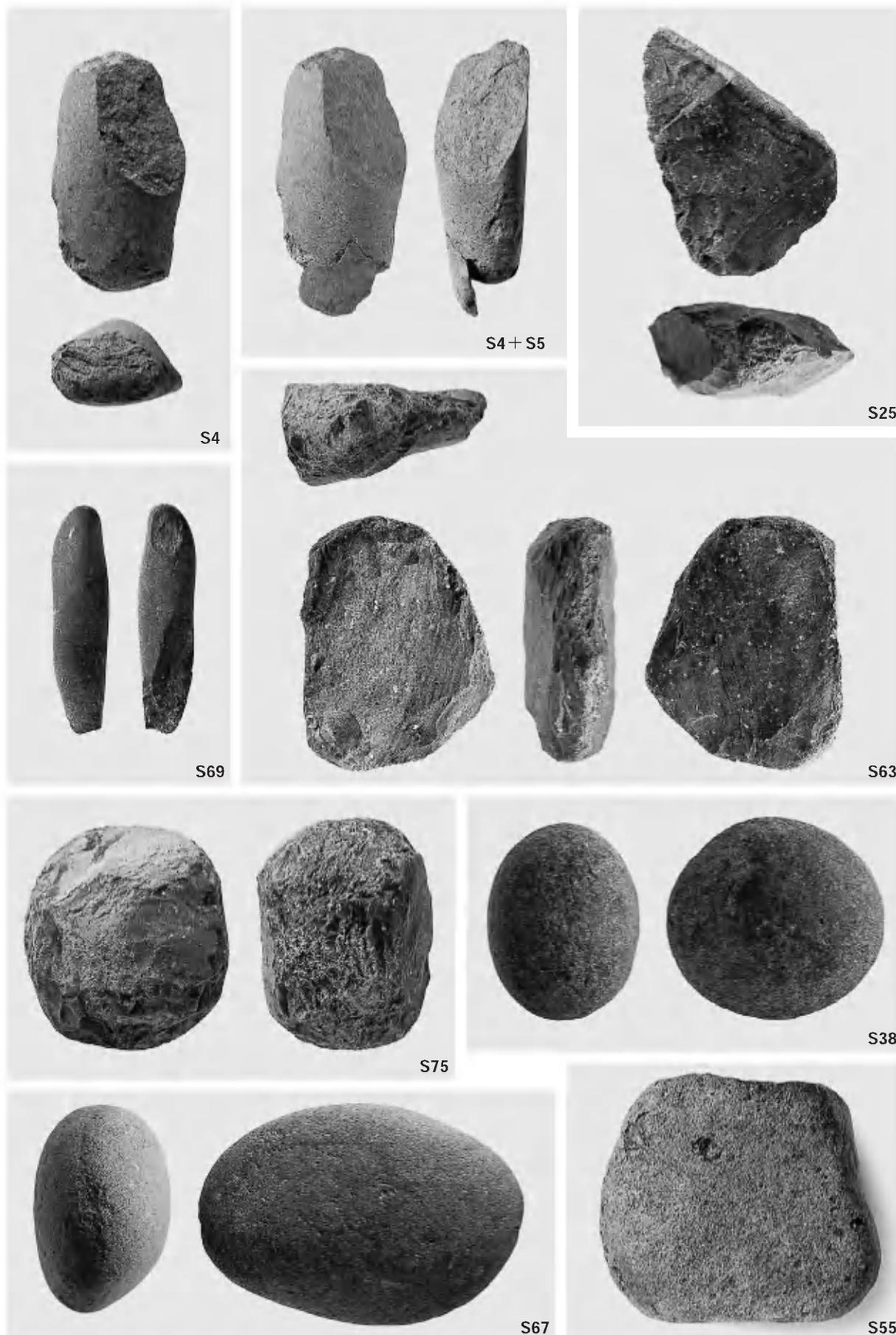


出土石器② (2/3、S36 刃部拡大は任意)

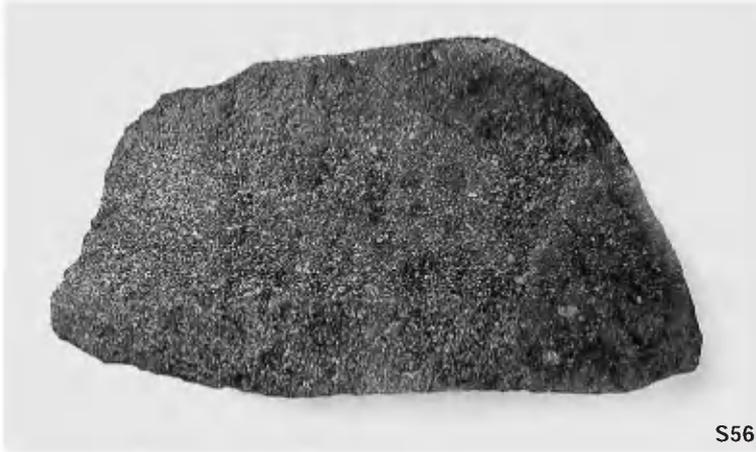


出土石器③ (1/2、S81 刃部拡大は任意)

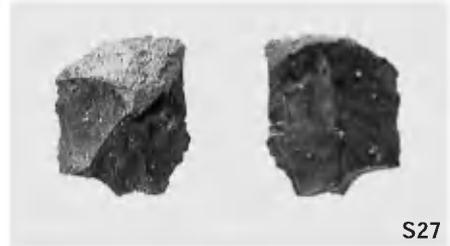
図版14



出土土器④ (1/2、S55のみ1/6)



S56



S27



S28



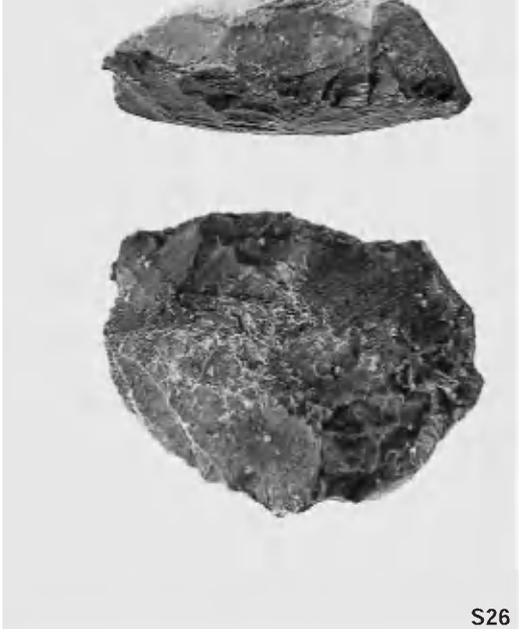
S111



S109



S26+S27+S28



S26

出土土器⑤ (S56は1/6、S109・S111は1/2、その他は2/3)

# 報告書抄録

ふりがな	しおのうなるいせき						
書名	塩納成遺跡						
副書名	主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査						
巻次	3						
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	187						
編著者名	杉山一雄・松本和男・物部茂樹・大澤正己・白石 純						
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター						
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻 1325-3 TEL 086-293-3211						
発行機関	岡山県教育委員会						
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下 2-4-6 TEL 086-224-2111						
発行年月日	西暦2005年2月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
しおのうなる 塩納成遺跡	おか やま けん 岡山県 あかいわぐんせとちょう 赤磐郡瀬戸町 しおのう 塩納	33321	134° 3' 50"	34° 45' 35"	2003. 6. 1 ～10.10	2,160	主要地方道 佐伯長船線 （美作岡山 道路）道路 改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
塩納成遺跡	集落生産	弥生時代	竪穴住居 掘立柱建物 段状遺構 土壇 溝	弥生土器、石器（包丁・鏃・ 槍・錐・斧・錘・台石・叩き 石・磨り石・残核など）、鉄 器（板状鉄斧など）		弥生時代中期の 石器製作址	
		古墳時代	段状遺構	須恵器・鉄器			
		古代		須恵器・土師器・瓦（軒丸 瓦・平瓦・丸瓦）			
		中世	竪穴 掘立柱建物 溝	土師器・瓦質土器・備前焼、 輸入磁器、鉄器（鏝など）			

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 187

## 塩納成遺跡

主要地方道佐伯長船線（美作岡山  
道路）道路改築に伴う発掘調査 3

平成17年 2月10日 印刷

平成17年 2月28日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山県岡山市西花尻 1325-3

発 行 岡山県教育委員会  
岡山県岡山市内山下 2-4-6

印 刷 西尾総合印刷株式会社  
岡山県岡山市津高651



古紙配合率100%再生紙を使用しています